Dragonstrife

くるみわりナックル

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

陽の当たる世界とはどんな所なのか？

想像すら出来ない世界で暮らしてきた男――霧咲真一は、今の自分には想像も出来ない世界へと、足を踏み入れた。

何不自由なく物が溢れ、食料が溢れ、人生と言うものについて考える程逼迫していない世界。

そんな世界へと足を踏み入れたのはいいものの、平和だったのは最初だけで、段々雲行きが怪しくなってきた……。

結局、霧咲真一と言う存在は、平和な世界とは相容れない存在らしい。

ならそれはそれでいい。

神？　悪魔？　天使？　堕天使？　龍？　上等上等、何でもかかってこいやこんにゃろう！

平和な世界だと思って足を踏み入れたら、割と人じゃない存在がいっぱい居たでござるってお話。

目次

プロローグ ―― 1
陽のあたる世界で学生生活！ ―― 5
袖触れ合うも多生の縁ってか？ ―― 12
便利な言葉スキンシップ ―― 20
Ｑ：悪魔って何？Ａ：ご主人様の様な存在にゃ ―― 29
月の下で吼えた者 ―― 38
ようこそオカルト研究部へ ―― 52
龍を宿す者 ―― 72
黒歌と真一は泥に塗れて暮らしている ―― 85
龍と人と悪魔とそれ以外 ―― 98
悪魔と堕天使と人間＝普通とドーナツシートと無慈悲 ―― 112
神の器とは ―― 130

プロローグ

見事……免許皆伝だ。

自身の肉体と魂が跡形もなく消失する直前に、笑みを浮かべてそう言った男が死んで数年。

暗がりで人一人来ないような場所に、ひっそりと積み重ねられた石の前に佇む青年とも少年とも言える男が、静かに積み上げられた石を見下ろしていた。

その脳裏に浮かぶのは、遺体すらその下にはなく、名も刻まれていない小さな墓の主の男が浮かべた最後の笑み。

上司であり師であり、男――霧咲真一にとっては父親のような存在でもあった男の小さな墓を前にして紡ぐのは、軽い調子の言葉だった。

「俺、この世界から出て行くわ。陽の当たる世界って見たことなかったからさぁ、ちょっと見てくる」

小さく笑みすら浮かべて、軽い調子で語る目つきの悪い男の言葉に、重苦しい雰囲気などない。

いうなれば、ちょっとその辺に散歩へ出ると言う様な口調だ。

「この世界で色々あったし、学ぶ事も多かったけど、学校ってのにも行ってみたいしな」

後暗い事などない明るい世界の事を、嬉々として語る墓の主の顔と言葉が真一の脳裏に蘇り、小さく浮かべた筈の笑みが更に深く刻まれる。

黒のジーパンに包まれた、スラリとした長めの足を小さな墓とは逆方向へと向けつつも、顔だけは半分振り返りつつ紡がれた言葉はやはり自然で軽い調子。

「じゃ、ちょっと行ってくるわ……『親父』」

豪快に笑い声を上げる髭面を思い出しつつ、紡がれた言葉を言い終えれば、それ以上は小さな墓へ向けて掛ける言葉などないと言わんばかりに進める足は止まる事がない。

だからこそ未だにその薄い唇が動いて紡ぐ言葉は、小さな墓の主へ

向けての言葉ではない。
空気を震わせ、虚空に溶けて消えるはずだった真一の言葉に応えたのは人の声ではなかった。
「行くぞ、黒歌」
虚空へと消えるはずだった静かな呟きに反応したのか、「にゃあ」と小さく鳴き声を上げた黒猫がどこからともなくふらりと現れ、真一の隣に寄り添うようにして位置取る。
歩調すらも真一に合わせ、機嫌良さ気に尻尾をゆらりと揺らして歩くその黒猫は、どうやら人の言葉を理解しているらしい。
その証拠に真一が発する言葉に従い、反応する素振りを見せている。
言葉の意味を理解し、内容を思考し、行動へ移すまたは反応する。
人間という理性と知能を併せ持った生き物と同じだけの知能を宿しているとしか思えない黒猫だが、この黒歌と呼ばれる黒猫がその程度で収まる猫ではないと証明する事態が起きる。
「具体的には何処に行くのにゃ？」
「学校に通う。一度どんな所か見てみたかったんだよな。場所はそうだな……近いし、駒王学園って所にしよう」
「駒王学園ねぇ……」
不思議な事に、黒歌と呼ばれた黒猫は、紛れもなく言葉を発していた。
表情の乏しい猫と言う動物の割には、眉を歪めてみたり、呆れた様に目尻を下げてみたりと非常に表情豊かである。
常識的に考えれば、異常事態も甚だしい光景を見た所……いや、聞いた所で真一の態度は変わらない。
歩調も変わらなければ表情も変わらず、あまつさえ当然だとばかりに会話を成立させている。
これは真一が突発的な出来事に対し、どんな事でも受け止める性格が影響している……訳ではなく、その答えは単純明快。
黒歌という黒猫が特別も特別な猫である事を、この時点で真一は知っていた。

これが答えだ。
「何だ？　ダメなのか、駒王学園」
「駄目って事はないにゃ。ただそう……あの学園は面倒にゃ。人じゃにゃい奴らが割といるにゃ」
　人どころか猫かどうかすら怪しい黒歌に、軽い調子で人じゃない奴らと言い切られる存在が、ただの学園に存在している事実に真一は「何を今更」と呆れてみせる。
「別に構わねぇだろ。面倒そうな事には首突っ込むつもりはねぇよ」
「ご主人様がその気がなくても、向こうから来る分にはそうはいかないにゃ。人だろうと人じゃなかろうと、強大な力を持つ存在は嫌でも問題の渦中に巻き込まれる宿命にゃ。私はそんなご主人様のトラブルメイカーに巻き込まれたくないだけにゃん」
「じゃあ何だ。お前、帰るか」
「嫌にゃん」
　軽い調子で離別を進言する新一に対し、それこそ考える暇もない程あっさりと黒歌はその進言を切り捨ててみせる。
　ツンと顔をそっぽ向けて、隣を歩く真一の足に尻尾で一撃見舞うおまけ付きだ。
「巻き込まれたくないなら帰ればいいだろ」
「何があっても私がご主人様から離れる事はにゃいから、ご主人様にはそれを察してトラブルの震源地に行って欲しくないだけにゃん」
「お前の都合で主人の行動を妨げんのは、お前的にどうよ？」
「妨げてるんじゃないにゃ、私はご主人様の身を案じてるだけにゃん」
　あぁ言えばこう言う奴だ……と天を仰ぐ真一だが、その歩みは一定の調子から止まる事なく、人通りの多い方向へと進んでいる。
　埃っぽいというか、空気が澱んでいると言ってもいい路地や建物の横をいくつもくぐり抜け、アンダーグラウンドとでも言うべきそこから抜けた世界は……。
「……あぁ、そうか、こんな所だったんだな」
　何か眩しい物を見た様に真一の瞳は細められ、何の不足も感じていない生気の宿った表情で歩く人並みを、羨望すら感じている瞳で見渡

す。
はっ……と短く息を吐きだし、真一の心の中に張り詰めていた糸のような物が緩む感覚を、彼自身しっかりと感じ取っている。
訳もなく意味のない大声を上げたくなった真一の足に、そっと何かが触れる感触。
その感触の原因を探るために、視線を右下に下げた先には、明後日の方向にツンとした表情を向けつつも気遣う様に真一の足へ尻尾を絡める黒歌の姿。
視界にそんな黒歌の姿を認めた真一は、一つ大きな息を吐き出し、顔を上げた時にはいつもと同じ目付きの悪さが目立つ笑みを浮かべていた。
「わりぃな、黒歌」
「別に……ご主人様がそんな調子だと調子が狂うと思っただけにゃ」
一応普通の人間が歩いているこの状況を鑑みてか、黒歌の発する声は掠れた様な微かな声。
しかし、真一の聴覚はしっかりとその声を拾い上げており、ますます笑みを深く刻む。
「んじゃ、行くか」
独り言の様に声を出す新一に、黒歌は、にゃあと一声上げた。

陽のあたる世界で学生生活！

霧咲真一が育った場所、陽の当たらないアンダーグラウンドな世界……故郷とも言えるその場所を捨て、家業の何でも屋を廃業して陽の当たる表の世界へ出てきて三ヶ月。

戸籍を金で買い、中古物件で売りに出されていた家を、金で雇った代理人を使って購入。

駒王学園を受ける為の準備を整え、ようやく受験という流れに漕ぎ着けるまでの時間が三ヶ月と言う時間だった。

各所への金や昔の人脈を使っての根回しに多大な時間を取られつつも、しっかりと準備は済ませた真一。

短期間の内に多大な苦労をして作り上げた霧咲真一と言う人物のプロフィールは、こうだ。

霧咲真一、現十五歳。

両親共に既に死亡しており、孤児となった後養護施設へとその身柄を移される。

事故で亡くなった両親の資産の受取人は当然真一になっており、ある程度以上の資産を保有しているが、その資産管理は一時的に身元保証人になった養護施設の院長に委ねられている。

小学までの教育は養護施設においてその課程を修了した事を保証され、両親の遺した資産を使い、養護施設の院長が身元の保証人となって中学へと通う。

中学卒業後は身元保証人となった院長の名を借りて、必要書類と共に養護施設を出る。

両親の資産で購入した一軒家に一人暮らしを開始すると同時に、近場に存在する駒王学園へと受験。

現在合否待ち。

「しっかし、アレにゃね……ツッコミ所満載のプロフィールにゃん」

「いーんだよ。それぐらい無茶苦茶な方が、余計な詮索をし辛くなるだろ」

「私が言いたいのはそんな事じゃないにゃ。大体突っ込まれてもご主

人様なら騙して、脅して、殴って乗り切るにゃ」
「騙して脅してまでは許す。だがオメェ、殴ってってのは言いがかりだろ。そこまで短気じゃねぇよ」
「騙して脅すだけでも相当ダメダメにゃ……ってご主人様が最低鬼畜野郎なのはどうでもいいにゃよ」
　主人と口にしながらも、軽く真一をこき下ろす内容の言葉を紡ぐ黒歌だが、当の真一本人は全く気にした様子もなく「ヒデェなおい」と何がおかしいのかソファに寝そべったまま笑い声を上げている。
　ソファに寝そべった真一のお腹の上で丸まった状態を維持しつつも、呆れたような表情で顔だけを起こし、じっと真一を見据える黒歌の言葉は止まらない。
「そこまでツッコミ所満載のプロフィールにしちゃったら目立つんじゃにゃいかって事。目立ったせいで、変な奴に目をつけられて、そこからトラブルに巻き込まれていくヴィジョンが容易に浮かんだにゃ」
「まぁ、そんときゃそんときだろ」
「だから、私はご主人様のトラブルメイカースキルに巻き込まれたくないって何度も言ってる……んっ」
「落ち着け落ち着け」
　不満しかない表情で真一に文句を垂れる黒歌だったが、途中で妙に艶のある声が上がり、それ以上言葉を紡ぐ事はなくただ体を震わせるだけになった黒歌。
　当然、その原因は目付きの悪い所はそのままに、小さく笑みを浮かべた新一にある。
　頭の後ろで組まれていた二本の腕の片方が、黒歌のお腹をゆったりと撫でている。
　どうやら黒歌はそれが気持ちいいらしく、起こしていた顔を再び真一のお腹へと落とし、そのついでとばかりに目蓋も完全に落としきっている。
　完全に意識は撫でられているお腹へと向かっているようだった。
　止める素振りも無い事から、慣れ親しんだ行動であると感じさせる

と同時に、黒歌も真一の手付きを気に入っているようだ。
「ま、なるようになるさ」
「別にご主人様の心配はしてないにゃ……ただ私的に面倒だっていう話にゃ」
「なら別にいいな」
「……ま、まぁ、どうしてもダメなら私がご主人様を守るにゃ」
真一にお腹を撫でられつつ丸まったままで、もにょもにょと呟く様に吐き出した黒歌の言葉に、自然と真一の顔には笑みが浮かぶ。
「そんときゃよろしく頼むわ」
「そ、そこは、え？　何が？　って聞き流す所にゃ！　ご主人様には鈍感スキルが備わってないのがダメにゃ所にゃ！　全然チョロくないにゃ！」
「逆に鈍感な奴ならチョロいから、幾らでも思い通りに操れるから楽だって言ってるお前の方がよっぽど怖いわ、俺」
中古物件として購入した一軒家に存在する、至って普通のリビングに置かれたソファの上で、喋る黒猫とどこかおかしな人間の時間は過ぎていく。
後に黒歌の予想が見事的中する事になるのは、神ならぬ身の真一には分からぬ事だった。

薄っぺらい革製のカバンを肩に担ぐ様に引っさげ、片手を制服のズボンのポケットに突っ込んだまま、目の前に存在する鉄格子のような学園の玄関口を見上げているのは誰であろう霧咲真一だ。
学園指定の制服の袖を通し、緩く結ばれたタイを見る限り、きっちりと制服を着ているという印象はまるでない。
ぼけっと学園の校門から、相当な広さを誇る敷地内へと視線を送り、その奥に存在する圧倒的なまでの質量を有した校舎を見上げている。
制服を身に纏い、学園の前にいると言う事は、つまりそういう事だ。
一月ほど前に霧咲邸のポストの投函された合格通知を受け取り、正式にこの学園の生徒として校門の前に立っているという事に他なら

ない。
呆気ない程の合格通知に、真一の記憶からその事実が消えかけた時、黒歌の言葉にその事を真一が思い出したのが数日前。
制服の採寸等、もろもろを終え、今日ようやく入学と相成った。
そして真一の目の前には圧巻の建物と光景、そして見渡す限りの女子女子女子……。
あからさまにげんなりしたような表情を浮かべ、その悪い目つきで校舎を睨みつける。
「チッ……失敗したな」
その言葉の意味する所は当然、周りを埋め尽くさんばかりに異性が存在する光景にある。
むせ返りそうな程に濃密な異性の香りが鼻腔を埋め尽くし、胸焼けでも起こしているのではないかと言う程に眉根を寄せている。
勿論、真一は女性が嫌いなわけではない。
むしろ女好きと言っても何ら不足はない……のだが、何事もバランスと言う物がある。
この光景はあまりにも過剰な光景であり、それにテンションを上げるほど真一は女性に困る生活をしていない。
真一のここに至るまでの敗因は、実際に学園へ下見に来た事が一度もないという事にある。
ここ駒王学園は、もともと女子学園だったのだが、近年共学化へ向けて動いていると言う事実がある。
その為、テストケースとして男子生徒も少数ではあるが受け入れている。
男子生徒の合格人数には制限が存在するが、駒王学園の中身を知っている男子生徒は、当然ながらこぞって受験しに来る。
思春期の男子生徒が興味を抱く駒王学園の中身、それは教育方針や教育レベル等と言った高尚な基準ではない。
もっと俗物的な基準であり、その基準に頷かない男などほぼ存在しないと言える事だ。
それつまり……女子生徒の容姿レベルが異様に高い。これに尽き

る。
多数の男子生徒が受験する上、周りには多数の女子生徒。
問題を起こさないように配慮した結果は、受験教室を男子と女子で分けると言う方法。
結局男子生徒が多数ひしめく教室に入り、尚且つ教室にたどり着くまでに多数の女子生徒を見掛けている事から、受験生徒が多い共学と言う結論に至った。
一緒の教室で試験を受けている殆どの男子生徒が落とされるなど、真一は夢にも思わなかった。
その結果が今の状態である。
「知ってたらぜってーこんなとこ受けてねぇ……」
如何にも疲れたと言う感情が滲み出る声で小さく呟く真一だが、その悪い目つきは爛々と輝き、校舎を睨みつけている。
この様な状況でそんな目をすれば通報物であると思うが、周りの女子は真一に対して汚物のような視線を向けているわけではなく、誰も近寄ろうとせず関わろうとせず声を掛けようとせず視線を合わせようとしない。
有り体に言えば、死ぬほど怖がられていた。
諦めた様に重い足取りで一歩踏み出せば、どこからか、ヒッ！　と掠れた様な声が上がる。
しかしその声を真一は気にする事なく、先程から重く前に行こうとしない足を無理やり動かし、校舎を目指す。
恐怖で身を竦ませ、関わらない様に真一を避けて歩く女子生徒達が作り出したのは、真一から放たれる恐怖のプレッシャーが作り出した不可侵領域だった。
しかしてその時である。
誰も犯せない不可侵領域を、躊躇なく犯す勇者が舞い降りたのは。
「ちょっといいかしら？」
「……あ？　俺か？」
「貴方以外誰がいるのかしら。今この場で、明らかに注目せざるを得ない状況を作ってる原因だと思うのだけれど？」

半身で振り返り、睨めつける様に視線を動かした真一は、不覚にもその視線を釘付けにされる。
さらりと風に流れる深紅の髪、強固な意思を宿した気高い青の瞳。
シャープさが先に立つ輪郭に加え、美人と言う言葉すら霞む、まるで霧の向こうに存在するような美しさを備えた顔立ち。
スラリと高い身長に加えて、反則的なまでのボディラインを備えた肢体。
言葉にしてしまえば美人。
しかし、たったその一言で片付けるには礼を欠くと思える程の美女がそこに立っていた。
その美女の言葉に、真一は辺りを見渡し、今のこの状況をしっかりと認識する。
肩を落とすようにして、フーッと声なき息を吐き出すと、顔を上げて体ごと赤毛の美女へと向き直る。
「まぁ、原因と言えばそうかもな……で？　俺に何の用だ？」
「用と言う程の事はないわ。ただ、周りの子が怖がってるみたいだから貴方に自覚して欲しかっただけ」
「そうかい、なら次からは気をつけるとするわ」
軽く肩を竦めて小さく笑みを浮かべる真一の返答に対し、ふわりと小さく笑みを浮かべる赤毛の女子生徒。
浮かべた笑みが振りまくその美貌に、周りの女子生徒は熱に浮かされたような表情を浮かべたまま、食い入る様に視線を向ける。
今や真一が独占していた視線は、赤毛の美女へと移り変わっている。
男も女も関係がない。
美しさから滲み出る求心力のような、言ってしまえばカリスマと言う形無き武器を滲ませる彼女に、視線を向けない事自体が失礼だと言わんばかりの影響力だ。
「ここで声を掛けたのも何かの縁ね、一緒に行きましょう？　校舎までだけど」
「別に構わねぇぜ。所でまだ名前を聞いてねぇんだが？」

笑みを浮かべて真一の隣に並ぶ美女と足並みを揃えつつ、真一は純粋な疑問を投げかける。
投げかけられた質問に対し、赤毛の女子生徒は瞳を見開き、少し高い位置にある真一の顔を見上げた後に艶のある笑みを浮かべてみせる。
「リアスよ。リアス・グレモリー。今年入学した一年生よ」
「霧咲真一。俺も入学したばかりの一年だ。よろしく頼むぜ、グレモリーさん」
「さん？　ふ、ふふふっ、無理しなくていいわ。呼び捨てで構わないわよ。同じ学年でしょう？」
「んじゃ、よろしく頼むぜ、グレモリー」
「えぇ、よろしくね？　霧咲君」
目付きの悪い黒髪の男子生徒と、気高い青の瞳を持った赤毛の女子生徒は思いの外ウマが合ったらしく、弾む会話をそのままに校舎へとその姿を消した。
後には二人の姿に複雑な表情を浮かべる一部の生徒と、二人の雰囲気に熱い溜息を吐く生徒達が残った。

袖触れ合うも多生の縁ってか？

入学初日で強烈すぎる個性を持った赤毛の女子生徒――リアス・グレモリーと別れ、それぞれで入学式を終えた後、指定されたクラスの教室へと何の躊躇もなく入り込む真一。

その真一が一番最初に目撃した光景は、多くの生徒が思い思いに過ごす光景。

しかし、一番印象に残って目を引いたのは、小さく笑みを浮かべて教室の奥から真一へ向けて小さく手を振る赤毛の女子生徒。

リアス・グレモリーが、艶のある黒髪が目を引く女子生徒を伴っている光景だった。

この時点で既に平穏な学園生活など望むべくもない真一だが、そんな事は気にせず、リアスの座る席の前にある椅子に陣取る。

体ごとリアスへ向けて、どっかりと椅子をまたぐようにして座る新一に、リアスは更に笑みを深く刻む。

「スゴい偶然ね」

「あー、そうだな。作為的な何かを感じる程にな」

「作為的ねぇ……仮に作為だとして、誰が得をする作為なのかしら？」

「……そうだな、お前、とかな」

軽い口調ながら、切り込むような気迫が込められた真一の言葉に、体に突き刺さるような視線を真一が敏感に感じ取る。

その視線の主は正面に座るリアスではない。

ちらりと目つきの悪い瞳を、リアスの横に立っている黒髪の女子生徒へと向ける。

先程まで穏やかに目尻を下げていた瞳が、切れそうなほど鋭い瞳へと変化し、その切っ先を真一へと向けている。

だが、残念ながらその様な視線に怯む真一ではなく、小さく笑みを浮かべて視線を交錯させる。

数秒、あるいは数分かもしれない。

時の流れが曖昧になる程に交わした視線で、言葉なき応酬を繰り広げた結果は、黒髪の女子生徒の目尻が下がった事からして悪い結果で

はないのだろう。
「それでリアス？　貴女と親しそうなこの殿方はどう言う方ですの？」
「ごめんなさい、紹介が遅れたわね、朱乃。この人は霧咲真一、さっき校門でちょっとした事があってね、そこからの付き合いよ」
「霧咲真一だ。グレモリーとは校門から校舎までの長い付き合いをさせてもらっている」
「うん？　長い？　……うふ、うふふっ、この人面白いですわ。とてもいい殿方とお知り合いになったものね、リアス」
「でしょう？　私の縁も捨てたものじゃないわ……婚姻関係の縁は捨てたいけどね……」
　朱乃と呼ばれた女子生徒は、真一の受け答えが気に入ったらしく、笑みを浮かべて受け入れる態勢だ。
　予想通りの朱乃の反応に、自信に満ちた微笑みを浮かべるリアスだが、その声は後半になればなるほど小さくなる。
　それに伴って何やら表情までジメッとしていて空気が澱んだ様な、生気のない表情へと変わっており、今にもブツブツと独り言を羅列しそうな虚ろさだ。
　地雷な感じの話題ではあるが、反応から見るに今すぐどうこうと言う切羽詰った問題ではなさそうだと判断し、婚姻関係云々には首を突っ込まない事にした真一は朱乃へと視線を向ける。
「グレモリーがジメモリーになっちまった……悪いが自己紹介、アンタ自身で頼むわ」
「うふふ、はい、私は姫島朱乃。見ての通り、リアスの友人ですわ。よろしければ私とも仲良くしてくださいね？」
「美人と知り合っとくと何かと得だからな、こっちこそよろしく頼むわ」
「あらお上手、うふふ」
　ふわりと穏やかで安心するような空気を纏う明乃がころころと笑い声をあげ、その度にふるふると制服の奥で柔らかな動きを見せる特大級のそれを、真一は遠慮なく見据え頷く。

「なるほど、リアスの友人なわけだな」
「どこ見て言ってるのかしら」
「胸だな」
「あらあら？　うふふ、触ります？」
「素敵な提案だ。ただそうなー、そこの赤毛の視線が刺さるからな、またの機会にしとくわ」
「あらリアス？　ダメよ女の子がそんな顔しちゃ、台無しよ？」
「まさかこのタイミングで、私の表情を注意されるとは思ってなかったわ……」
　己を取り戻したリアスの剣呑な瞳に対し、真一が水を向けて朱乃が撃ち込むと言う集中砲火を受ける事態に、思わず眉間を揉み解すリアス。
　リアスとはまた違った意味でウマが合った様子の朱乃が纏う雰囲気は、リアスに対して接する様な雰囲気へと変貌しており、真一はこの短時間で相当気に入られたらしい。
　ただ余りにもねっとりと絡みつく朱乃の視線は、余す事なく観察すると言う意志が込められており、普通ならばその視線に辟易しそうなものだがそこは真一。
　特に気にした様子もなく、いつもの様に小さな笑みを浮かべて受け止めている。
「あら？　どうやらここまでの様ですわね。先生が来ましたわ」
　ふと何かに気がついたように顔を上げる朱乃の言葉に、真一も問題なく頷き同意を示す。
　数多の音が飛び交う教室や廊下の中から、しっかりとこの教室へ向けて迷いなく足を向けている足音を、真一の聴覚は問題なく聞き分けている。
　まだ席は決まっていないため、正式に席を決定するまでは自由席として、空いている席へ座っていればいい故にリアスと真一はその場を動く事はない。
　リアスの横に立っていた朱乃は、目尻の下がった瞳で辺りを見渡し、小さくため息を吐く。

「んじゃ、姫島、これからよろしく頼むぜ」
「こちらこそよろしくお願いしますわ」
リアスと真一の近くで空いている席がなかった為、少し残念そうに遠くの席に着く朱乃を見送り、リアスと視線を交わして互いに肩を竦めて教壇へと視線を向ける。
霧咲真一、私立駒王学園入学初日が始まった。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　リアス

教室に入ってきた教員がＨＲを始め、教室内の生徒が全員、教卓に手をついてこの学園の説明や注意事項等を語る教員に目を向ける。
やはり真面目な生徒が多いこの雰囲気、そんな中で、私の視線は自らの前の席に固定されていた。
私にとってはこの学園の説明や教訓、注意事項など聞いても仕方がない。
この地は私、リアス・グレモリーの……正確に言えばグレモリー家の管理管轄下にある地であり、そんな立場の私がこの学園の事を知らないはずがない。
仰々しい言い回しで定められた学則を眺めて覚え、生徒手帳の中身を暗記し、主要ポストについている教師や生徒の名前を覚える。
この学園に来るまでにこなしたつまらないそんな作業よりも、よほど興味を引く存在が今私の目の前にいる。
それだけで教員の垂れ流す既に知っている事柄を聞くより、よっぽど有意義な事実だわ。
何を大事にして、何を犠牲にするか、それは人それぞれだとは思うけれど私の興味は教員の話より目の前に座る背中が気になる。
ただそれだけの事よ。
（こうして見てる限り、至って普通の人間なんだけど……）
黒い髪に、私より少し高い身長。

体型は細身だけれど、その身のこなしは十全に洗練されていると言っていい。
少なくとも、私はこの人ほどしなやかに普通の動きをする人物をまだ見た事がない。
目付きは悪いし、言葉遣いはこの駒王学園の生徒層から見てもいいとは言えないし、何よりその纏う雰囲気が一般人にしては荒々しすぎる所があると思うわ。
（でも……）
そう……でも、よね。
でもそれだけではない。
あの視線と雰囲気の中での私に対する立ち振る舞いに、遠慮のなさ。
周りの空気の変化に鈍いとも取れるが、それは違うと私の頭は確信している。
これでも私はあのお兄様の妹で、グレモリー家と言う大きな看板を背負っている事から、客観的に見ても雰囲気が一般人とは違う筈。
区別も差別もするつもりはないけれど、ある種の格……みたいな物が少しは備わっているはずなのよ。
自分が明らかに恐怖で避けられて、注目されている事を自覚していながら、その後の私に対する対応……。
全て分かった上で、気負う事なく私に対応したこの霧咲真一と言う男子生徒……一般人では考えられない胆力の持ち主として、当然私は警戒レベルを引き上げる。
まさか神器持ち？　と一つの可能性も過るけれど、そんな妙な気配もしない。
間違いなく彼はただの人間だ。
一般の人間と変わらない気配を滲ませつつも、身のこなしや重圧慣れしているような胆力を備えたそのアンバランスさが、より一層私の興味を惹きつける。
（それに、私は……嬉しかった）
グレモリーを背負い、その責任を背負うに誇りを感じてはいる。

学園に来れば、グレモリーと言う名前を知る者はおらず、またその家名の影響力と規模を知る者もいない。
それ故、少しばかりの息抜きが出来ると思ってはいたけれど……蓋を開けてみれば皆私の雰囲気に気圧され、一歩引いた位置で私と接し私を見る。
グレモリーとして見られなくとも、幾重にもフィルターを掛けた視線で、今度はリアス・グレモリーと言うブランドを見ている。
私の視線の先にいる霧咲真一と言う男の子は、そんな重圧、フィルターを跳ね除けてありのまま私に接してきた。
警戒するのと同時に、その事が、ただ純粋に嬉しかった。
霧咲真一と言う男の子の前では、私はただのリアスと言う女の子で居ていいと、言葉の外から言われたような気がして……。
鋭い所もある癖に、妙な所で人の心の中にするりと入ってくるのが上手い。
多分霧咲真一と言う男の子は、そう言う人物なのね。
（朱乃にも随分と気に入られたみたいだし……）
教員の話も佳境に向かっているのだが、依然私の頭の中は目の前に座る男の子の事で一杯だ。
リアスと言う、ただ一人の女の子としての評価はそれでいい。
一旦置いておくとして、悪魔リアス・グレモリーとしては、気に入ったから問題は置いておくと言う訳には行かない。
一般人として捨て置けない雰囲気を持った『一般人』の霧咲真一と言う人物が、どういう人物か正確に知る必要があると、私自身考えている。
彼はそう……『鼻がきき過ぎる』勘がいいと言えばいいのか、少ないピースの中から一つの全体像をぼんやりと浮かべる事が出来る感性を持っている。
神器と言う特殊な要素もなしに、その感性をこの歳で身に付ける事自体が異常な事だ。
隠さずに言ってしまえば、彼を危険のない一般人として捨て置くのは更に危険な事だと私の勘が告げており、そしてこれは多分間違って

いない。
勘だけではなく、断片的に拾った彼の情報だけでも、その考えは十二分に確信の域に達する。
私は彼がを識る前から、彼を『知っている』。
本当に彼を最初に見たのは偶然で、この学園の受験日だ。
浮ついた雰囲気に、期待と不安を抱く空気が渦巻く生徒が跋扈する中で、ただ一人気だるげな雰囲気を纏う男の子。
そして、これからの出来事に期待も不安もない、ただ普通の安定した空気を纏う彼に興味を持った。
それが始まりであり、彼はこの学園に来ると言う妙な確信に従って、朱乃や私自身の人脈を使って彼の経歴を調べた。
その結果、出てきたのはパンドラの箱だった。
開くべきか、開かざるべきか……一般人と言うには波乱万丈且つ、ツッコミ所満載な経歴が私の目の前に横たわっていた。
それが彼自身が仕掛けた罠の様にも見えるし、深く掘り下げて欲しくないからこその防壁にも見える。
この経歴が本当の事などとは、私は頭から信じていない。
彼と言う人物をほんの少し識り、それは更に揺るぎない考えになるが、その一方であながち全てが嘘と言う訳でもないとも思う。
霧咲真一と言う人物の、ある種完成された感性を見るに、彼の経歴全てが嘘と結論づけるのは早計だ。
どの様な技術でも、それが磨かれる環境が必要だわ。
それはつまり、彼がそう言った感性を磨かざるを得ない環境に身を置いていた証拠に他ならない。
彼自身が有する感性を信じるならば、彼は私が霧咲真一と言う人物について、既に何かしらの情報を得ている事に気がついている。
そんな彼を総評すればこうなる。
自然と釣り上がる口元を抑えきれず、瞳が細くなるのも抑えられない。
私自身の手で口元を覆い、つるりとした肌とほっそりとした顎を撫でる様な仕草で自然に見せる。

（とても面白いわ……霧咲君）

彼に対する私の総評は、ただ簡単なその一言に尽きた。

便利な言葉スキンシップ

真一、リアス、朱乃の顔合わせから約半年。
三人とも個人個人の友好関係はあるものの、入学当初からウマが合ったと言う事実は大きいのか、三人で行動する事が圧倒的に多い現状。
いくら女子が圧倒的多数でも、下世話な噂がいくつも流れるのは仕方の無い事だ。
朱乃とリアスは親しい者限定だが、二人共行うスキンシップには、艶の様なものが多分に含まれる。
そんな二人が真一に行うスキンシップを見ていれば、邪推するのも仕方ない事ではある。
しかし男女的な意味で付き合いを聞かれれば、リアスも朱乃もはっきりと否定しており、噂が立つのは仕方がないものの何時までも消えない事には別の原因が存在する。
その原因とは、当然、噂の中心である三人の中で唯一の男子にあるのは明白。
「おはよーさん、グレモリーに朱乃」
リアスと朱乃が登校中、ちょうど正門を越えた辺りで真一がその姿を見つけ、後ろから声をかけつつ近づく。
それだけならばごく普通にありふれた光景だが、普通ではない原因と噂が消えない原因はここからだ。
リアスと朱乃の間に収まるようにして位置取ると同時に両手を動かし、右手はリアスのお尻に、左手は朱乃の胸へ。
両方共まともに鷲掴みにしており、肉に食い込む指の感触を堪能している様に二度ほど握り締める。
「んっ……」
「毎朝貴方も飽きないわね……」
朱乃は何も言う事なく胸に食い込む指の感触を受け入れ、リアスは呆れた様な言葉を発するものの、声は拒絶しておらず表情は小さく笑みすら浮かべている。

二人共頬が少し紅潮しているが、それ以外の振る舞いや雰囲気は、普通にしている時とそう変わらない。
やがて感触を堪能し終えたのか、真一は胸と尻から手を離し、薄っぺらい鞄を肩に担ぐようにして持ついつもの登校スタイルへと戻る。
そして、そのままごく自然にリアスと朱乃の間へと収まる。
真一の顔には悪びれた表情は浮かぶ事はないし、朱乃とリアスも真一を責めるような空気がない。
三人にとってこれはスキンシップの内であり、リアスの言った通り、毎朝行われている儀式の様な物らしい。
何時まで経っても消えない噂の原因はこれである事は明白で、真一からの過剰すぎるスキンシップと、それを拒否しないリアスと朱乃。
噂が消えないのも当然だろう。
「んで？　今日放課後どうするよ」
「来た途端にもう放課後の話？　幾ら何でも早いわよ？」
「まぁまぁ、いいじゃありませんか、私カラオケに行ってみたいですわ」
「行った事ないのか？」
「私もないわね」
「お前らな……ボッチ仲間が寄り添ってるわけじゃねーんだからよ……」
カラオケに行った事がないと明言する二人に対し、驚いた様な呆れた様な声を出し、肩を竦める真一。
そんな彼にリアスと朱乃は、共に不服そうな表情で真一に対し抗議の声を上げる。
「失礼ね。私は騒々しい所が苦手なだけよ」
「全くですわ。リアスに同じく、ですわね」
((そこは怒るのかよ……))
登校途中に三人のスキンシップを見せられた全生徒達の心が、余す事なく一つになった瞬間だった。
「あっそう……んじゃカラオケはやめるか？」
「私行ってみたいって言いましたわよ？」

「騒々しい所は苦手なんだろ？」
「あのねぇ、何処に行くかも重要だけれど、誰と行くのかも重要なのよ？」
「ふーん……三人でなら行ってもいいって事か」
「そういう事ね」
「そういう事ですわ」
リアスと朱乃にとって、やはり入学当初すぐに仲良くなれたメンバーと言うのはどうも特別らしく、二人共何か特別な事をする時は必ず三人揃っているにすると決めているらしい。
リアスと朱乃だけでもダメ、リアスと真一だけでも、朱乃と真一だけでもダメ。
三人揃ってこそ、特別な事をする価値があるようだ。
友達……と言うよりも、仲間と言ったほうがしっくりくるのかもしれない。
「んじゃ、放課後はカラオケ行くかぁ」
「ええ」
「はい」
古典の課題はやったか、数学で少しわからない所がある、等とくだらない会話に花を咲かせつついつもの様に三人は校舎の中に姿を消した。
学園内で今一番目立っているグループがいなくなった事によって訪れたのは、形容し辛い安心感が満ちた空気だった。

昼休み。
適当にパンを見繕った真一は、リアスと朱乃の待つ教室へと向かっている途中、少し冷淡とも感じられる冷たい鈴の様な声に呼び止められた。
目つきの悪い瞳を向けた視線の先には、メガネがよく似合う切れ長の瞳が印象的で、艶のあるショートの黒髪が目を引くスレンダーな女子生徒の姿があった。
そして、その女子生徒の名前を真一は知っていた。

「何だ、支取じゃねぇか。何か用か？」
「特別な用と言う程ではないですが……ちょっとしたお小言を」
「小言言われるとわかってて残ると思ってんのか？」
「えぇ、貴方は天邪鬼ですからね」
クールに小さく笑みを浮かべて、全てを見通したような女子生徒――支取蒼那の態度に、真一は小さな溜息と共に小さく笑みを浮かべて肩を竦める。
「へいへい、で？　どんな小言だ？　大体予想はつくけどな」
「お察しなら話が早いですね。朝の一幕、見ていましたよ？　出来るだけ控えてください。特に、人目のある所では」
「やめろとは言わねぇのか」
真一の楽しそうな声に対し、それこそ愚問と言った風に肩を竦めて見せる蒼那は、間違いなく才媛である。
蒼那にとって、真一と言う男子生徒を知る事となった原因はリアスだが、真一の表面的な性格など少し付き合えば直ぐに理解出来る。
その上で、彼に何かをやめろと面と向かって言う事は逆効果である事を、支取蒼那と言う生徒は知っていた。
ある種の諦めとも取れるかもしれないそれは、しかして真一という人物を知ったという証でもある。
「貴方にやめろといった所で逆効果でしょう？」
「よくお分かりで……生徒会に入る奴は頭の出来からして違うのかねぇ」
「あら、その様な評価をもらえるとは光栄ですね」
リアスや朱乃と言った、容姿からして華やか且つ、雰囲気も人を惹きつける華々しい雰囲気と言う訳ではない蒼那。
しかし、一部の知名度はリアスや朱乃を上回る程であり、その要因として挙げられるのはただ一点。
支取蒼那と言う女子生徒は、とにかく優秀である、と言う点だ。
先に挙げた二人程目立つ容姿をしているわけではないが、それでも美人と言うには忌憚ない見た目に、一年にして生徒会に入る行動力と優秀さ、運動でも壊滅的に悪いと言う事実は何処にもない。

むしろ運動神経は発達している方であると言えるだろう。
まさに文武両道を地で行く成績を残しながら、公明正大とも言える気質を持っている彼女は、持って生まれたカリスマで人を惹きつけるわけではない。
自らの残してきた軌跡と積み上げた結果によって、人をついてこさせる。
持って生まれたカリスマで人を惹きつけるリアスとは、また違った求心力を持った人物だ。
支取蒼那と言う人物を頭の中で軽く分析している真一は、先の発言から後、件の蒼那がじっとこちらを射抜くような瞳で視線を送っている事に気がつく。
彼女いわく、お小言の返答を待っているのだろう。
律儀にこちらの返答を待つ蒼那の姿に、真一は小さく笑みを浮かべて肩を竦める。
「りょーかいりょーかい。今後は控える事にするさ」
「はい、その返答を聞けて安心しました。私はこれでも貴方の事を買っているのです。出来れば、その信頼をクーリングオフさせる様な事態にならない事を祈っています」
「あいよ」
「では私はこれで……」
「あ、ちょっと待て」
「何でしょう？」
「ついでだ、一緒に飯食ってかねぇか？」
これもなにかの縁だろ、と軽く言葉にする真一に対し、蒼那は純粋に驚いたような表情を浮かべている。
二人で食べようと誘われたと思っているのかとも思う真一だが、どうもそう言う雰囲気ではない。
「何だよ？」
「三人でいる所に乱入すれば、烈火の如くリアスと姫島さんが怒ると言う噂が……」
「お前もその口かよ……」

眉間を揉みほぐす仕草のまま呆れた様に声を上げる真一に、珍しく瞳を丸くして目を見張っている蒼那から、違うのですか？　と戸惑ったような声が上がる。
「違うに決まってんだろ。俺もアイツ等もそんな短気なわけねぇだろ」
「それはまぁ、そうですが……あの二人が特定の男性と懇意にしている所等見た事がないので、何分私も初めての事態なんですよ？　貴方の様な存在が」
「まぁ、理解してもらえたと見ていいのか？」
「勿論」
「じゃあ、どうするよ」
「そちらがいいなら喜んで」
　んじゃ、行くか、と声を上げて歩き出す真一の隣に蒼那が並び、目指すは一年Ｂ組の教室だ。

「悪いな、遅くなった」
「遅かったじゃない……ソーナ？」
　聞こえてきた真一の声に、振り向きつつ小さな不満を漏らすリアスの言葉が止まり、真一の隣に並ぶ自らの友人の姿に少しの驚きが表情と口に出る。
「お邪魔するわよ、リアス」
「拾ってきた」
「あらあら、ダメですわよ真一？　ウチはペットはダメとあれほど言ったじゃないですか」
「やだやだ！　このペット飼いたい！　お母さん許して！」
「いけません！　元いた場所に戻してきなさい！」
　至って普通に挨拶を交わす蒼那だが、真一の言葉を皮切りに、すかさず朱乃から何かが始まってしまったような言葉が飛び出てくる。
　才色兼備を地で行く蒼那の目が、完全に点になっているが、状況はお構いなしに進んでいく。
　真一に至っては、駄菓子屋の前に広がるアスファルトに寝転がって

駄々を捏ねる子供もかくや、と言わんばかりの気合の入った演技だ。
動かす手足によって、規則的に並べられているはずの机と椅子が、乱雑に蹴散らかされていく。
そんな羞恥心など欠片もなく、失う物等何もないと言わんばかりの気合の入った真一の演技に対し、朱乃はまさに子供を穏やかに叱る母親の様に人差し指を一本立てて「めっ！」と叱っている。
目の前で繰り広げられているあまりに形容し難い光景に、蒼那は完全に白昼夢を見ているような気持ちに襲われる。
いっそ夢であれば……と思う気持ちはわからなくもないが、そんな光景を他所に、リアスはマイペースに自分の弁当箱を広げている。
真一と朱乃が繰り広げるコントなど、微塵も気にしていない様子だ。
「リ、リアス？　これは……何？」
「え？　あぁ、ソーナは知らなかったわね。別にいつもの事だから気にしなくていいわ」
「おい朱乃、どうすんだ。リアスからワンパターン過ぎて詰まらない、と辛口コメントが飛んできたぞ」
「いけませんわね……私達コンビの絶体絶命の危機かもしれませんわ、こうなっては解散も辞さない覚悟で……」
これ以上何が起こるというのか……真一だけならまだしも、あの姫島朱乃がこんな事をするなど、一体誰が予測できたであろうか？
目の前で巻き起こる嵐の様な光景に、蒼那の目の前は闇に包まれようとしていた。
しかしその直後、リアスが両手を合わせ、乾いた音が教室に響き渡る。
その瞬間には真一も朱乃も席に着いており、朱乃は弁当、真一は調達してきたパンを目の前に置いて手を合わせている。
突っ込む暇も笑う暇もなく、状況が進んだ事だけを理解した蒼那は、流されるまま己に用意された椅子に腰掛け弁当を目の前に起き……手を合わせる。
「いいただきます」

「「いただきます」」
リアスによる凛としたいただきますの声に合わせて、真一、朱乃、蒼那のいただきますが重なって食事の幕が上がる。
世界を平和にする言葉、いただきます。
なんて素晴らしい言葉なんだろう……やはり世界に対する感謝を忘れず、人と食事を囲み、笑顔が絶えない小さな世界を作る。
こうした輪を広げていけば、きっと世界は平和になる。
そう、食事から始まる世界平和を広げていこう……等と訳の分からない思考を働かせる程には、蒼那の頭の中は混乱の渦に巻き込まれていた。
一応の混乱が収まりを見せた蒼那の視界が、しっかりと現実の食事風景を認識した時には、既に先程の様な嵐はなく普通の昼食時の風景が広がっていた。
部活には入らないのか？
勉強の進み具合はどうか？
最近嵌っている事がある。
そう言えば料理を始めた。
今度一緒にチェスをしよう。
くだらなく、実りのない、しかし話しているだけで楽しい気持ちが伝わる会話が広がっている。
そうだ、やはりさっきのはタチの悪い夢だったのだ。
蒼那の思考がそう結論づけようとした時、決定的な言葉がリアスの唇から紡がれる。
「ソーナ。さっきの事は気にしないほうがいいわよ。私が気がついた時には既に二人共こんな感じだったの」
「……リアス、今だけは貴女を恨ませて」
「ちょっと!?」
「お、支取には受けたみたいだぞ、朱乃」
「あらあら、じゃあ解散のお話は白紙に戻しましょう」
「大体、私はペットではありません」
冷静かつ少しばかり冷たさを感じる蒼那の声に、リアスも朱乃も、

そして真一も動きを止めて蒼那へと視線を集める。
三方向から向けられ、後ろに下がるしか道はなくなった蒼那が、冷や汗と共に頬を引きつらせる。
固まってしまった四人の空気の中で、最初に動いたのは、やはりと言うか真一だった。
「うくっ、くっくっく……ブハハっ！　いいないなおい！　支取！　まさか朱乃のあれを見てそこに突っ込むとはな！　くっくく……さ、才能あるぜ。あー、腹いてぇ」
「まさかこんな身近にこんな伏兵が潜んでいるなんて……私も精進が足りませんわね」
「な、何ですか？　私何かおかしな事を……って、霧咲君痛いです。本当に、嘘でも冗談でもなく、すごく痛いです！」
正に爆笑と言ってもいい程の笑い声を上げる真一が、蒼那の肩を叩き始め、朱乃は頬に手を当て困ったような声を上げる。
そしてリアスは、信じていた者に裏切られたような視線で蒼那を見ており、その表情は正に悲愴と言っていいだろう。
肝心の蒼那はリアスの視線に気がつきながらも、とにかく真一に叩かれる肩が痛いのか、うっすらと涙すら浮かべているようにも見える。
その後の食事は特に嵐が起きる事もなく終わるが、最後まで蒼那がリアスに弁明をはかる機会は回ってこず、その事を切っ掛けにして蒼那も三人に巻き込まれる事になる。
そして早速その日の放課後、生徒会の仕事があると言い張って拒否する蒼那を、真一と朱乃が生徒会室に乗り込んでまで連行。
予定を変更して四人でカラオケと相成ったのは、最早言うまでもない。
支取蒼那の穏やかな学園生活は、たった半年で終幕のベルを響かせた……。

Q：悪魔って何？A：ご主人様の様な存在にゃ

ＩＮ　朱乃

私とリアスが、一人の男の子、霧咲真一と言う変わった男の子と出会って三つ目の季節を迎えようとしています。

知り合った当初は、異性と仲良くなって、遊ぶ事が楽しい事なのか判断がつきませんでしたが……。

蓋を開けてみればこれ以上ない程に、私とリアスは楽しいと思っていましたわね。

性別の違いによる価値観や物事の見方も楽しい要因なのですけれど、霧咲真一と言う一人の男の子が、きっと人間的にとても楽しい人物なのが大きいのでしょうね。

それからは何処かへ遊びに行くのも三人一緒である事が多く、誰かが欠けたら遊びに行かない日なんてのもありましたわね。

私もリアスも、異性関係で余りいい思い出がない為、心の何処かで男性と仲良くなる事を避けてきた節があります。

だと言うのに仲良くなってしまった真一は特別……と言うか、彼自体が特別な性質を持っているとしか思えません。

私の席から斜め前へ視線を動かせば、すぐそこに授業を受ける真一の姿が目に入ります。

仲良くなるにつれ、私と真一は互いの事を名前で呼び合い、呼び捨てるようにまでなりましたわ。

だからこそ、と言う訳ではありませんが、こうしてぼんやりと考え事をしている時に彼を見ると益々彼の存在が不思議なものに思えてならないのです。

人の警戒心をするりとくぐり抜けて、いつの間にか心に入り込んでいる真一。

勿論悪い事ではなく、いい事だと思いますわ。

大きな未知と少しの恐怖の象徴であった男性と言う存在を、いい意味で打ち砕いてくれた存在ですもの。

ただ最近、私とリアスとしては、気がつけばそこに居る事が自然になった彼の存在が問題となっています。
あぁ、勿論彼の存在が鬱陶しくなったとかそう言った意味ではありませんよ？　今でも当然、彼の存在は私とリアスにとってオアシスの様なものです。
彼と遊ぶのも話すのも楽しいのですが、問題はそれとは別。
むしろこの問題に彼は全く関係ないと言ってもいいですわね……。
（普通の人間と付き合っていくのが、こんなに大変だとは……思ってもみませんでしたわね）
普通の人間の中に混ざって生活する。
言葉の中では簡単で、いざその時が来る瞬間までシュミレートしても、簡単な事だと思っていました。
ですが、いざ人間ではない事による義務を抱えたまま、人間と同じ生活を送るのが大変だとは思いませんでした。
本当に、誤算、ですわね……。
結局大変にさせているのは霧咲真一と言う一人の男性の存在なのですが、私とリアス共通の大切な友人との時間を切り捨ててまで、最低限こなさなければならないだけの義務を全うする気はありません。
だって、その分私達が頑張ればいいだけの話ですものね……。
何の話かと問われれば、私達、悪魔の家業の事ですわ。
人間と契約し、望みを叶え、対価を頂く。
あぁ、怪しい話ではありませんよ？　命までもらうほどの事はありません、大昔はどうだったか知りませんけれど、今はそんな事はしませんわ。
悪魔家業は非常にクリーンな社会ですわ。えぇ。
（問題は、真一の時間に合わせれば家業の効率が落ち、家業を優先すれば真一との時間が激減する……ここですわね）
悪魔家業は大切ですが、真一との楽しい時間を出来る限り削りたくはない。
ここは私とリアス、話し合って双方意見の一致が見られた部分ですわね。

結局三人の時間が楽しくて手放したくないのでしょうけど、そうなるとまた話は振り出しに戻ります。
（ままなりませんわね……こんな乙女二人を悩ませているんですのよ？　自覚はあるんですか？　真一？）
そんな事を思いながら、授業を受ける……フリをして目を開けたまま寝ている真一に視線を集中させてしまう私は悪くありませんわよ？
だって、目を開けたまま寝るなんて器用な事、真一くらいしか出来そうにありませんもの。
目乾かないのかしら？　少し心配ですわね……次の休み時間には目薬を投擲する所から始めましょうか……。
（うふ、ふふふっ……爆笑ゲットですわね）
結局一人で考えても埒があかないと、思考を放棄した私は、次の休み時間の事を思いほくそ笑むのです。
……意志が弱いとか言わないでくださいな。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

日が落ちるまでの時間が随分と早くなった季節。
薄暗くなった街中を歩く男が一人……目つきの悪い瞳と、均整は取れているがしっかりとした体付きが特徴的な人物は、正しく霧咲真一だ。
珍しく一人で下校ルートを歩いており、勿論薄っぺらい革の鞄も肩に担ぐようにして持っている。
朱乃やリアスと一緒にいない真一は、駒王学園の生徒としては珍しさを感じる光景だが、当人達にとっては違う。
頻度にすればほんの僅かだが、リアスと朱乃が遊びの誘いを真一にする事も減った。
真一からの誘いを断る事も、ほんの僅かだが増えた。
時折見せる不本意で我慢した様に下唇を噛む表情を見る限り、彼女達にとっても仕方のない事だと割り切れない部分があるのだろう。

最近のリアスと朱乃の様子を思い浮かべて一人で小さく肩を竦める真一を、すれ違ったサラリーマンが不思議そうな表情を浮かべるが、結局声を掛ける事もないまますれ違う。
そして真一は、下校中の駒王学園の生徒達に混じって足を動かしつつも、徐々にその群れが散り散りになった時にようやく口を開く。
「何だ？　黒歌」
「ご主人様。また出たにゃん」
「またかよ……めんどくせぇなぁ」
「ただ今回は、この辺りを管轄域にしてる悪魔ともう一人の悪魔が行ったみたいにゃから、そんな気にしなくてもいいと思うにゃん」
いつの間にか音も立てず姿を見せた黒歌に、驚く事もなく声をかける真一に、黒歌の存在に気がついていた様子の真一の隣にごく自然と並ぶ黒歌。
黒歌の中では真一が自分に気が付く事も織り込み済み、と言うか自然な事だと思っているようで、それに対しての言及はない。
そして何より、黒歌の口から出た悪魔と言う単語にも……やはり真一は驚いた様子もない上に、黒歌の事を心配する様子もない。
当然だろう。猫が人語を操るだけでも十分ファンタジーであり、その状況に慣れきった真一が、黒歌とはどう言う存在か……真一はそれを正しく理解している。
先程黒歌が言った悪魔と言う存在は、事実として存在している。
黒歌曰く、自分もその様な存在だと言う話だ。
更に悪魔だけでなく、天使や堕天使も存在しており、果ては神や魔王まで存在するという。
世界はこの人間界だけにあらず。
冥府や冥界、そして天界も存在しており、現在その世界に存在する勢力は大きな戦争の後三竦みの停戦状態にあると言う。
どこの勢力も戦争で疲弊し、実情的にはどこも戦争を続けられない程に打撃を受けていると言う現状、種の存続を優先した結果の停戦らしい。
これからは手を取り合って仲良くしていきましょうと話し合いで

決まった停戦ではなく、このままでは種の存続自体が危ういと言う結論から出た停戦だと言うのだから始末に負えない。
　そして、種を増やす過程として、人間を悪魔へと転生させると言う手法が確立される。
　結果、時折こうして悪魔に生まれ変わった奴の過剰な自信や、転生させた主人の横暴等が原因で『はぐれ』と呼ばれる悪魔が彷徨く事もある。
　そして、何故かこの地は人間でない者との遭遇率が異様に高い。
　黒歌がふらりといなくなって処理してくる事もあるが、そもそもそれ以前にこの地に住まいこの地を管轄下に置いている悪魔が先に片付けてしまう事が多い。
「俺はまだ戦った事はねぇが……どんな奴らなんだろうな」
「ご主人様が知らないだけで、結構戦ってるにゃ」
「……まじか、そんなおどろおどろしい奴と会ったことねぇぞ？」
「今さりげなく私の事ディスったにゃ？」
「被害妄想すぎだろ」
「私も悪魔にゃん！」
「そう言えばそうだったか……いや、ある意味おどろおどろしいぞ。夜とか」
「それは仕方にゃいにゃ。諦めるにゃ、私はご主人様の前では万年発情期にゃ」
「迷惑且つ都合のいいやつだな、お前……」
　悪魔なんてそんなもんにゃ～、と猫のまま真一の隣を歩く黒歌は、からからと笑ってみせる。
　どこか機嫌良さそうに尻尾を揺らして歩く黒歌を眼下に捉え、思案するような顔で真一は黙々と歩くが、ふと暗がりが支配する路地へと足を向ける。
「にゃ？」
「思い立ったが吉ってな、見に行くぞ」
「やめるにゃ！　ご主人様が見に行くだけのつもりでも、大体そうはならにゃいのが世の常にゃ！　私を殺す気かにゃん！」

「大げさだろ……今いる悪魔ってそんな強いのか？」
「悪魔にゃんてどうでもいいにゃ！　どうせ案内するのは私にゃん！
私はご主人様『に』巻き込まれたくにゃいだけにゃ！」
俺が原因かよ……等と天を仰ぎ、既に星が煌く夜空を見上げるが、路地の突き当りに当たるまで真一の足は止まらない。
そして路地に突き当たり、足を止めた所で、再度黒歌に視線を送る。
「行くぞ、黒歌」
「……いやにゃ」
「ここまで来て往生際が悪い奴だな……引きずり回すぞ」
「……あー！　もう！　わかった！　わかったわよ！　行けばいいんでしょ!?」
余程真一と一緒に行くのが嫌なのか、普段の余裕と軽さを含んだ口調が崩れ去る。
浮かべた表情も、見たくないものを見せられて絶対に巻き込まれると確信している、この上なく嫌そうな表情で言葉を吐き捨てる。
そして、言葉を吐き捨てた黒歌の変化は一瞬だ。
先程まで黒猫のいた位置には、艶のある長い黒髪と切れ長の瞳が特徴的で、世の中の女性が羨む肉体――特に胸部辺り――を持った美女が佇んでいた。
突如として現れた美女は、際どい和装に包まれた肉体を、惜しげもなく真一に見せつけている。
今更過ぎて羞恥心すら浮かばない程自然に真一の隣に立つ女性の表情は、丁度先程黒歌と言う黒猫が浮かべていた、この世のヘドロを詰め込んだものを嗅いだ様な嫌そうな表情を浮かべている。
臭い物に蓋ならぬ、嫌なものには蓋である。
「準備できたか？　んじゃ行くぞ『黒歌』」
「う、うぅっ……行きたくない。帰ったら絶対に見返りを要求するわよ！」
「へーへー……いつもの事じゃねぇか」
「いつもより貪ってやるわ！」
「先にへばるのオメェだろ」

軽くも夜に似つかわしい艶を含んだ会話を交わしながらも、真一と黒歌と呼ばれた女性の動きは止まらない。
二人共軽く跳躍した様な動作だが、その体は既に突き当たりの塀を飛び越え、宙へと体を躍らせている。
建物の屋根の縁に足を掛け、また跳躍。
たった二回の軽い跳躍で自らの体を建物の頂点へと押し上げる二人は、普通の人間でない事は明らかであり、片方にいたっては人間ですらない。
黒い猫耳をぺたっと寝かせた黒歌は、真一の動きに追従する様にして屋根の上を疾走する。
限界まで体を低くし、建物の影になっている部分を選ぶようにして、屋根から屋根へ飛び移り疾走する二人の姿。
話に伝わる忍者もかくや、と言う動きの二人は、アスファルトの地を歩く人に発見される様子もない。
足音を最小限に、移動は素早く、体を残す時間を極限まで短くする。
影から影へ、月の光が照らす時間が長くなる道幅の広い屋根から屋根へは移動しない。
徹底して隠密行動を取っているといってもいい真一と黒歌が行き着いた先は、この街で心霊スポットとして一時期話題になった事もある廃墟と化した館だ。
その話題も既に過去のもので、既に手入れされなくなって久しい館の周りには、背の高い雑草が茂っている。
視界一面を埋め尽くす緑の奥は、一種の隔絶された空間にすら見える。
人の足並みが遠のいた場所ゆえに、踏み均された道のようなものもなく、奥に辛うじて見えるフェンスが更に封鎖区域であると意識させている。
廃墟と化した館はまだ見えないが、雑草の外から見ている真一は、あまりの違和感に首を傾げる。
黒歌に視線を送るも、彼女も特に変わった箇所はない様に見受けられ、益々真一が感じる違和感が浮き彫りになる。

「なぁ黒歌」
「なんにゃ？」
　ヘタをすれば人間界における、スポーツの世界記録を塗り替えるほどの運動量をこなす内に覚悟が決まったのか、黒歌の声は平静を取り戻している。
「ここ、悪魔がいるんだろ？」
「間違いないにゃ、私がこの程度の悪魔を捕捉出来ない訳ないにゃん」
「ふぅん……その悪魔を処理しに来てる奴等がいるにしては無用心じゃねぇか？」
　無自覚に言葉を発する真一に対し、黒歌が浮かべる表情は、当然ながら呆れと言う感情を多分に滲ませた表情。
　そこから出てくる声と言葉も、表情に準じた様な声音と内容である。
　無知を窘める様な黒歌は、正しく外見通りの年上の女性と言う感じだが、その内容が一般的ではないのはこの際置いておく。
「あのにゃー……一応、これでも一般人なら効き目ばっちりの人払いの結界が張られてるにゃん。この場所を何の違和感もなく認識出来て、且つ興味を抱けるご主人様の方が人間としてはおかしいって事にいい加減気がつくべきにゃ」
「アングラだと親父と同じ位の実力の奴は少ないが、いたぜ？」
「あれはあそこがおかしすぎるだけにゃん。悪魔の私から見ても割と普通じゃないにゃ、その中でもとびきりのご主人様にゃ、それだけで異常にゃん」
　そんなもんかねぇ……と納得いかない様に小さく呟き、シャープな顎を撫で付ける真一に対して、やはり黒歌は始末が負えないとばかりに体全体で呆れてみせる。
　結局どこまで行っても平行線を辿りそうな不毛な意見の押し付け合いは、思考を切り替えて、廃墟へ一歩踏み出した真一によって終わりを告げる。
　最後の最後まで尻尾と頭から生える猫耳をわたわたと動かしながら、一歩踏み出したり下がったりを繰り返す黒歌だったが、もう確実

に歩みを止めようとしない真一を見て頬を二回ぴしゃりと叩き……小さく前進。

額には冷や汗がいくつも浮かび、顔色も心なしか青い気もするが、もう黒歌は歩みを止めず真一の背中を追うだけ。

願わくは、自らの主人のテンションが上がり過ぎません様に……と、秒間百回を越える勢いで心の中から天へと祈っていた。

……切実に。

月の下で吼えた者

鬱蒼と茂る背が高めの雑草をかき分け、歩を進める真一の視界が開けた時、真一の視界に入ってきたのは紛れもない廃墟だった。
館と呼ばれるだけあって、その大きさは中々の物だが、それだけだ。
この大きな館だったものを廃墟と呼ぶのに何ら忌避はなく、新築当初は塗装と木が持つ質感によって艶があったであろう外壁は腐って一部が崩壊している。
窓ガラスはいたる所が割れて破片が散らばっているし、廃墟を覆う屋根は何かに吹き飛ばされたかの様に、そもそも存在していない。
「ん？　吹き飛ばされた？」
「そうにゃ、あれは自然と出来た現象ではないにゃ」
「するてーとあれは……」
真一の疑問に対して、ゆったりと余裕ある動作で頷いた黒歌の言葉。
予想がついたその続きを紡ごうとした真一だが、言葉を紡ぐ事を突如としてやめて軽く跳躍して後方へと下がる。
地に生えている草を踏みつける小さな音が鳴ったと同時に、真一が今さっきまでいた場所が、突如爆発を起こした様に弾け飛ぶ。
黒歌へと視線を送ってみれば、彼女は回避する必要などないのか、弾け飛んできた小石や衝撃を自らが操る気によって弾き飛ばしている。
正確に言うならば気ではないらしいのだが、真一は黒歌から過去に一度聞いたその技術の事をよく理解していない。
別に理解出来ずとも困りはしないのだが……。
「ま、今はいいか……さて？」
今の極小規模の爆発は、明らかに真一を狙った攻撃である事は明白だ。
自然現象の中で、人をピンポイントで狙って爆破させる自然現象と言うものは、少なくとも真一は知らない。
それにそれが実際の所自然現象ではない現状、どうでもいい事だ。

真一がその不可視且つ無音の爆発を回避出来たのは、それが単に意志を持った現象だからだ。
見えずとも己を害する意思のある現象だからこそ、真一は即座に回避行動に移る事が出来たのだが、それが意図する所は間違いなくそれが攻撃であると言う事。
物騒極まりない歓迎をしてくれた存在が現れるのを、真一はニタリと笑みを浮かべて、ただ静かに待つ。
朽木を吹き飛ばす、豪快で湿り気を帯びた木が破壊される音と共に姿を現したのは、果たして人の形をしている者ではなかった。
「おい黒歌。やっぱりおどろおどろしいぞ」
「悪魔って言うのは、力がつけばつくほど姿形が洗練されるにゃ。そして最終的には人に近い姿を取るのにゃ。ほら、二足歩行で手足もあるにゃ」
「手足っつってもお前……何かドロっとしてるぞ」
頭と胴体は辛うじて人間と言えるかもしれないが、異様に肌が青白く、手足に至っては指もないただの丸太が表面を液体状に溶かした様な形をしている。
ドロリと滴り落ちる液は、酸の様な性質を持つわけではないものの、見ていて気持いい物ではないし……何より触りたくない。
あれにさわんの嫌だなー……等と緊張感のない思考が真一の頭を駆け巡るが、その人ではない存在の発した声により、その意識を引き戻される。
「に、んげん。うまうまうまうまそうだぁ……ヴァヴァヴァ！」
「おい、何か喋ってるぞ」
「ご主人様って一応人間だからにゃー……そんな強い悪魔でもにゃいみたいだし、多分力を安定させる為の食料だと思われてるんだにゃ。無知と身の程知らずは怖いにゃ」
含む所が多くありそうな黒歌の発言は放っておくことにしたのか、真一は一度肩をすくめるだけで言及はしない。
それよりも重要な事は、自分の目の前に立つ存在が自分に敵意と害意を持ち、尚且相対している事だ。

自らの対面に立ち、尚且こちらにも敵対するだけの意思と力がある。
たった二つの純然たる事実に真一の表情は益々攻撃的な笑みの形が刻まれ、戦う前のデモンストレーションの様に、パキンパキンと関節の音を響かせながら右手を握り締める。
黒歌が引き攣った表情で一歩下がると同時に、真一はズンッと重いプレッシャーと共に一歩踏み出す。
ただの錯覚でしかないが、真一が今纏う強烈な好戦的重圧は物理的な視覚に現れそうな程に重く、一歩踏み出した足にさえ重さがまとわりついている様に感じる。
それこそ普通の人間とは思えない程に、そこに有る圧倒的な存在感。
たった一人の人間が発する威圧感と存在感は、悪魔でさえ、ある程度のラインを越えた者にしか感じ取れない程の洗練された空気がある。
その証拠として、黒歌の足は完全に真一と距離を取る方向で動いているのに対し、真一と相対している悪魔はただ虚ろな笑みを浮かべているだけだ。
悪魔や堕天使、天使と言った存在は、確かに身体能力もその時点で人間を遥かに上回る。
更に言えば、魔力と言う人間には操る事の出来ない不可視の力を扱う事が出来、人間よりも上位の存在と言えるかもしれない。
しかし、どの世界にもどの時代にも、例外的存在と言う者は存在する。
ドラゴン然り、神器然り、だ……。
つまりどういう事かと言えば。
(アイツ……終わったにゃ)
そういう事だ。
真一が発する圧倒的な重圧と存在感を感じ取れない上に、明確なまでに敵対しているこの状況は、黒歌が予測している未来をほぼ確実という確率で実現させる。

少なくとも、ＳＳ級はぐれ悪魔として認定されている黒歌と言う悪魔は、そう感じている。
好戦的でただでさえ悪い目つきが、凶悪なまでの威圧感を伴った笑みを浮かべ、そこに宿る交戦の意思が頂点に到達するその瞬間……。
真一の耳に、最近随分と聞きなれた声が二つ、入り込んできた。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　リアス

人間界で正規に暮らす悪魔には純潔悪魔が多く、その悪魔達には義務とも言えるものが大きく分けて二つあるわ。
一つは人間達と契約し、願いを叶える代わりに対価を貰うと言う物。
その方法は様々で、人間のサラリーマンの様にする者もいれば、人間界での仕事や立場を活かして契約を取る者も存在するわね。
私や朱乃なんかは、全体的に見れば人間界に来てまだ日が浅く、契約を取る方法も現在色々試行錯誤しながら模索中と言った所ね……。
真一の存在さえなければ色々な方法を考える事が出来るのだけど、あまりおおっぴらな事をして真一に迷惑を掛けたくない私と朱乃は、地道に方法を考えて一つ一つ試していくしかないのがネックよね。
まぁ、こっちの方はいいのよ、何だかんかんだで長い目で見るものだから。
問題は二つ目。
私達は、家名を背負ってここにいる。
不用意に人間に悪魔の存在を気取られる事なく溶け込み、また人間に危害を加える事をよしとしない。
人間と言う種は種の存続と言う問題を解決するには重要な鍵となる種で、そんな彼らに警戒心と忌避感を抱かせない為にも危害を加えたり、敵意を煽るような行動は慎めという事ね。
私はそもそも人間が好きだからいいのだけれど、問題ははぐれ悪魔

という存在。
彼らは時折この人間界へ降り立ち、そこで彷徨う様にして人間を襲う時があるのよね。
転生悪魔である事が多いのだけれど、その悪魔が主である悪魔を殺し、その制御を離れた彼らは正しく鎖と首輪のない猛獣の様な存在。
そんな彼らが人間に大きな危害を加える前に処理せよ、と言うのが二つ目のお仕事ね。
契約とは違って、命令のような形で指示される事が多いわね。
それだけ緊急を要する案件という事で、こちらは命令が降れば契約よりも優先度は高く設定されるわ。
今回もそれに則って、はぐれ悪魔の一体を追っているのだけれど……。
何故か対象が敵対している私達から急に背を向けて、廃墟の外に走り出したのよね。
一応結界は張ってあるから、彼程度の悪魔では外へは出られない。
にも拘わらず廃墟の外へと足を向けた事実に、討伐に来ていた私と朱乃は目を見合わせて首を傾げ、腑に落ちない表情を互いに交わす。
……まぁ、考えるのは後にしましょう。
廃墟の壁に大穴を開けて、そこから外へ出たと思われる先に、朱乃がまず飛び出す。
危険が待つかも知れない場所へと、王を先に送り出すにはいかないと言う意識は、私の眷属達に染み込んでいるらしい。
どの子もいい子達だ。
「えっ？　どうしてこんな所に……」
何かあったのかしら？
朱乃の呆然とした声に、私は廃墟の外へと足を踏み出し、見渡す。
まず目に入ったのは私達が追いかけていたはぐれ悪魔、そしてギリギリ結界の縁に存在する、猫耳を頭に生やした黒髪の美女。
これだけならば、私達と同じ側に立つ存在がもう一人増えただけだと分かりそうなものよね……。
朱乃があんな呆然とした声を出す理由が分からない。

「一体どうした……何で、こんな所に人が……えっ？」
私は、視線の先に存在する人影に、朱乃と同じ様な呆然とした声を上げるのを止められなかった。
はぐれ悪魔の影に隠れるようにして存在する人影に気がついた私は、まずその人影が人間である事を認識する。
魔力も殆ど感じられないし、羽も角も尻尾もなく、特徴的には人間とそう変わりない。
そうなれば、魔力反応が殆どない事実を見れば、彼は人間だろう。
しかし、私が敵の前で呆然と無様な姿を晒したのは、彼が人間であったと言う事実じゃないわ。
あれは……彼は……。
呆然とした表情で棒立ち、考えてみても敵の前で晒す姿ではない状態の私に、いつもと同じ声で朝私達に声を掛けるような調子で紡がれる言葉。
それは私達の名前だった。
「お？　よぉ、グレモリー、朱乃」
「しん、いち……何で？」
軽い調子で私達に挨拶する彼――霧咲真一。
駒王学園の男子制服に、整えられてない黒髪、鋭い目つきに細身のシルエット。
紛れもなく、私と朱乃に出来た初めての人間の男性の友達……。
何で？　どうして？　よりによって一番知られたくない彼にこんな決定的な場面を見られるの？
私はただ、学園で朱乃やソーナと言った古くから付き合っている友人以外で、一番最初に出来た不思議な男の子の友人と楽しく過ごせればそれでよかった。
朱乃と真一がするおかしな一幕を見て、朱乃と真一とソーナと私で昼食を囲んで、くだらない話で笑顔を浮かべて……ただそれだけでよかったのに……。
悪魔である私と人間である彼の道は交わらない。
学園生活だけの短い関係だったとしても、私は彼や朱乃、ソーナと

の時間や関係を大事にしたかった。
……やっぱり、私の縁って、ロクでもないものばかりなのね。
最早考える事にも疲れた私だが、それでも彼を危険な目に遭わせるわけには行かない。
友人関係がここで崩壊するとしても、私は絶対に彼を見捨てない。殺させない。
いつか、こんな痛みも私の財産になると信じて、私は彼の命を救う。
友達じゃなくなっても、彼に死んで欲しくないと言う、最後の小さな望みだけでも、お願い叶えさせてと強く空に祈る。
しかし、そんな私の胸中など知らず、真一から発せられた言葉はやはり軽いものだったわね……。
「なぁグレモリー。こいつ、敵意バリバリなんだけどよ、どうなってもいいのか？」
「そいつははぐれ悪魔と呼ばれる存在よ、待ってて真一。今すぐ私が貴方の目の前からこいつを消し飛ばすわ。跡形もなく、絶対に」
「リ、リアス……」
「絶対に、許さない。私と友人との間に亀裂を入れる存在なんて、認めるわけには行かない……」
「リ、リア、リアス！　リアス！」
「何よ！　朱乃！　アイツを早く消し飛ばさないと、真一が！」
「そうではなくて！　真一をよく見てくださいな！」
慌てたような様子の朱乃。
尋常ではない彼女を見て、いくらか冷静になった私の思考。
そして彼女が放った言葉を理解し、未だ憎悪と悲愴入り乱れる思考ながらも、しっかりと真一を見据えてみる。
……何アレ？　阿修羅？
「朱乃、あれは誰かしら？」
「だから言いましたのに……真一で間違いありませんわよ……」
「だ、だだだって！　何アレ！　怖いわよ！　ここに居たら死んでしまうわ！」
やはり私は彼の姿を見た事で、一気に冷静ではなくなったのだろ

う。
朱乃が張った人払いの結界は正常に機能しているし、はぐれ悪魔を逃さない為の結界も張っている。
普通ならば入ってこれるわけもないし、まず前提としてこの場所に興味を持つはずかないのよ……。
つまり、そんな場所に興味を持ち、簡単に入り込める存在は普通ではないという事だ。
なんだか朱乃に対して醜態を晒している気がしないでもないけれど、今の私はそれどころではない。
あ、霧咲君の事思わず名前で呼んじゃったわ……名前で呼びたい程、彼に私は心を許しているのね……等と全く関係ない事を同時に考える程混乱している。
それも無理はないと思う。
今彼が纏う存在感と威圧感は、普通の人間のそれではないわ。
私や朱乃でさえ、その存在感と威圧感に押しつぶされそうな程の重圧を感じているのがその証拠ね。
今の彼は、雰囲気だけ見てみるならば、人間でも悪魔でもない。
ただ圧倒的な『何か』だ。
私の常識の及ばない『何か』になった真一が、呆れたような声で声を掛けてくる。
いや、声を掛けたというよりも、確認を取ったと言う方が近いかもしれないわね。
「なぁ、こいつ……殺してもいいのか？」
「へっ？　ええ、討伐対象だし、私が消し飛ばすつもりよ？」
問いかけに対して、反射的に答えを返した私は、まさに快挙を成し遂げたと言ってもいいと思う。
混乱極まる思考の中で、質問の意味を理解し、回答を寄越す事が出来た。
私に問いかけた彼が、人間であるという事を考えなければ、結果的に正解の回答だったのだろう。
私から発せられた答えに、真一の好戦的な笑みがさらに深く刻まれ

る。
比較的真一の近くにいる黒髪の美女から「余計な事言うにゃ！　私はまだ死にたくないにゃ！」等と、頭を抱えてうずくまった状態で言葉を投げつけられる。
しかし、私は一体何を意図して発せられた言葉なのかを正しく理解出来ない。
だってそうでしょう？　要領を得ないもの。
今の真一がただの人間でない事はわかるけれど、それでも彼は人間で、相対しているのは人を殺す事を何とも思わない悪魔なのよ？
悪魔の美女が動かず、ただ真一の付き添いで来たと言ったような風体の彼女の言葉を理解出来ない私は悪くないわよ。
はぐれ悪魔を見て恐怖もしない、朱乃の結界を気取られることなく破り、侵入してくる。
はっきり言って彼女も実力者である事は明白なはず、だというのに彼女は怯えて、動こうとしない。
真一と一緒にいる存在ならば、その力を知られようとも彼を守るべきではないかと私は思うわ。
しかし、根本的に認識を間違っているのは、私の方だったと思い知らされる事になる。
他ならぬ、霧咲真一と言う人物によって。
「じゃ、殺すぜ？」
軽く、そして冷たく言葉を放った真一は、突如として私の視界から『消えた』。
音もなく、気配もなく、前触れもなく忽然とその姿だけを消した。
そして聞こえてくる重い打撃音に、苦痛に悶える苦しげな声が、私の鼓膜を叩く。
「ぎ、ぃあ？　な、に……？」
「おせぇな……ほら、どんどん行くぞ？」
打撃音と声が聞こえた場所、はぐれ悪魔へと視線を送れば、そこに真一は存在していた。
悪魔の人間部分である胴体に、深く拳が突き刺さり、変わらず好戦

的な笑みを浮かべた真一が散歩にでも出たような気軽さでそこに立っていた。
悪魔である私は夜目が利くし、動体視力も人間のそれを上回っている。
だと言うのに、彼自身が動きを止めるまで、その姿を捉える事は出来なかった。
そしてそこからは壮絶なまでの猛攻が、はぐれ悪魔を待ち受けていた。
近接戦闘には明るくない私だけれど、それでも人の動きを捉える事など造作もない。
その自信と言うか、事実を覆される様に、真一の動きを追い切れない。
拳が動く瞬間はぶれて完全に捉えきれず、一度しか動いてないと私の視覚は告げているのに、打撃音は二つ聞こえる。
拳の先がどんな形をしていて、どこに突き刺さっているのかも理解出来ない。
数十、いや、数百に届くかもしれない拳打を打ち込んでいる真一の表情は涼やかなものだ。
たん、と軽く地を蹴って側面に回り込む姿は辛うじて捉えるも、打ち出した拳が突き刺さるまでの動作を捉えられない。
地を軽く蹴って、はぐれ悪魔の周りを飛び回るようにして幾つもの拳を突き刺すその姿は、正に蝶の様に舞い蜂の様に指すと言う言葉を体現していると思う。
少し違う所を挙げるならば、明らかに蜂と言う程可愛気のある拳打ではない、と言う事位かしら？
「朱乃……私は夢を見ているのかしら？」
「いいえ、リアス。私も多分、同じ光景を見ていますわよ……あ、今の、折れましたわね」
私は今自分が見ている光景を信じる事が出来ず、自分の友人である朱乃に問いかけるが、それこそ返って来た回答は私と同じものを見ていると言う回答。

現実って、非情なのね……。
どう見ても人間である彼が、悪魔を圧倒している……いや、相手にすらなっていない。
あれではただのサンドバックだ。
反撃の糸口すら掴めず、そもそも姿を捉えきれていない上に、攻撃に対して全く反応出来ていない。
悪魔と人間の身体能力の差？　誰が一体そんな事を定義したのか、私はその主に小一時間問い詰めたくなった。
「こんなもんか？　悪魔ってのは」
「な、めるなァ！　こぞ、オォォッ！　跳ね回る、だけ、が取り柄、の猿が！」
「イエローモンキーだけにか、洒落がきいてるじゃねぇか」
「貴様の拳、な、ど！　猿とお、なじだ！」
「じゃ、リクエストに応えて、そろそろ仕舞いだ」
悪魔と言う存在を吟味する様に、少し距離をとった真一に対し、精一杯の悪態をつくはぐれ悪魔だけれど……それに対しても真一は余裕を崩す事はない。
戦闘技術にしても、身体能力にしても、真一が圧倒している事に変わりはないわね。けれど、あの悪魔が言うのも確かな事だわ。
素晴らしい能力を持っているけれど、真一には決定打となるものが存在しない。
今までの攻撃も確かに強力だけど、言ってしまえばただの拳打だし……。
人でないものと言う存在は、総じて人よりも身体的能力が高い。
それは耐久力と言う面においても何ら変わりないわ。
悪魔や堕天使、天使が扱うような魔法もなければ、ドラゴンやそれに連なる者達の様に牙や爪もない。
人間の様に殴り殺されると言う事は、悪魔や堕天使などの人外に限っては、殆どありえない。
肉体の耐久力プラス回復力が、拳で与えられるダメージを追い抜くからね。

ジリ貧と言ってもいいこの状況下で、真一は笑みを消す事はなく、はぐれ悪魔が宿している自信ごと打ち砕く意思を込めている。
その笑みを見た瞬間に、私の背筋に言い様のない悪寒が駆け巡る。
マズい。
真一が何をする気か予想もつかないけれど、はぐれ悪魔との直線上に居て廃墟を背にしているこの位置関係は、決定的にマズい。
そして何より、真一の瞳がチラチラと私と朱乃へと視線を送っている。
言葉が早いか行動が早いか、それはもう分からないけれど、私は必死に声を出して体を動かしたわ……。
「朱乃！　退避よ！」
「わかっていますわ！」
どうやら私の感じている焦燥感を、朱乃も感じていたらしく、言葉と同時に動き出した私にしっかりと追従している。
そして私にはしっかりと見えた。
廃墟から最大速度で退避する私と朱乃を視界に捉え、真一が満足そうに、小さく笑みを浮かべるのを……。
「じゃ、これでパパッと……死んでくれ」
言葉が終わるのが早いかと言うタイミングで、真一の姿に変化があった。
変化があったと言ってもそう大きな変化じゃないわ、ただ真一の周りの空気が陽炎の様に歪んで、周りの景色を歪め始めた事くらいね。
劇的な変化が訪れたのはそれから、一瞬金色の煙の様な光が立ち上ったと思ったら、地が砕ける様な大きな音と共に真一の姿が消えた。
今度は気がつけばいないと言うような不自然さではなく、ただ速すぎてその姿を捉えきれない様な動き、だけどどう動いたのかと言う軌跡は長く伸びた煙の様な金色の光が教えてくれてる。
それを辿った先には当然真一の姿があって、私には腰だめに構えた掌底を突き出すその動作が、一段とゆっくりに見えた。
多分それは、私の危機本能がその光景を遅くしていたんだと思う。

だって先程から、頭の中に鳴り響いてる警戒の音が煩い。
あれは危険な光で、間違いなく自身を軽く消し飛ばす程のものだと、そう告げている。
「月下咆哮・流星」
ぼそりと呟く様な声で紡がれた言葉と共に、凝縮された光が爆発的に膨れ上がって……キュボッ！　と言う爆発の瞬間のような音と共に放たれた。
はぐれ悪魔の体を完全に覆う程の光の本流は、はぐれ悪魔の体を突き抜け、その後ろにあった廃墟までをも飲み込む。
体を貫く衝撃は余波でさえ痺れる程で、真一の髪は完全に逆立っていて、めくれ上がった前髪から除く表情は確かに笑みを浮かべていたわ。
時間にすれば一瞬の出来事で、私の体感時間からすれば数分にも上る光の本流は、やがて流れ星の尻尾の様な光の線を残して……跡形もなく消えたわ。
最早極大のレーザービームと言ってもいい様な……真一の言葉を借りるなら、咆哮が貫いた先には、何も残っていなかった。
はぐれ悪魔も、その後ろにあった廃墟も、そして朱乃が張った二重の結界も……。
跡形もなく……それこそ塵一つ残さず消滅してしまった。
開いた口が塞がらないって、こんな時に使うのね……日本語ってすごいわ。
隣を見てみれば、朱乃も私とそう変わらない表情で真一を見ている。
それもそうよね……これは、あまりにもデタラメだわ。
「だから、ご主人様に着いて行くのは嫌だったのにゃー！」
目の前の光景が衝撃的すぎて、存在を忘れかけていた黒髪美女の声が、私の鼓膜を震わせる。
見てみれば、衝撃の余波に吹き飛ばされたのか、大量の土煙を被ったまま床に臥せっている姿が見えたわね……。
その姿は、世の男性には見せられない程に、あられもない姿。

名誉の為に口には出さないでおくけれど、それでもその美女の悲痛な実感を伴った叫びは、星の綺麗な夜空に消えていったわ……。

ようこそオカルト研究部へ

現時間、午後十一時。
霧咲真一はリビングにある、食事用のテーブルに腰を落ち着けていた。
食事の時間はとっくに過ぎてはいるが、まだ食事をしていない彼がテーブルに落ち着いているのはおかしい事ではない。
しかし、不可思議なのは彼の前には食事は用意されていない。
それ所か、テーブルの何処を見渡しても、湯気を上げて食されるのを待っている食事達の姿は何処にもなかった。
その代わりとばかりに、真一の視線の先には、この家の住人ではない者が着席している。
それも、二人。
この家の住人は、真一を含めて二人。
黒歌と真一自身と言う家族構成の筈であり、この様な時間に家の中に他人がいた試しなど殆どない。
隣の席に視線を下ろせば、真一ともう一人の住人、黒歌が猫の姿をとって椅子の上で丸くなっている光景が見える。
ゆらゆらと尻尾を揺らして丸くなっている黒歌は、体全体で私は関係ないにゃと言っているのが手に取るように理解出来る。
こう言う時に、付き合いが長いのも善し悪しであると、真一はいつも思う。
小さくため息を吐いた真一は、諦めと共に視線を正面へと向ける。
そこにいたのは厳しい視線を真一に送るクラスメイトである、リアス＝グレモリー。
ニコニコと笑顔を浮かべてはいるが、誤魔化しは許さないという雰囲気がありありと伝わってくるもう一人のクラスメイト、姫島朱乃。
その二人が真一の家に押しかけてきた来訪者の二人である。
「で？　何から話してくれるのかしら、私、とっても楽しみだわ……」
かつてこれ程怒った事があっただろうか、いやない。と言わんばかりに、怒りのオーラを体全体から吹き出しているリアスがプレッ

シャーを掛けてくる。
「何からっつってもなぁ……別に隠してたわけでもねぇから、話してくれるって言うのとは違わねぇか？」
「話の論点をズラさないでくださいね？」
ニコニコと笑顔を浮かべ、口答えをしているように見えた真一に釘を刺す朱乃。
正に前門の虎、後門の狼だ。
二人共目の前にいるが……。
くだらない事に思考を走らせつつも、二人の様子を理解した真一は、やれやれと肩を竦めて見せる。
「大体、お前らも俺に話してねぇ事があったんだからよ、おあいこって奴だろ」
「私達が悪魔だって事かしら？　貴方の傍にはもう悪魔がいるじゃない。それもとびっきりの、つまり貴方は悪魔かどうか何てどうでもいいって事でしょう？」
「まぁ、そうだな。悪魔かどうかなんて、正直どうでもいい。お前等が悪魔だったのはまぁ、予想はしてたが驚いた。それくらいだな」
「つまり、私達の隠し事は、貴方にとっては気に止めるほどの事でもなかった。でも、私達が知った貴方の事実はそうじゃない」
「真一の口から説明されて、初めて飲み込む事が出来る。これはそんな事実なのですわ」
リアスの鋭い視線と朱乃の真撃な瞳を受け止め、組んでいた腕を解き、軽く髪を掻き毟る真一。
はぁ、と小さく溜息を吐き出し、二人の視線を特徴的な鋭い瞳で見返す。
彼女達が聞きたい事はごく単純で、一番大きな事は真一が持つ力の事だろう。
ただの人間が身につけた力にしてはあまりに大きすぎる。
それについて掘り下げたいのが、一番大きな所で、後はもう他にないかと言う確認と経歴などの細々した事だろう。
適当にあたりをつけた真一は、まず一番最初に彼女達が聞きたがっ

ている事からざっくりと切り込んでいく。
「まずそうだな、俺のやった事だが」
「それね。あれは一体何？　神器じゃないわよね」
「神器？　何だそりゃ？」
「質問をしているのはこちらなのですけれど……」
「まぁいいわ……」
神器（セイクリッドギア）と言う物は、神が創った創造物であり、人間にしか宿る事のない大いなる力を持った物。
正に神の器とも言うべきもので、その形状は様々。
武器の形を取る様な攻撃的なものや、そもそも形状が存在しないものまで多種多様。
物騒な所では、特定の条件下であれば神さえも超えるほどの力を持つ、神滅具（ロンギヌス）と呼ばれる物まで存在するらしい。
歴史上名を残す人物は、神器を所持している事が多いと言う話だ。
しかし、真一は神器など所持してはいないし、勿論持っていないのだからそれを発現させた事もない。
「ふぅん……要はとんでもない武器って事か」
「要約しすぎだけれど、まぁ、大まかにはそういう事ね」
「それで？　神器ではないならなんなのです？」
リアスはあまりにも簡単に受け入れている真一に呆れているが、朱乃は真一の持つ力に興味があるらしく、好奇心と言う光を宿した瞳で真一を観察している。
神器などと言う仰々しいモノの可能性を考慮に入れている手前悪いのであるが、あれは神器などと言う程大層なものではない。
人間……いや、命あるものならば必ず持っている力だ。
「あれは、そうだな……一番わかりやすいのは『気』って言う説明だな」
「気？　仙術と言う術にそんな言葉があった様に記憶しているけれど……」
細くしなやかな指を頬に当て、思案しているように宙へ視線を躍らせるリアス。
そんな彼女から紡がれた言葉に反応したのは真一、ではなくその隣

で丸くなっている黒歌だった。
「ご主人様のあれと一緒にするにゃ。ご主人様のあれはもっと尊いものだにゃ」
「……まさか、犯罪を犯したＳＳ級はぐれ悪魔に冷静な意見が貰える日が来るとはね……」
苦い表情を浮かべるリアスと、少し機嫌が悪そうな表情を作っている黒歌の視線が交わる。
何やら複雑な因縁がリアスにはありそうだが、それこそ今この場では関係のない事であり、今の話のメインは真一についてだ。
機嫌が悪くなった黒歌は、リアスからの嫌味に取り合う事なく、言葉を続ける。
「あれは、気なんてものじゃないにゃ。気っていうのは、己の体内で生成して行使するものだにゃ。気が空っぽににゃったら使えにゃいけど、それでもご主人様のと比べればリスクは少ないにゃ」
黒歌の言葉を正しく理解した様子のリアスと朱乃の表情に、衝撃と悲愴、恐怖と憤りがないまぜになって宿る。
気と言うものは己の意思次第で生成し、行使する事が可能な力である。
枯渇するのは当然危険だが、即死すると言う類のものではない。
しかし、黒歌は真一の使う力は気とは違うと言う。
「気と言う力と似て非なるもので、命あるものにゃら誰しもその力を使う事を本能的に嫌い、生涯使う事はない力の筈にゃ」
黒歌の語りは止まらず、それが進む度にリアスと朱乃の額には冷や汗が伝う。
気は、行使し尽きてもすぐにどうこうと言う程の危険はない。
無論限界を越えて行使すれば、危険な力である事には違いないが、それはどんな力でも一緒だ。
しかし、黒歌の語る事の逆に考えれば、真一の使う力の正体が自ずと見えてくる。
命あるものが誰しも持ち、その力を使う事を忌避する。
それは何故か？

決まっている……ただ単純にその力は、使うだけで命の危険があるからだ。
「それはつまり……生命力にゃ」
生命力。
命あるものが誰しも持ち合わせており、それによって生きる事が出来る。
使えば文字通り己の命を削る力であり、黒歌が尊い力と言った事も頷ける話だ。
己の生命力を攻勢エネルギーへと転換し、放出、あるいは身体強化等の力へと変える技術。
真一が使う力の正体を知ったリアスと朱乃は、茫然自失と言う言葉が当てはまるほどの状態で、現実味のない実感の伴わない話の中心である真一をぼんやりと見つめている。
自然と沈黙が支配するようになったこの場で、一番先に言葉を発したのは、朱乃だった。
「し、真一はどれほど前からその力を使っているのです？　に、二ヶ月くらいですか？」
「そうだな……体得してから考えれば、もう五、六年位にはなるか」
長い、長すぎる。
命を削る力を行使しているにしては、使用している期間が長すぎる。
あれだけの量を放出しているのだから、もう既に人一人の生命力など尽きていてもおかしくはない。
真一の寄越した軽い回答に、リアスと朱乃は思わず息を飲む。
当然、そんな危険な力を使うなど、許すリアス＝グレモリーではない。
彼女は身内にはこれでもか、と言う程に甘いと言われるグレモリー家の息女なのだから、そんな彼女がこの話を聞いて黙っているわけがない。
「霧咲君、その力を使うのは……」
「ダメだ」

「ど、どうして!?　貴方それを使い続けたら死んでしまうのよ!?」
「俺にはな、何にもなかった。親の顔も知らねぇし、家と呼ばる場所もなかった。ただの赤子がピーピー路地で泣いてるだけ、そんな所から俺は始まった」
必死に真一を止めようとするリアスだが、その言葉を遮った真一の瞳は、ぎらりとした鋭い光を宿している。
そして静かに語るのは、霧咲真一と言う人間の始まりだ。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＩＮ

俺はどうやら、路地に捨てられてたらしい。
らしいってのは俺を拾った親父から聞いた話だから、本当にそうだったのかは知らねぇ。
ゴミに塗れてビービー泣いてた俺を拾った親父は、アンダーグラウンド……要は後暗い過去のある奴とか、脛に傷のある奴が集まる場所だな。
そこの住人だった。
勿論、そういった所の生活レベル的に見れば、断然いい方だったんだろうな。
住居はちゃんとした建物だったし、水もあった。
親父はそこで、金さえ払えば何でもやる仕事をやってた。
いわゆる何でも屋、ってやつだな。
何でも屋何て怪しい仕事が成り立つ位には、親父は何でも出来た。
中でも殺し……武力を行使する仕事にかけては、アングラの中を探しても右に出る奴がいないレベルだったらしい。
そんな親父が使えた力が、俺の使っている力だ。
結局俺の居場所は親父の下しかなかった。
何の力もねぇクソガキが、ピーピー鳴いてるだけで飯が食えるような、そんな世界じゃなかったからな。

生きていくには金がいる。力がいる。知識がいる。
騙して、脅して、殺して、そうやって生きていく。
そんな世界が、嘘みてーな世界があんだよ、知らなかったろ。
「辛くは、なかったの？」
辛いと感じた事はあったけどな、冬は寒いし夏は暑いし、ウチの前に腐った死体が捨ててあった事も一度や二度じゃねぇ。
んで、大体それの処理は俺がやるんだ。ガキだからな、やれる事やんねーと生きてけねぇ、それが言葉も喋らねぇ暴れもしねぇただの物運びなんだから楽なもんだ。
あ？　死体捨てて問題にならなかったのかって？　決まった場所に運んで捨ててりゃ次の日にはなくなってんだよ、そう言う仕事もあんのさ。
で、段々体が出来て、親父に戦う術を学ぶ様になった。
それを学ぶ様になってからは、武力がいる仕事が俺にもちらほら回ってくるようになった。
世界が広がったみてぇだったよ、何てったって自分で稼げるんだぜ？　その金は自分の好きにしていいと来た。
そりゃあ働いたさ、親父みてぇに何でもやったし、知識をつける為に本を買い漁って読み耽った事もある。
けどな、そうやって過ごしていくとな、見えてくんだよ。
「何が、ですか？」
朱乃……お前もうちょっと察しよくなかったか？　え？　何？　思いもよらぬ重い話で困惑してる？　それギャグか？
あー、わかったわかった、わかったから怒るな睨むな。
まー、見えてくんだよ。
自分の何もなさっつーかな、俺は何も持ってねぇんだ。
本当の親も、自分で作った本当の自分の居場所も、俺が俺として立てた証みてーなもんがなぁーんにもなかった。
だから、この力を十全に扱えるようになったと親父から皆伝貰って、暫く仕事して……自分が生きた証が立てられる世界で取り敢えず生きていけるだけの金が貯まって出てきた。

多分、証が立てられるなら、この力じゃなくてもいーんだ。
例えば自分の会社立てて、成功して、名前が売れて……そう言うのでも問題ねぇ。
じゃあそうすればいいって？　あー、ダメダメ、だって俺はもう知っちまったからな……。
もっと証の立て甲斐のありそうな世界を、な。
悪魔？　天使？　堕天使？　上等じゃねぇか……そんな奴らの人生の中に、俺が輝いた証が刻まれる可能性が出てきたんだぜ？　やるだろ？　ワクワクするだろ？
こっちに出てきた時は、経験や知識を活かした、文化的な証の立て方でもいいと思ってたんだけどよ……。
こう言う世界の方がでかい舞台で、華々しく輝けそうだろ。
だからな、俺はこれからもその世界に首を突っ込んでいくぞ、俺は俺の証を手に入れて満足して死んでいく。
それでいいのさ。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

誰も、何も話す事は出来なかった。
リアスも朱乃も、そして黒歌も……。
語った本人は何とも思っていない、何時も通りの空気のままだが、周りはそうはいかない。
黒歌に至っては既にその話を聞いているのだが、結局その話を聞いて断固として真一を止めようと言う意志が貫けなかった。
つまり、この件に関して黒歌から言う事は、今更無いと言う事だ。
証を立てる。
その為だけに生きていると、真一は言った。
普通に生きていればそんな事考えもせず、ただ日々を唯々諾々と過ごし、時折自分の掲げた目標に邁進して明るい未来へと走っていく。
自分が生きた証を手に入れる為だけ、その為だけに生きていると言い切った真一の姿は、リアスと朱乃にとって眩しくもあり悲しくも

あった。
「まー、すぐにどうこうって事はねーよ。武術家とか武道家とか、とにかく自分を鍛えてる奴ってのは総じて生命力が高いもんでな、俺も中々の生命力があると自負してる。差し当たっての問題は……」
ねーよ、と続けようとした所で、囁くような人の声が真一の鼓膜を叩く。
その発信源へと、真一は視線を向ける。
視線の先にいるのは、真紅の髪が印象的なクラスメイト、リアス。
前髪に隠れて表情をよく伺う事が出来なかった彼女が、顔を上げた奥には、キッと目尻に薄い涙を浮かべながらも真一を睨みつける鋭い瞳があった。
「……させない、絶対にさせないわ。貴方を死なせたりしない」
「だから、別にすぐ死ぬわけじゃねーって、上手くすれば……そうだな、後二十年くらいは生きられる」
「貴方は、それでいいの？　二十年なんてあっと言う間よ？　短いじゃない……」
「……十分だろ。二十年もあれば俺をずっと覚えている誰かが、一人くらいは出来んだろ」
「ダメよ、私が許さない。朱乃もきっと同じ事を言うわよ。だから……貴方を止められないなら、問題を根本から解決するわ」
「はぁ？」
心底理解出来ないと言わんばかりの真一の声に、リアスは自らの持つ豊満な胸の間へと手を入れ、そこから出てきたのはチェスの駒。
しかし、真一の表情は駒に対しての疑問ではなく、リアスの行動に呆れた様な表情を浮かべていた。
「どっから出してんだオメェ……」
「仕方ないじゃない、ポケットないんだもの」
悪びれた様子のないリアスは、呆れる真一を前にして、挑発的な笑みを浮かべてみせる。
駒を右手で持ったまま、胸の下で腕を組み、真一に見せつけるようにして「どう？」と胸を持ち上げてみせる。

確かに素晴らしいボリュームではあるが、真一はそれよりも駒を胸の谷間に仕舞う等と言う事を、本当にやる人物がいた事の方が驚きである。
大体、豊満な胸は好きではあるが、そもそも見慣れている。黒歌で。
挑発的なリアスの笑みと目の前に広がる光景に対し、大きな反応を見せない真一に、リアスの女としてのプライドが煽られる。
机越しに真一へ近づこうとするリアスを止めたのは、真一……ではなく、黒歌と朱乃だ。
「ご主人様に色目使うにゃ、ご主人様に色目使っていいのは今の所私だけにゃ」
「リアス。今はそんな場合ではありませんわ、誘うなら事が終わってからでもよろしいじゃありませんか」
まさか同時に止められるとは思ってなかったのか、リアスは浮かせていた腰を椅子へと再度落ち着ける。
どことなく二人共視線と言葉が冷たいし、黒歌に至っては警戒した様に毛を逆立ててリアスを睨みつけており、全く生きた心地がしない。
しかし、そんな黒歌はすぐに落ち着きを取り戻し、からからと笑ってみせる。
「まぁ、ご主人様と番になる気があるにゃら、話は別にゃ」
「つ、つがいって……」
「貴女はそれでよろしいのですか？」
「私はもう実状的にはご主人様の番にゃん。初めましても貰ったしにゃー」
「やかましいわ」
あまりといえばあまりの言葉と表情を浮かべる黒歌に、真一から即座にツッコミが入るが、時は既に遅い。
少しの生々しさが会話の中に見えてしまい、リアスは少し赤くなった顔で真一を少し睨み、朱乃は朱乃でニコニコと笑顔を浮かべてはいるが意味深な視線を真一に送っている。
「大体、悪魔って言うのは、己の欲望に忠実にゃん。欲しければ手に入

れる。どんな事をしてでも、違うかにゃ？」
「……そうね、少しだけれど貴女に賛成するわ」
「では、私も本格的に狙っていきましょうか」
無論、悪魔だからと言って、その全てが欲望に忠実でそれのみに従っているわけではない。
何もかもかなぐり捨てて、ただ一つの欲望に従う姿と言うのは、悪魔にとって理想ではあるものの現実がそうはさせてくれない。
丁度今のリアスの表情がそれを象徴しており、大きすぎる家名を背負い、それを誇りに思いながらも身動きが取りにくい状況を苦く思っている部分もある。
そう言う複雑な心境が大いに現れた表情だった。
真一としては、リアスの横で舌なめずりでもしそうな程に、狙う者の瞳で真一を見ている朱乃も気になる。
しかし、印象に残ったのは、悪魔でありながら人の様な葛藤の中にいるリアスの表情だった。
頭の片隅に記憶したリアスの表情を差し置き、現状を修正する。
「話ズレまくりだろ。で？　その駒がどうかしたのか」
チェスの駒らしきモノを取り出した本人も、その事実を忘れていたのか、慌てた様に手に持っていた駒をテーブルの上に置く。
形状はチェスで言う戦車（ルーク）の駒だが、本来のチェスで使う駒とは違い、白一色という色ではない。
種類によっては赤色などもある、とはリアス談。
「これは悪魔の駒（イーヴィル・ピース）ね」
「まんまじゃねぇか……」
わかりにくいよりはいいけどな……と溜息を吐く真一に、リアスは苦笑してみせる。
悪魔の駒とは、先の大戦で悪魔の絶対的な数の現象に歯止めをかけるに至った要因の一つだ。
人間が作ったゲームの中でも人気の高かったチェスの駒を参考に作られたもので、これらを使えば駒が持つ特性を備え、人を悪魔へと転生させる事が出来るらしい。

王の駒はチームのリーダーとなる悪魔が使い、その悪魔が他の駒を使って、様々な存在を悪魔へと転生させる。
この後天的な悪魔を転生悪魔と呼ぶが、眷属として扱われる為、正確にはまだ悪魔とは認められていない。
身体機能や特性は悪魔となっているにも関わらず、未だ上級悪魔の中には人間の分際で、と見下す者が多いのが現状だ。
話を戻す。
その転生悪魔がチェスの駒を模した物でなる事が出来るからには、当然それらを使ったゲームが存在する。
レーティングゲームと言うらしいそれは、架空の盤面であるフィールドで、自らを駒に見立て戦うシステムらしい。
つまり、不確定要素がいくつも重なった、実戦形式のチェスのようなもの……らしい。
駒……つまり悪魔としての性能が物を言う場面が多く、チェスと言うより、極小規模な戦争の様だと真一は思う。
そして、悪魔としての地位と力は、レーティングゲームの結果内容で見られる場合も多いらしい。
眷属の素質と力量が高いレベルにあるか……それを見極め、眷属を選ぶのも、立派な王としての責務と役割と言う事だ。
「それはいいんだけどよ、駒がもったいなくねぇかそれ……」
「あのね、私は貴方を助ける為だけに提案してるわけじゃないわ。貴方を眷属にすれば、私にも十分以上に見返りがあるわよ。私は貴方の力を買っているのよ」
「ふぅん……なら別に構わねぇが、早速やるのか？」
「えぇ、この戦車の駒はまさに貴方にぴったりだと思うわ。生命力という観点で見れば、人間よりもはるかに高い悪魔になれて、死の危険から遠ざかる。ゲームで勝ち進み、地位を得られれば、貴方も証を立てられる。私は貴方の力を借りられる」
まさにいいこと尽くしとはこの事ね、と機嫌良さ気に、リアスはテーブル上の駒を手に取って真一へと差し出す。
ふぅん……と、気のない返事と共に差し出される悪魔の駒を受け取

る真一。
しかし、その表情は半信半疑……いや、半分も信じているのかも疑わしい表情だ。
真一が駒を受け取る様子を、黒歌は興味無さ気に眺めつつも、密かに無知を嘲笑うような笑みを浮かべている。
猫ながら器用で表情豊かな黒歌の表情の変化に、真一は軽く首を傾げるが、その事を指摘するような空気ではなくなってしまっている。
何故ならリアスは既に、なにやら儀式の様なものをおっぱじめようとしており、堅苦しく理解出来そうにない詠唱をつらつらと並べている。
リアスの小さく瑞々しい唇から言葉が紡がれる度に、複雑な文様を描いた赤い魔法陣が浮かび上がり、真一を取り囲む。
ここまでやっておいて儀式が終わる前に、黒歌の表情が語る意見など指摘してしまえば、興が削がれて空気が固まる事は間違いない。
そして大抵その場合、指摘した奴が悪い様な空気になるのは、悪魔だろうが人間だろうが関係ない。
指摘すればそうなる事がわかっている上で、自分には何ら非がないと言うのに、わざわざそんなポジションに収まりに行くほど真一は酔狂ではない。
そしてついに、リアスの詠唱が終わり、赤い魔法陣が姿を消す。
リアスと朱乃は、キラキラとした期待の瞳で真一に注目するが、本人は目元をひくりと痙攣させるだけだ。
正しく引きつった表情のまま、リアスと朱乃を見返し、ゆっくりと開いた手には……どこにも変わった様子のない戦車（ルー）の駒（ク）が存在していた。
「……なんか、わりぃな」
冷静に口に出す真一の言葉は、目にした光景が告げる通り、失敗したと言う事実に対してのとりあえずの謝罪。
完全に固まった空気の中で、リアスと朱乃は、信じられないモノを見る様な瞳で真一へと視線を集中させる。
真一の謝罪から誰も何も言葉を発し様としない状況がおかしかっ

たのか、先程まで小刻みに体を震わせていた黒歌の口から、大音量の笑い声が上がった。
「ぶにゃっはっはっは！　当然にゃ！　成功する方がおかしいのにゃ！」
真一の悪魔化失敗の事実を大きな声で笑い飛ばし、猫の癖に器用にお腹を抱えて笑う黒歌に、真一はやれやれと肩を竦めて見せる。
しかし、誰もが真一の様に、黒歌の事をよく理解している訳ではない。
その事実として、真一の目の前に座る二人からカチンと聞こえてきそうな程に、黒歌の態度がカンに触ったことは明らかな表情。
二人共普段は冷静な人物と温厚な人物なのだが、完全に瞳と眉は釣り上がり、揃って黒歌を睨みつけている。
「貴女、しん……霧咲君を助ける方法が失敗して何がおかしいの？」
溢れ出る感情そのままに言葉を垂れ流すリアスに、真一はよくないものを感じ取る。
元いた暗い場所で、幾度も見てきた感情が表面に溢れ出ている。
それは毎回それを垂れ流す人物を、良くない状況へと追い込み、よくないモノへと変貌させてしまう事を知っている。
口をついて出た言葉は、当然静止の言葉。
「おい、グレモリー……」
だが、その静止は一足遅かった。
何故なら、決定的な言葉は、言葉を続けようとするリアスではなく隣にいる朱乃から発せられたから。
「まるで、真一が死ぬ事を望んでいるようにも聞こえますよ」
朱乃が言い切った言葉は、真一の勘がマズイと警告音を響かせる。
怒りを始めとした激情で、少し冷静さを欠いているからこそ出てきた言葉だろうが、黒歌を前にして言う言葉ではなかったのだ。
その証拠に、朱乃の言葉が始まった瞬間には、真一の手は瞳の動きよりも速く黒歌の体へ手を伸ばす。
伸ばした腕は、正に瞬きの瞬間にと言ってもいい速度で変化を終えた黒歌の腕を掴んでおり、テーブルを飛び越えて朱乃に掴みかかろう

とした黒歌をかろうじて押さえ込んでいた。
音も気配も最小限の小ささで動いた黒歌の表情は、全く温度を感じさせない能面の様な表情で、なまじ整った顔をしている故に無機質な人形の様にも見える。
能面の様な無表情で口を開いた黒歌の声音もまた、温度を感じさせない冷たい声音で、その口調は先程までの余裕を感じる口調ではない。
「アンタ達に何が分かるって言うの？　私がアンタ達が考えつくような可能性を考慮しなかったとでも思ってるの？　そんな事でご主人様が……真一が生きてくれるなら、何処かの悪魔から駒をかっぱらってでもやっているわ」
辛うじて真一に押し止められている体は、ぎちぎちと関節を伸ばしつつも前進しようと力が入っている。
普通ならば既に吹き飛ばされる程の力を込めている黒歌の体とは裏腹に、口調は淡々と冷たく、詰まる事なくスラスラと出てくる言葉は黒歌の本心だ。
真一との付き合いは、リアスと朱乃よりもよっぽど黒歌の方が長く、真一の状況も人格も性格も性質も熟知していると言っていい。
そんな黒歌に対して言い放った言葉は、正しく失言であったとしか言い様がない。
感情を感じさせないからこそ、より強くそう思っている黒歌の心に触れたリアスと朱乃は、ただただ呆然と黒歌を見つめるだけ。
「誰だって自分が連れ合いだと思ってる人に死んで欲しくない。当然の事でしょ？　大体私は悪魔なのよ、ご主人様の為だったら何だってするし、誰だって殺す。でもそんな事じゃご主人様の状況は覆らない。じゃあ私に出来る事って何？　方法を模索しながら何時も通りご主人様に接するだけ、それだけなのよ」
悪魔の駒を以てしても、真一を悪魔にする事は叶わない。
それは比較的早い段階で黒歌は結論づけていた事であり、リアスがやろうとした事が失敗する事も、正しく予見していた。
悪魔の駒で眷属悪魔に出来るのは、基本的には自分よりも力量が下

の者に限られる。
勿論それにも例外はあるが、基本的にはそうであり、黒歌からすればリアスが真一を従えるなど天地がひっくり返ってもありえない事だ。
個人の力量で言うならば、目の前の二人は、まだ黒歌よりも下である。
そんな二人、主にリアスが、黒歌がご主人様と仰ぐ真一を従えられる道理等ない。
黒歌と言う悪魔が人間である真一に付き従っているのは、何も感情的な理由だけではないと言う事だ。
「だから、私っ！　だって、でも……」
「あー、わかった。わかったから落ち着け」
感情が高ぶりすぎて目尻に薄らと涙を浮かべ、支離滅裂な言葉を呟く声は涙声。
黒歌と言う悪魔が、霧咲真一と言う人間を主としてしっかりと定めている。
その事実が痛い程わかる黒歌の感情に、リアスと朱乃は言葉を発する事が出来ないでいる。
どこまでも純粋に不純に、どこまでも情熱的に鮮烈的に、ただ霧咲真一と言う一人を思う黒歌は正しく真一の眷属なのだ。
いざという時には相変わらずの黒歌に、真一は苦笑しつつもその身をしっかりと抱き寄せる。
ぐずぐずと泣きべそをかく黒歌を、子供をあやす様に扱う真一を見て、ようやくリアスと朱乃の時間が再起動する。
そして最初に出てきた言葉は、謝罪の言葉だった。
「申し訳ありませんでした。貴女と真一の今までを知らないにも拘わらず、感情に任せた失言をしてしまいましたわ……」
「そうね、私からもごめんなさいね。貴女の事をはぐれ悪魔と言うフィルターを通して見てしまっていたわ。真一の眷属としての貴女を、全く考慮に入れていなかったわ。ごめんなさい」
リアスと朱乃の真摯な姿勢の謝罪を聞いているのかいないのか、黒

歌はただグズグズと真一の胸に顔をうずめてべそをかくだけだ。
幾度も鼻を鳴らす黒歌をそのままに、真一は改めてリアスと朱乃に視線を向ける。
「まぁ、そんな訳だ。諦めろ」
「無理ね」
「懲りねぇやつだなぁ」
先程地雷を踏み抜いてしまったリアスと朱乃だが、真一の言葉には絶対に頷こうとしない。
凛とした声で真一の言葉をはねつけてみせるリアスの瞳は、確かに諦めの光を浮かべておらず、黒歌の様子を見た今となっては更に輝きを増しているような雰囲気もある。
「きっと……黒歌も、まだ諦めてなんていないわ。あらゆる方法を使って模索しているはずよ、貴方を助ける術を」
リアスの言葉に、黒歌の肩が小さく震える。
どうやら当たりらしい。
大きく息を吐きだした真一は、やれやれと諦めた様に肩を竦めて苦笑を浮かべている。
そんな真一に対し、リアスは空気を入れ替える様に、弾んだ声を上げて言葉を紡ぐ。
「それにもう、霧咲君に悪魔だとバレてしまったしね。これからは大っぴらに動かせてもらうわ、私達の事情も隠さない。その上で、私なりに貴方を助ける術を探していくわ。これでも私の家、グレモリー家は大きな家なのよ？」
「……へーへー、んじゃ任せるとするか」
「よろしい」
諦めたような真一の声に、リアスは一つ満足そうに頷く。
そして、更に何かがある様に、満足そうなリアスに声を掛けたのは朱乃だ。
「リアス？　この際、契約の事も一緒に考えてもらえばいいんじゃないかしら？」
「あ、いいわねそれ。採用よ」

「俺としては、その話題は超絶なまでに面倒事の予感がするんだがな」
「私達悪魔がどんな存在で、どんな事をしているか話したかしら？」
「俺の話聞いてねーな……お前もう泣き止んでんだろ、いい加減離れろ」
「あぁん、ご主人様いけずにゃ！　もっと傷心の私を慰めても罰は当たらないにゃ！」
「やかましいわ。悪魔に罰当らないとか言われる筋合いはねぇわ」
最もな話だ。
しかし、リアスとしては空気を読む事なく、相も変わらずマイペースに状況を運ぶ真一に呆れた声を上げるしかない。
「貴方達も真面目に話聞くつもりないわね……」
「いや、俺はあるけどな、で？　悪魔ってのはどんな存在で、何をしてんだ？」
力づくで黒歌を引き剥がした真一は、改めてリアスに向き直り、それに対して満足そうに一つ頷くリアス。
軽い咳払いの後に語られるのは、当然先ほど話題に上がった、悪魔についてである。
三つの勢力が衝突し起こった大戦の話から始まり、その影響による各陣営の現在の状況、そしてその後の方針を一つ一つ説明していく。
時折小さな質問を挟むが、特に疑っている様子もなく、真一はその話を事実のモノとして受け入れている。
勿論、魔法や神器等と、自らが扱えない技術を話された所で全く理解は出来ない。
しかし、それが存在する事を認める事は出来る。
話を一通り聞き終わった真一の心中に飛来するのは疑いや不安でもなく、ただ漠然とした納得だけだった。
元々暮らしていた場所で、武力と武力でぶつかりあう事があった。
その際に、自らの力とは違うとハッキリわかる不思議な力を何度か見た事があり、決まってそう言った事柄を依頼してくる人物は同じ人物。
思えばその依頼者も悪魔か天使、もしくは堕天使のどれかだったの

だろう。
そして依頼対象も、例に漏れずそう言う存在だった……と言う訳だ。
依頼者の姿を思い出す真一の脳裏には、一番印象的だった灰色か銀色か、どちらともつかない豊かな髪を持った人物が浮かんでいた。
「で、貴方の事に関しても悪魔側から色々と調べてみるけれど……それとは別件で、出来ればでいいのだけれど私達のお仕事手伝ってくれないかしら」
昔の依頼者の姿に意識を割いていた真一の思考が、リアスのおずおずとした声で引き戻される。
声の方へと視線を向けた真一が見たのは、少しばかり申し訳なさそうなリアスの顔だった。
「別にいいけどよ、何すりゃあいいんだ？」
「そうね、契約に関しての事を相談する拠点が欲しいから……ここ、貸してくれないかしら？　学園から近いし」
確かに、真一の家は駒王学園から程近い場所にあり、徒歩で五分程の位置にある。
教室では一般生徒の目と耳があるし、確かに誰にも邪魔されず、悪魔に関して共通の認識のある人物が一堂に集まれる場所が欲しいのは真一としても納得できる。
しかし、それを理由に家を貸せるかとなれば、当然ながら話は別であり、真一の眉にはその心情がありありと浮かんでいる。
「構わねぇっちゃ構わねぇが……どっかの教室じゃダメなのか？　空き教室位あるだろ」
「私が言ってるのは一般生徒が容易に入り込めない場所で、尚且つ、私と朱乃が頻繁に出入りしても怪しまれない場所よ？　そんな場所そう都合よく空いてる、訳……が……」
「ん？　どうしたグレモリー」
真一の苦し紛れの進言に、リアスは反論を組み立てるが、その途中で何かに気がついた様に語尾が消えていく。
付き合いの長さと言うのはこう言った所にも影響するものなのか、

真一がリアスの様子を不思議に思っていると言うのに、朱乃は「あぁ……なるほど」と納得した様にリアスへ笑みを送っている。
「早速お手柄だわ、霧咲君。灯台もと暗しとはこの事ね」
「はぁ？　何言ってんだオメェ……」
「もう霧咲君に隠す必要もない。それを前提として、都合よく空いてる訳が無いなら、都合のいい場所を作ればいいのよ！」
　何だその、パンがなければケーキを食べればいいじゃない的な発想は……等と真一は思うが、リアスとしてはもうこれ以外ないと言わんばかりの表情だ。
　そして、満面の笑顔で、真一へと手を差し出すリアスは勧誘の言葉を真一へと送る。
「霧咲君……いえ、真一。部活に入ってみる気はないかしら？」
「……はぁ？」
　自信に満ちたリアスの声に応えたのは、いまいち状況を飲み込めないウチの突拍子のない誘いに、気の抜けた声を上げる真一の声。
　黒歌は溜息、朱乃はいつもの様にニコニコと笑顔を浮かべて真一を見詰め、リアスは真一へ手を差し出している。
「言った通り、面倒な事になったにゃ……」
　何かを諦めた様な黒歌の声がリビングに響き渡り、真一はよく事情を理解していないが、そう言う空気だったのでリアスの手を取る。
　夜も深まった霧咲真一邸にて行われたこの出来事が、駒王学園オカルト研究部、誕生の瞬間だった……。

龍を宿す者

あの日、あの夜、霧咲真一がリアス・グレモリーの手を取ってから二年。

見事に次の日申請した部活、オカルト研究部が誕生し、当然の如く真一がそこに引き込まれる事になった。

文化部に属する部活なため、部活の最低限の部員数は真一を入れて三人。

ギリギリではあるが、最低人数は満たしていた。

そして発足したオカルト研究部は、悪魔二人、人間一人と言う何とも極端な部活になってしまった。

冥界で指名手配を受けているらしいＳＳ級はぐれ悪魔だと言う黒歌については、現状維持のままだ。

それと言うのも、当然と言えば当然だが、リアスと朱乃が独断で上への報告を保留にしているからである。

それと言うのも、悪魔側と人間側……リアスと真一に、それぞれそうするだけの理由があったと言う事。

いわゆる利害の一致。

リアスは黒歌に縁のある人物をどうにかしてあげたいため、真一は当然、身内である黒歌を差し出すつもりはないと言う意思があったためだ。

勿論、ただそれだけと言う訳かと思えば、そうでもない。

あの日、あの夜にリアスと朱乃が見た黒歌の真一に対する献身とも言える心は、確かにこれ以上ない程本物だった。

そこで二人は考えたのだろう、何故はぐれ悪魔になったのか？　ならざるを得ない理由があったのではないか？　と……。

その考えは正しく当たりで、しっかりとした理由があるらしい。

しかし、その理由の原因となる人物――リアスの眷属の一人だ――が、しっかり聞く覚悟を決めなければ話す事はない。と言うのが黒歌の意見だ。

はぐれ悪魔とは人間界で言う所の犯罪者であり、人間よりも力があ

る存在だ。
そんな存在を討伐するのは当然の事……とリアスも朱乃も認識していたが、その意識を多少変える切っ掛けとなったのが、黒歌の件なのだろう。
止むにやまれぬ事情、と言うものがこの世には数多存在し、それも考慮に入れようと言うのがリアスと朱乃の新しい考え方だ。
最も、最後に付け加えた真一の、黒歌を連れて行くなら自分が敵に回ると言う言葉も大きかったのかもしれないが……。
そして、件のリアスと朱乃は、駒王学園の二大お姉様として有名になっていた。
あれだけ華やかな容姿をしていれば、それも当然かもしれないが……。
必然的に、そんな二人の傍にいつも一緒にいる霧咲真一も有名人である。
男女共に変わらぬ態度で接する真一は、人として付き合いやすい性格をしているとも言える。
ただ、その目つきの悪さや粗雑な雰囲気から、学園の番長としてひっそりと囁かれているのはある意味仕方の無い事かもしれない。
学園の番長――もとい、霧咲真一は、放課後珍しく一人で学園内を散策していた。
目的は特にない。
リアスと朱乃にちょっとした用事があるので、部活までの間、暫く時間を潰してきてくれと言われただけだ。
結局やる事が思い浮かばなかった真一は、適当に学園内を散策する事にした……と言う訳だ。
「おん？」
そして、学園内を散策している真一が見つけたのは、剣道場の更衣室。
その壁に尻をあげた状態で張り付く男子生徒二人と、それをどうにかしてどけようと……いや、間に入ろうと躍起になっている男子生徒一人だ。

明らかに覗きとわかる行為と雰囲気だが、真一はそれを見て、にやりと楽しそうに笑みを浮かべる。
そして無造作且つ、大胆な足取りで三人へと近づくのだ。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　一誠

俺、こと兵藤一誠は、この駒王学園の二年だ。
ここ私立駒王学園は最近共学化したばかりの、正に男にとって楽園のような学園だ。
かく言う俺も、夢のハーレムの為、なにより多様なおっぱいの為にこの学園に入学した口だ。
ここで俺は、俺だけのハーレムを作ってやる！　と意気込んだものの、女の影すら存在しないまま気がつけば二年。
この学園には綺麗な子や可愛い子、おっぱいの大きい子小さい子、色んな女の子がいるのに……何で俺には誰もいないんだと嘆く毎日だ。
女の子にモテてる有名な奴は何人かいる、さっき見かけた木場とか言うイケメン野郎もそのクチだ。
多くの女の子から多大な興味を持たれているが、本人は毎回優雅な苦笑と共に誘いを断る程のモテっぷり、許せん。
そしてもう一人、この学園には男子生徒で有名な人がいる。
その人の事は嫌いじゃないんだけどな……なんてったって、師匠だし！
で……現在俺は友達の元浜と松田、この二人と一緒にこの学園にいくつかあると言う覗きスポットの一つに来てるんだけど……。
こいつらダメだ！　自分達が楽しむ事で頭が一杯で、俺に見せようとしやがらねぇ！
何で俺がこいつらの妙にうねる腰を見せつけられなきゃならんのだ！　ちょっ！　どけっ、俺にも見せろ！
腰を引っ張ってみるが、こいつらびくともしやがらねぇ！　さすが

煩悩の塊だぜ……。
俺が二人に戦慄していると、後ろから足音。
一瞬ビクッと体が固まるが、聞こえてきた声に、ホッとした気持ちが飛来する。
「よぉ、お前ら。覗きか？　精が……いや、性が出てるな」
「せ、先輩！」
「馬鹿イッセー！　声がでかい！」
俺が尊敬する先輩の姿に、思わず声がでかくなっちまった。
「誰!?　覗き!?」なんて更衣室の中から声が聞こえてきて、そのままドタドタと外まで出てくる音が聞こえる。
あぁ……終わった、死なばもろともだぜ元浜、松田……ってあいつらいねぇ！　速すぎだろ！
俺が二人の姿を探して、ワタワタと慌てる様子を見て、先輩――霧咲真一先輩はにやにやと笑みを浮かべているだけだ。
先輩はたまたま俺達の姿をみて近寄ってきただけ、にも拘わらずまだここにいる。
このままじゃあ、先輩が勘違いされちまう！
「こんの覗き魔めぇ！　ってまたアンタなの!?　ひょうど……う？」
「また兵藤!?　……って、先輩？」
あぁ、遅かった……すみません先輩、こんな事に付き合わせて。
でも先輩は明らかに勘違いされる状況に身を置いてるのに、慌てた様子一つない。
それ所か、笑みを浮かべたまま、勢揃いする剣道部の女子達に向かって挨拶までしてる。
「よぉ、お前ら……ってそうか、村山は剣道部だったな」
「えっ、あっ、せ、先輩！　は、はいっ！　そうです！　で、でも、先輩が何でこんな所に……」
村山ってのは、さっき松田と元浜が注目してた女子の名前だ。
すこーし釣り気味だが、大きい瞳が印象的な可愛い女の子で、何よりおっぱいが大きい。
そんな村山だが、先輩を前にして一気に顔色が赤く染まる……待

て、村山お前まさか……。
俺が、まさかまさかな展開に驚愕し、改めて先輩に尊敬の念を抱いている中でも状況は当然進む。
先輩は勢揃いする女子剣道部に対して、動揺した様子もなく、剣道部の壁に空いている穴を指差す。
「あれだあれ」
「あれって……先輩、まさか」
「なーに勘違いしてんのかしらねぇが、別に覗きなんてしやしねぇよ、もう見慣れてるしな」
「ちょっ！　先輩！」
先輩にジト目で詰め寄る村山を、余裕のある笑みと共にさらりと交わす先輩。
その先輩の言葉に、周りの女子が色めき立つ……さ、流石過ぎます先輩！
しかし、それもすぐに過ぎ去り、じゃあ何で？　という話に流れていく。
取り敢えず応急処置だがな……って言いながら先輩がポケットから取り出したのは、ん？　木目調の……シール？
「取り敢えずコイツでも貼っておこうかと思ったんだが……着替え中だったとはな、わりぃな」
「い、いえ！　私達もう着替えてますし、大丈夫です！　でもその、兵藤は……」
「おー、コイツか？　この後人手が必要なんでな、暇そうにしてたから連れ歩いててな」
「あ、そうなんですね。でも先輩、言ってくれれば私手伝いますよ？」
「いーから、部活行って来い。また邪魔させてもらう事もあるだろうからな、そんときゃよろしく頼むぜ」
いけしゃあしゃあと嘘をつく先輩に、感謝すると同時に、戦慄すら覚えた。
あれだけ大勢の女子の前で、動揺もせず堂々と言える事なんだから、そりゃあそれがホントの事だと思うだろ……。

しかも、女子とは言え木刀を持った剣道部……あれだけ集まれば威圧感も半端ない。
そんな中であの態度、流石先輩だぜ……俺達三人がリスペクトしまくるだけの価値がある人物だ。
そうとは知らず、先輩の相手をしていた村山は、嬉しそうに弾けた笑顔を振りまきながら先輩に対応する。
待て……俺はお前のそんな顔見た事ねぇぞ、大体汚物見るような目ばっかじゃねぇか。
「はい！　待ってますから！」
「お手柔らかに頼むぜ」
「先輩ったら、冗談ばっかりですね。じゃ、また明日！」
「おー、放課後になー」
何時も通りの雰囲気で、女子達を見送る先輩が、くるりと俺に振り返ってにやにやと笑みを浮かべる。
思わず腰が抜けてへたりこんじまった俺の前に先輩がしゃがみ込み、如何にも楽しそうににやにやと笑っている。
実際、口を開かない、睨まないを実践すれば、この人も十分イケメンの部類に入る。
背もそこそこ高い上に手足も長いし、輪郭もシャープな感じでギラギラした瞳によく合ってる。
口を開けば中々奇天烈って言うか、突拍子もない事ばっかり言う人だけど、それでもとっつきにくいような雰囲気じゃないし面倒見も悪くない。
ぶつくさ言いながらも、何だかんだで最後まで面倒を見てくれる、そんな人だ。
「た、助かりました。先輩」
「おー、まぁ気にすんな。大体お前等ビクビクしすぎだ。そんなだから速攻でバレんだぞ？」
「誰も彼も先輩みたいに堂々としてられないですよ」
「それでも覗きたいなら、いざ見つかった時の為の対処法ぐらい用意しとくもんだぜ」

呆れた様にやれやれと苦笑しつつ肩を竦める先輩を見て思わず、正直そんな事が堂々と出来るのは先輩くらいです、と言いそうになった言葉をすんでの所で押さえ込んだ俺は超えらい。
まぁ、何だかんだで今みたいな事があった時助けてくれたりとか、話が合ったりとかで先輩とは仲がいい。
それに何と言ってもこの霧咲真一先輩は、俺達と同じ様に煩悩があるにも拘わらず、女の子にも人気がある俺達の希望なんだ！
この先輩の存在を知った時は、煩悩を持っててもいいなんて、これ程嬉しい事はない……と思わず悟りを開いちまいそうになったぜ。
結局入学してから問題塗れの俺や、元浜と松田に自分から近づいてきて、面白そうだと色々吹き込まれてる。
「せんぱーい……どうやったら女の子のおっぱい揉めますかねー」
「そりゃお前、後ろからガバッとだな……」
「え、やった事あるんですか……」
まるで実体験の様に普通に語る先輩に思わず聞き返すが、先輩はただ首を傾げるだけだ。
「あるに決まってんだろ」
すげー！　この人すげー！
何がすげーってそんな事して捕まってない所がすげー！　何なのこの人!?　エロの神様なの!?　おっぱい神なの!?
さすが先輩だぜ！
「ち、ちちちなみに……」
「乳並み？　いや、俺は男だからな、わからん」
「そんな事聞いてないですよ！　聞きたくもないし！」
「まぁ、そうだわな。で？　んだよ」
「だ、誰のおっぱいを……」
もう殆ど予想出来てるけど！
先輩がそんな事して怒らない人なんて、ほぼ限られてるような気もするけど！　それでも、それでも俺には確かめなければならない義務があるんだ！
そして先輩は、至極当たり前の事を喋ってるような口調で、その名

前を口にする。
「リアスと朱乃」
「ホラキマシタワーっ！」
　思わず頭を抱えるどころか興奮しすぎて体をくねらせてしまう俺だが、そこは許して欲しい。
　何故なら先輩は桃源郷の感触を知る人物なのだから、その体験を聞かせてもらって身悶えるのは至極仕方ない事だと思う。
　きっと皆も、俺の話を聞いて、優しさ……みたいなものを感じてくれたと思う。
　おっぱいはさ、何ていうか……優しくて、救われてなきゃいけないと思うんだ……。
「おい、おい一誠。すげぇキモい顔になってるぞ」
「……ハッ!?　さ、流石先輩だぜ……まさか俺が会話だけで意識を飛ばされるとは」
　恐ろしい存在だぜ……霧咲真一、俺達に出来ない事をいとも平然とやってみせる。
　そこに痺れて憧れるぜ……割とマジで。
「あー……俺もおっぱい揉みたいっすよー」
「リアスに頼めば揉ませてくれるかもしんねぇぞ？」
「それはちょっと……多分それは先輩だから許されてるんですよ」
　何だかんだで、外から見てると霧咲先輩といる時のグレモリー先輩って、輝いて見えるんだよなぁ……。
　多分あれはそういう事なんだと思う……多分だけど……く、悔しくないもんね！　姫島先輩も同じ様な視線で霧咲先輩を見てたとしても全然悔しくないもんね！　ホント！
　俺にはほら、明るい未来があるから！
「ま、なんだ。場所変えるか、ここでこんな話してたら流石に言い訳できねぇからな」
「あ、そうですね」
　で、結局変えた場所は旧校舎の程近くで、そこには先に逃げた元浜と松田が顔を突き合わせてた。

取り敢えず、俺を置いていった罰としてネックをホールドした俺は何も悪くないと思う。
顔色が悪くなってきたら先輩が止めてくれるしな。
結局、松田と元浜、そして俺と先輩の四人で顔を突き合わせる事になったんだが……。
明らかに、俺達三人組と先輩とで明確なまでの格差が存在する訳だよ……。
先輩は普通にカッコイイし、その上俺達みたいに煩悩のまま笑みを浮かべても、何処かこの人なら仕方がないな……みたいな雰囲気がある。
まぁ、○○だから……で説明がついてしまう、そんな人なんだ。
ホント、得な人種だよな……。
「お前等なー、いつまでも揉みたい揉みたいって言ってるだけじゃ、何時まで経っても揉めない所かお目にもかかれねぇぞ？」
「そこをなんとか、先輩のお力で！」
「やめとけよ。先輩は自分の力でおっぱいを揉んだんだ……俺たちとは違うさ」
「言うな、虚しくなる」
実際、俺達とは違うって言うのは本当の事だ。
この人の女性遍歴はヤバい、何がヤバいかって言うと、この日本に居るにも拘わらず複数の女性と付き合いがあるって事だ。
しかもそれは女性側も了承済み、真のハーレム！　俺の近くにこんな人がいるなんて、ホント奇跡のような存在だぜ……。
「先輩は複数の女性と付き合ってるんですよね？」
「あ？　あー、そうだな」
「罪悪感って言うか、悪い事してるなーって思わないんですか？」
「おい……」
まぁ、確かに倫理観的にどうなのかとは思うが、それでも本人に向かって聞く事じゃねぇだろ……。
でも先輩は特に気を悪くした様子もなく、ただ単に苦笑を浮かべて肩を竦めるだけだ。

そして、聞かれた事にはきっちりと答えを用意するのも、先輩が先輩たる所以だな。
「罪悪感があるかないか、な……そうだな、ないな」
「ないんですか!?」
「まぁ、そう言う所出身だからな。元々倫理観みてぇなもんは殆どねぇのさ、いい女なら抱くし、欲しいもんは欲しい。そういうもんだろ？　ただまぁ、人のもん取るのは趣味じゃねぇな」
自分のもんは自分のもんだからいいんだろ？
そう言う先輩の言葉には、何か……こう、形容し難い暗い部分があった。
松田と元浜は、ハーレム国の方ですか！　帰国子女!?　とかはしゃぎ立ててるけど、俺はそうは思えない。
そう言う国出身だとしても、そう言う国にはそう言う国なりのルールやしきたりみたいなもんがあると思う…
…でも先輩の言葉には、そんな感じのものが感じられない。
そんなものより、もっと暗くてどろどろして吐き気を催すような……。
「どうした一誠？　俺の顔になんか付いてるか？」
「……あぁ、いや、すんません。何でもないです」
「そうか」
短く答えて笑ってくれる先輩は、至って普通の人間だ。
全く、俺は何考えてんだろうな……。
人として何か大事なものが壊れてるなんて……先輩に限ってあるわけがねぇ、だって先輩はいい人だ。
他人に気だって遣えるし、面倒見はいいし、表裏がなくてとっつきやすい。
そんな、普通の先輩だ。
先輩の言葉を切っ掛けにして、次々と浮かんでくる嫌な考えを振り払っていると、俺達の上から凛とした女性の声が降ってくる。
この声は聞き覚えがある。
確か……。

「真一？　そんな所で何をやっているの？」
「おー、リアスか」
そう、リアス、リアス・グレモリー先輩だ。
真紅の髪や青い瞳が人目を惹きつける超絶美人！　おっぱいも村山なんか目じゃねぇくらいデカい！
さ、流石、実物は違うぜぇ……。
駒王学園の二大お姉様の称号は、俺にとって神秘の塊だ。
風に靡く髪は艶やかで柔らかそうな髪なのに、本人の顔はキリッとしたシャープな輪郭が目立つ美人。
更に高い身長に加えて手足も長く、メロンかスイカかと言わんばかりの大きなおっぱいは、男なら一度は顔を埋めてみたいと本気で思うに違いない！
そんなリアス先輩が笑顔と共に視線を送るのは、当然だけど、霧咲先輩だ。
「今、そうだな……猥談やってる」
「ちょっ!?　先輩!?」
「お前も混ざるか？」
「エェェェェェッ!?」
よりにもよって誰に何言っちゃってんのこの先輩!?
この人の行動と言動はずっと奇想天外で、理解できねぇってずっと思ってきたけど！　今回は特別びっくりだぜ！
まさか駒王学園の二大お姉様の片割れであるグレモリー先輩を、こんなあっさり猥談に誘うとか!?
いつもわからなかったけど、この人の神経は未だにやっぱりわからねぇ！
しかも本人はうんこ座りで楽しそうに笑ってるし！
「魅力的な話だけど、そろそろ部活の時間だから。真一も早く来なさいよ？　猥談はまた今度ね」
「エェェェェェッ!?」
「おう、了解だ」
こっちも!?　まさかのリアス先輩も猥談に興味深々!?　それなん

てロマン!?
しかもまた今度やるの!? 猥談! マジで!? 俺もそれ行きたい!
グレモリー先輩の艶やかな唇から猥談が飛び出す所とか、超見たい!
でも実際聞いたら、鼻血による出血多量で死ぬ自信があるね!
……と思ったら、元浜と松田は既に鼻血を吹き出して、ひっくり返ったカエルの様な無様を晒してた。
お前ら……妄想力逞しすぎだろ、どんだけ鮮明に想像してんだ……。
そんな中で、一人だけ動揺せず、グレモリー先輩を見送った霧咲先輩は「さて、と」と軽く呟き立ち上がる。
こう言う軽い動作でも、先輩の身軽さと言うか動きはすごく綺麗に見える。
運動が出来る人間、って感じがする。
動くのを億劫にも思ってないっていうか、自分の体をしっかりとコントロール出来てるって言うか……小さな動作もいちいち綺麗に見える。
当然、先輩は運動神経抜群だ……。
「呼ばれたから行ってくるわ。またな、お前ら……っっても意識があるのは一誠だけか」
「まぁ、こいつらは俺が何とかしとくんで、先輩は行ってください」
「おう、わりぃな。またどっか遊びに行こうぜ」
「はい! 是非!」
にっと笑ってそう誘ってくれる先輩は、後輩の面倒見がいい先輩代表だと思う。
それに先輩と遊びかぁ……毎回先輩と遊びに行ったら、可愛い女の子連れてきてくれるんだよなぁ……。
しかも先輩のお手つきじゃない子で、先輩が興味がなかったり、女の子の方が先輩を友人以上に見てない子だったり……。
多分チャンスを作ってくれてるんだろうな……そのチャンスをも

のに出来てないのが、正しく俺たちのクオリティ！

……思ってて虚しくなってきた、こいつらどうにかしてさっさと帰ろう。

結局、先輩を見送った俺は、この後の出来事で人生が変わる等とは全く思っていなかった……。

黒歌と真一は泥に塗れて暮らしている

駒王学園オカルト研究部所属、霧咲真一、現三年生。
オカルト研究部設立当初からいるメンバーの一人だが、オカ研に対しての貢献度は、ハッキリ言って何の役にも立っていないと言える。
この学園のオカルト研究部とは、オカルト研究とは名ばかり……いや、寧ろ真のオカルト研究とも言える部活動だ。
悪魔と言う、ある意味神秘の極地とも言える存在が、自ら行っている活動である。
そんな中にあって、ハッキリ言えば生物学的に言ってただの人間である真一のやれる事など、一つも存在しない。
「毎回思うが……俺、この部にいるか？　どう思う？　塔城」
旧校舎に存在するオカ研の部室へ歩を進める為、廊下に足音を響かせつつ幾つかの曲がり角を曲がった先の一つで、半身になって後ろを振り向く真一。
振り向きつつ発した言葉には、確かに人の名前と思しき言葉と、ニュアンスが存在する。
一秒、二秒と経つが、真一が呼んだであろう人物は姿を現さない。
全てを知っていると言った風体な真一が、自信満々に問いを発し、それが肩透かしを喰らう。
そうなれば驚く程の赤っ恥で、現役の力士もビックリな一人相撲だが、時間が経てども真一は後ろにある曲がり角へ視線を送る事をやめない。
そして、きっかり十秒。
言葉と共に、真一の視線の先にある曲がり角から、小柄な女の子がするりと出てくる。
その視線はあちこちへと彷徨い、落ち着きがない。
「……部長と副部長が、気に入っているので、必要なんじゃないですか？　先輩は」
「やっと出てきたか。出てこなくてまるで一人相撲、みたいなのはごめんだからな。出てこなかったら全力で追いかけてる所だったぜ」

「出て行ってよかった……本当に、よかった」
にやにやとした笑みを隠さず、軽く放った真一の言葉に、小柄な女の子――塔城小猫は心底安心したと胸を撫で下ろしている。
それと言うのも、過去に一度同じような状況で真一が小猫に声を掛け、その時の小猫は気配を消してその場を立ち去ったのだ。
するとどうだろう、気配を消してその場を後にした小猫は、猛然と走り出した真一に追いかけられた。
そして『正式な意味で』オカ研に所属する小猫を、それこそ、あっと言う間に捕獲して部室へ連行。
首根っこをしっかり掴まれた小猫は、全力で暴れて見せて、罵詈雑言を撒き散らすもその全ては真一には届かなかった。
最後にはその状態のまま部室の扉を開け放たれ、小猫と真一の様子を見たリアスには呆れられ、朱乃には真一とのコントのネタとして使われた。
塔城小猫は忘れない、あの時の屈辱と恥辱を……しかし、仕返しするだけの実力も勇気もない。
小猫が来るのを待っているのか、真一はその場から動こうとせず、じっと小猫を見据えている。
観念した様に溜息を一つ零した小猫は、小さな足音と共に真一の隣へと並び、そっと高い位置にある真一の顔を見上げる。
目つきの悪さが一番最初に目に付くこの男は、小猫の学園における『人間』の先輩だが、その中身は最早人間ではないと小猫は断定している。
へらへらと笑みを浮かべるかにやにやと笑みを浮かべるか、そんな表情の多い真一という人間が、真剣な表情を浮かべる場面と言うのを見た事がない。
不満や不機嫌は見た事があるのだが、その時の空気は思い出したくもない。
しかし、誰も彼も真一の浮かべる『笑み』と言う、余裕の象徴とも言うべきそれを剥がせていない。
そう『誰も』だ。

その中には当然、悪魔である小猫自身やその仲間も含めている。
悪魔である小猫達を前にして、どんな状況……いや、取り繕わずに言おう。
どの様な戦闘の場面でも、その表情は剥せた事は一度もない……ただの一度もだ。
人間同士の喧嘩、悪魔との鍛錬と称した一騎打ち、複数の悪魔を相手取った乱戦。
そのどれもを、余裕の象徴である『笑み』を浮かべたまま、何事もなかったかの様に乗り切ってしまう。
つまりそれは真一にとって悪魔であろうが、生命を脅かすほどの、そして驚愕をもたらす程の存在にはなりえないと言う事実に他ならない。
小猫の隣を歩く男を、そっと密かに見上げ、そう考える。
それに真一を小猫が苦手とする理由が、もう一つある。
「で？　そろそろ、黒歌の話を聞く覚悟は出来たか？」
これである。
二年ほど前――意気揚々とリアスが、拠点に帰ってきた日の事だ。
唐突に、自分の姉が見つかったと小猫に告げたのは。
だが、あまりにも唐突過ぎたその話は、小猫に行動を起こさせるには大きすぎた。
そしてなにより、姉と離れて積み重ねた時間が長すぎたのだ。
姉に会うには覚悟が、勇気が足りない。
リアスにそう告げる小猫に対し、彼女は穏やかに優しく笑いかけ、黒歌の言葉を間違える事なく伝える。
話を聞きに来る心が決まるまで、お姉ちゃんは幾らでも待つ。
しっかりとそう告げた。
その後「小猫の事はお見通しって訳ね……何だか少し、悔しいわね」そう言って苦笑を浮かべていたリアスが、少し小猫には印象的だった。
後日会った時は、リアスと朱乃が悪い笑みを交わし合い、報告を保留する場面に出くわした。

理由があるかもしれないとは言え、結局犯罪を犯したはぐれ悪魔である黒歌の存在が、報告せずとも嗅ぎつけられるかもしれない。
しかし、その心配はないとリアスと朱乃は、静かに笑うだけだ。
そして口を揃えてこう言うのだ。
「あの人が、そんなヘマを踏むはずがありませんわよ」
「そうね、彼がしくじる光景は……あまり浮かばないわね」
だから心配ないと笑みを浮かべ、今はゆっくりと考えろ、そう言われて二年。
リアスと朱乃が絶大な信頼を置く、彼――霧咲真一と会ったのが、去年の話だ。
小猫の姉――黒歌の実質的な主人であり、彼の下で黒歌は、誰にも何にも邪魔されずのんびり生きているそうだ。
その奔放さに多少イラッとさせられたが、それは小猫自身も人の事は言えないので、なんとか飲み込んだ。
姉が事件を起こし、気がつけば小猫はリアス・グレモリーに保護され、そして守られたまま生きてきた。
十分に小猫自身も、奔放に生きてきた自覚はあるのだ。
勿論、守られるだけの存在になっている事に悔しさもあったからこそ、リアスの眷属として今を生きているのだが……。
小猫自身は、今まで幸せに生きてきたと思っている。
姉のゴタゴタがあったとは言え、小猫に直接的な被害はなく、気がつけばグレモリー家に保護されていた。
不幸な時間など、小猫には存在しなかった。
しかし、それを考えると、姉はどうなのか？　と言う疑問にぶち当たる。
自分は幸せだった、しかし、同じように姉は幸せだったのか？
ただそれだけを、他ならぬ姉の口から聞きたかった。
本当は、事件の顛末や自分の事情などどうでもよかったし、姉を責めるつもりは毛頭ない。
何故なら……恐らくグレモリー家に小猫を置いていったのは、他ならぬ姉だと、小猫は思っているからだ。

そして恐らくそれは……間違ってなどいない。
身内には甘い事で知られるグレモリー家に置いていったのだから、打算的な考えがあったにせよ、根っこでは小猫の幸せを心から黒歌が願っていると思えた……。
そして今は、隣を歩く男の下で、幸せに暮らしているらしい。
「先輩……姉さまは、幸せでしたか？」
「……いい度胸してんな、質問したのはこっちなんだがなぁ」
小猫が重ねた問いに、台詞上では威圧を掛けている様に聞こえる言葉を発する真一だが、その実気分を害したりはしていない。
曲がりなりにも、この一年、霧咲真一と言う人物と付き合いはあったのだ。
小猫自身が真一に対して抱く人物像が間違っていなければ、この程度で気分を害するような男ではなく、それは正しく正解だった。
「ま、いいけどよ」
そう言って後頭部を軽く掻きつつ、小猫を見下ろす鋭い瞳には、変な力が入っていない。
ただ自然に、後輩の小猫を見下ろしているだけだ。
続けて真一が発した言葉も、律儀に小猫の問いに答える言葉で、ただ自然に思っている事を告げるような言葉。
「黒歌が今までずっと幸せだったのか、それは俺も知らねぇし、知る必要もねぇ。だがまぁ、ここ十年位は悪くねぇんじゃねぇか？　それも、黒歌自身に聞かねぇとわかんねぇがな」
結局、てめぇの幸せを決めんのは、いつでもてめぇ自身だ。
そう言って隣を歩く真一の言葉は、あまりにも自然で、するりと小猫の心の中に入って落ち着いた。
リアスや朱乃の様に、無償の優しさに包まれた言葉ではなく、聞こえは優しくも厳しい言葉。
幸せにしてあげようと声を掛け、努力するリアスや朱乃とはまた違った優しさ。
何処までも自分で……幸せも何でも、自分自身で見つける物だと言葉の裏で喝を入れるような言葉が、今の小猫にとっては救いの言葉に

すら聞こえた。

もう少し、待ってください……。

真一の問い掛けに対して、静かにそう告げた小猫に、そうかと短く返した廊下を過ぎ去る。

到達地点は必然、オカ研の部室であり、すでに始まっている部活の時間。

その中で、真一は朱乃の入れた茶を飲み、テーブル越しにリアスと顔を突き合わせていた。

小洒落たアンティーク調の一人掛け用ソファにゆったりと腰掛け、足を組んだまま眼下に存在するチェス盤を睨みつける。

視線の先には、既にどうしようもない程に追い詰められ、壊滅と言ってもいい黒の軍勢。

先程までその対局を見ていた小猫は、呆れを含んだ溜息と共に、契約の召喚に応じ姿を消している。

そして、今でもその対局を見守っているギャラリーは、ニコニコと笑顔を浮かべてリアスの斜め後方に待機する朱乃。

ある意味興味深いとばかりに、真一の斜め後方から盤面を覗き込む、木場祐斗。

この二人だけだった。

黒は真一、白はリアスと言う盤面の中で、真一の下した決断は……駒を動かすことだった。

「まだやるの!?　もう負け確定よ!?」

「いやお前……戦闘者に対して、どう頑張っても負けだから諦めろとか、馬の耳に念仏ってやつだ」

「これチェスよ!?　本当に戦闘してるわけじゃないのに、何でそこまで悪あがきするの!?」

「負けたくねーじゃん？」

「貴方みたいな打ち方してたら誰だって負けるわよ！」

真一とリアスの対局は、今まで幾度も行われてきたが、その戦績は完膚無きまでに真一の全敗。

なにせ、毎回多少の戦略の差異はあるものの、大体は王を一直線に狙った全軍突貫の傾向が強い。
放っておいても勝手に向かってくる駒を、適切に打ち落とすだけの簡単な作業であり、リアスとしては戦略も糞もない。
これで真面目にやっているのだから、真一に指揮官の才能はない、と言う事なのだろう。
リアスのしなやかな指が動き、迷う事なく駒を刺す。
「はい、王手（チェック）」
「待て、どこがだ……」
「あのねぇ……いい？　こっちに動いても戦車（ルーク）がいるでしょ？　後この兵士（ポーン）はプロモーションしてるからこっちにも動けるの。わかった？」
「ふむ、なるほどな……じゃあ、次は俺の番だな」
「話聞いてた!?」
聞いているようで全く話を聞かない真一に、リアスのツッコミが猛烈な勢いで決まっていく。
当然真一の駒は、もう何処にも動きようがなく、投了（リザイン）するしかなかった。
対局を見ていた祐斗は、苦笑しつつも面白そうに真一へ視線を送り、朱乃は変わらずニコニコと笑顔を浮かべている。
負けたはずの真一は、小さく笑みを浮かべ、余裕の態度を崩す事はない。
「本当に、先輩は戦闘者として勝負を見ているんですね……ある意味凄いですよ」
「まぁ、実際、真一は戦略を戦術で覆す戦闘者ですから……」
戦略を練り、多角的に、そして広視野に物事を見ている指揮官の策。
それら全てを局所的、且つ挟い視野で繰り広げる戦闘力でもって、覆しうる可能性。
霧咲真一と言う男は、そうなれる可能性を持ち、片足は既にその領域へと足を踏み入れていると言ってもいい。
あらゆる意味で、デタラメとすら言える真一と言う存在に、流石の

リアスも溜息を隠す事が出来ない。
妙に艶っぽく聞こえるリアスの溜息は、光源の少ない部室の中へと溶けていくが、その瑞々しい唇から出てきた言葉はしっかりと鼓膜を打つ。
「まぁ、真一が敵として想定する場合、私はそれに対して有効な戦略も戦術も何一つ持ち合わせていないのは確かね……」
「部長がここまで仰るのは相当な事ですよ？　先輩」
「まぁ、真一ですから……」
何処か諦められた様に溜息を吐く朱乃の姿も、真一にとっては見慣れたものである。
悪魔と言う非常識な存在から、非常識認定されている真一は、まごう事なく人間であると明記しておく。
いつもの光景とも言えるリアスとのやりとりだが、まだ恒例は残っている。
「それで？　黒歌はどうなの？」
「まぁたそれか……別にどうもしねぇよ、塔城の覚悟が決まらねぇ事には話は進まん」
「小猫に話をさせてあげたいから、私の所で報告を止めているのよ？　どうにか黒歌の方から話を持ちかけられないの？」
「無理だな」
恒例だと言うのに、今日は妙に食い下がるリアスの意見を、考えるまでもなく真一は一蹴してみせる。
そこには慈悲も何もありはしない。
ただ純然と目の前に横たわる事実のみを、ただただ並べているだけだ。
そして、事実であるという事は、それをどうにかしようとする事は出来ないと言う事でもある。
「貴方から言えば……」
「だから、無理だっつってんだろ。俺が言ってどうにかなるなら言ってやるさ、だがそうじゃねぇから俺が言ってねぇんだ。何年アイツと付き合いがあると思ってんだ」

「そう、ね……わかってはいるのだけど、小猫の事を考えるとどうにも、ね」
少し俯き加減で言葉を紡ぐリアスの姿に、真一は後頭部をガリガリと掻き毟り、大きな溜息を聞こえるように漏らす。
祐斗も朱乃も、この話題についてはリアスに一任しているようで、口を挟む様子はない。
それが原因なのか、それとも今日はそう言う日だったのか……。
どれが真実かわからないが、妙に食い下がるリアスを前にした真一の言葉を切っ掛けに、話は蓋をしていた中身へと転がっていく。
「後、前にも言ったが……黒歌は家族の様なもんでな、連れて行くなら俺は全力で抵抗するぜ？」
「やめて、黒歌は犯罪を犯したの、指名手配中の罪人なのよ？　いくら家族だからって貴方が立ち塞がる必要はない筈よ」
「笑わせるな。それは悪魔の理屈だろう？　俺はあいにくと人間でな、悪魔が犯した罪状なんざ知った事じゃねぇ」
「真一！　お願いよ、わかって。私は貴方と……」
「それに、アイツが殺人？　殺魔？　どっちでもいいか……それで一人の存在として終わってるなら、俺なんざとっくに腐り落ちてる」
触れた。
触れてしまった。
何の脈絡もない、ただの言い合いの最中、真一は触れてしまった。
リアスと朱乃があえて触れないようにしていた、真一の泥に塗れた過去に、自ら触れてしまった。
こうなればもう真一は止まる事がない。
耳を塞ぎ、目を閉じ、目の前にある事実から目を反らしたいリアスや朱乃の心情を理解しつつも真一は言葉を止める事はない。
「殺したさ。何人も何十人もな、何でも屋に入ってくる仕事なんざそんなもんだ。明るい仕事なんざありゃしねぇ、街の廃品回収やリサイクル運動して金貰える仕事じゃねぇんだ」
「やめて、真一、やめて。そんな事聞きたくないわ」
「いいや、ここで知ってもらう。俺が黒歌と同じ立場だって事を知っ

てもらう。黒歌は理由があったのかもしれねぇ、だが俺は理由なんざねぇ、仕事だから殺した。金が貰えるから殺した。生きたいから殺した。それ以上の理由なんかどこにもねぇ、これでも俺が黒歌の前に立ち塞がる理由はねぇってか？」

リアスは、真一の言いたい事がよくわかっている。

彼女は決して愚者ではなく、真一がただ感情に任せて過去を吐露している訳ではないという事が、本当によくわかっている。

泥に塗れて、血に汚れて、それでもなお守りたいものがある。

それは悪い事なのか、守ろうとすらしてはいけないのか、そう問うている事はリアスにもわかっている。

殺しが悪いのか、理由なき殺しが悪いのか、所詮そんなものは水掛け論。

殺し自体が悪だと言う者が多ければ、世界的に見て殺し自体が悪だ。

理由なき殺しが悪なのだと言う者が多ければ、それが悪になる。

所詮世の中そんなもので、この問い掛けに答えはなく、一般常識的に殺し自体がいけない事だと認めてしまえばいい。

しかし、真一を前にして、リアスはそれを認めるわけには行かない。

何故ならそれを認めてしまえば、霧咲真一は、リアス・グレモリーと対立する事になってしまう。

真一と言う人物を識り、気に入り、仲良くなった。

日々が色付き、幸せな毎日が自分を迎え入れ、その中心にはいつも真一や朱乃の姿があった。

そんな彼を……霧咲真一を、どんな手を使ってでも、殺さなくてはならなくなる……。

その答えにたどり着いたリアスの頭の中に、何があるか……ただ純粋に『嫌だ』と言う子供の様な感情だけだ。

否と言う程理論的な否定ではなく、嫌だと言う感情的な理論も何もない、ただ純粋な感情。

濡れた瞳で、鋭い眼光をあらわにする真一の瞳を睨みつける。

だがそれでも、真一は揺るがない動じない。

結局彼女の口から出てきたのは、凛とした理性的な言葉ではなかった。
「……嫌よ。真一を殺すのも、捕まえるのも、真一に敵として見られるのも。その全てが嫌、真一には味方で居て欲しい。仲良くなって欲しい」
震えた声で、ただ、子供の様に嫌だと漏らすリアスの言葉を受け止める。
そして、先程までの雰囲気は何だったのかと言う程にあっさり、真一は鋭く刺すような眼光を解く。
そこから出てきた言葉も、呆れた様な、考えるのが面倒臭くなった様な言葉だった。
「じゃあ、もうそれでいいだろ」
「え？」
「お前は俺と戦うのが嫌だ。俺は黒歌を連れて行かれるのが嫌だ。ならもう、ちょっと口を塞いでチャンスが巡ってくるのを待つしかねぇだろ」
「どういう事ですの？」
話の間、決して真一から瞳を反らさなかった朱乃から、疑問の声が上がる。
場の空気が緩んだ事を察して、祐斗は構えを解く。
空気が悪いままに、話の上でもリアスの身が脅かされるならば、剣を抜く事を躊躇しない。
それが、木場祐斗と言う男だ。
勝てるかどうか、と言うのは別問題ではあるが……。
額に浮かんだ冷や汗を軽く拭い、祐斗は先程までと同じく傍観に徹する。
この場の役者は自分ではないと言う事を、正しく理解しているからだ。
「俺がこの世界に首を突っ込む限り、そういうチャンスには事欠かねぇ……と思う」
「自信なさげなキャラは似合いませんわよ？」

「るっせぇなぁ……まぁ、そういう事だ。お前らの上と話す機会がありゃあ、どうにか出来るさ……それも、遠くない気がするしな」
「その心は？」
「勘だ」
「えらく頼りない根拠ね……」
にやっと、笑みを浮かべつつ、自信満々に言い切った真一にリアスの呆れたような声が被さる。
しかし、勘とは言いつつも、真一の脳裏には銀色か灰色か区別のつきにくい色の髪を持った人物が浮かんでいた。
リアスの呆れた様な声を最後に、この件には一先ずの決着を迎えた。
問題の先送り、とも言えるが……。
しかし収まった事は収まったこの場で、空気を入れ替えるには今しかないと感じ取ったのは、誰であろう木場祐斗だった。
先程までの張り詰めた空気を流した様にニコリと爽やかな笑みを浮かべ、祐斗が声を掛けたのは、勿論と言うか真一だった。
「では、この件は一先ず置いておくとして……霧咲先輩、稽古お願いします」
「あ？　まぁーたかよ……メンドくせぇんだよなぁ、お前毎回本気だし」
「そんな事言っても、割と先輩が楽しんでるのは知ってるんですよ？」
不満そうな瞳と雰囲気を出してみるも、祐斗の爽やかな笑みと雰囲気は、それを寄せ付けようとしない。
真一を強かに受け流す側面を持ったこの男も、やはり普通ではない。
どうあっても祐斗は折れないと理解した真一は、後頭部を軽く掻きつつ、溜息と共にゆっくりと立ち上がる。
「あー、しゃねぇなぁ……」
「あ、私も見に行くわよ」
「当然、私も行きますわよ？」
「部活は？」

「これも立派な部活よ！」
「小猫ちゃんにお任せしますわ」
ホントに大丈夫かよ……この部活……。
呆れた様な真一の声は、魔法陣に消えていくリアスと朱乃、そして祐斗の姿の様に部室の中へ掻き消えていった。
当然真一はこの後、全力で稽古場へと爆走していったのは、言うまでもない。

龍と人と悪魔とそれ以外

霧咲真一自身、そこを通りがかったのは偶然だった。
何か様子がおかしいとか、不自然だったから様子を見てくるとか、そう言った前触れも何もない状態で噴水のある夕暮れの公園へと足を踏み入れたのだ。
毎日毎日オカルト研究部での活動として、部活とは名ばかりの朱乃とリアスの話相手と遊び相手をさせられたり、後輩の塔城小猫から黒歌の様子を聞かれたりと今日も忙しかった。
何より疲れるのが、オカルト研究部の二年、木場佑斗との模擬戦。
向こうは剣でこちらは拳を武器に、何本も相手をさせられて、少し疲れた状態で一人さっさと家に帰る。
そんな日常を送る自分自身のご褒美として、休日を誰とも会わずに過ごし、呼ばれたオカ研の活動もぶっち。
ぼんやりと何も考えず散歩に出かけ、少しいい店で飯を食い、女連れの一誠を見かけるが無視してぶらぶら。
面白い本はないかと本屋に入ったのが運の尽きで、立ち読みと本の吟味を繰り返して、外に出れば既に赤い景色に覆われていた。
そして、帰って飯の用意をするかと思い立ち、帰路へとついた。
その途中で噴水のある公園を認識し、公園ならば自販機か最低でも水飲み場くらいはあるだろうと、小さな欲求を満たしに足を踏み入れた。
ただそれだけだった。
それだけのつもりであったはずなのだが、真一の目の前には、赤い湖が出来上がっている。
その中心に倒れるのは、その人物が一年の時から何かと世話を焼いていた人物で、真一とも関係がないわけではない人物。
兵藤一誠。
一誠の容態は、外から見ているだけで芳しくない事がわかる。
既に手遅れ、明らかに人の体から許容量以上の出血が見られており、いわゆる死に体だ。

血の赤が形成する湖の前には、水を吹き上げる噴水があり、その縁に黒い翼を持った人物がゆったりと腰掛けて一誠をじっと観察している。
人気と呼べるのはこの場で、真一と一誠、そしてその女性だけ。
そして、明らかにその女性の眼差しは、救う者のそれではない。
しかし、真一にとってそのような事は些末事だ。
例えその人物が自分へと視線を向けて驚いたような表情を浮かべようとも、手に発光している槍をどこからともなく出そうと、霧咲真一の前には関係のない事だ。
真一の興味はただ一点、目の前で古巣でよく見た光景が広がっている事だけ。
人が死ぬその様を、いかにも楽しそうに観察し、目の前の死が遂げられる待っている人物がいる。
見ているだけで感情の何処かが冷えていくような、懐かしい光景が、目の前に広がっている事実だけが真一の興味を引いていた。
ゆったりと血溜りに倒れる一誠へと歩を進め、血溜りの中に躊躇する事なく足を踏み入れる。
べちゃべちゃと靴にまとわりつく赤い水を跳ね上げ、一誠を見下ろす形で立つ。
その鋭すぎて目つきの悪い瞳には、恐怖も混乱も動揺も、何もない平らな感情だけが存在した。
突然視界に現れた真一の姿に反応したのか、既に光が薄くなっている一誠の瞳が真一を捉え、震える唇は言葉をたどたどしく紡ぐ。
「せ、ん……ぱい」
「何だ、一誠。お前、死ぬのか」
「お、どろ……ないん、です、ね」
「見慣れてるからな」
「は、は、は……そっか、やっぱせん、ぱいはぁ……そうな、すね」
「あぁ、ただまぁ、そうだな。目の前で死なれると目覚めが悪いからな、生きたいならリアスを呼べ。多分お前を殺したんだろうと思われるエロいねーちゃんは俺が仕置しといてやる」

それだけ言って、槍を構える黒い翼の人間に視線を向ける真一に、一誠は薄く笑みを浮かべる。
視線を合わせた真一が思ったのは、黒黒黒黒。
ただ黒なだけだ。
翼も黒、髪も黒、衣装も黒と黒づくめだ。
黒と言う色を前面に押し出した女性は、警戒する様に、しかし何処か油断の色を滲ませた鋭い瞳で真一を睨みつけている。
「お前が堕天使、ってやつか？」
「貴女は確か……霧咲真一、だったかしら」
「何だ俺の事知ってんのか」
「えぇ、勿論。イッセー君の周りの友好関係は把握しているの、これでも慎重派なのよ？　私」
「慎重派はこんな事しねぇだろ、行動が安易すぎる」
呆れた様に肩を竦める真一だが、目の前の堕天使は薄く笑みを浮かべてせせら笑うだけだ。
「問題ないわよ。明日には皆忘れてるんだし、ね？　ただ……」
「あぁ、その先はいい、俺は別って事だろ？　多分ここにも結界ってやつが張ってある。にも拘わらず入ってきた俺にそれが効くかは分からない、ってわけだ。だから殺しておこう。こんな所だろ」
「貴方、随分こちら側に詳しいのね……まぁ、それも当然かもね、悪魔なんかと肩を並べてるんだもの。妙な知恵があってもおかしくないわね」
堕天使の存在に驚きもせず、一誠の体から溢れ出る血溜りの中を歩く真一の表情には、怒りも焦りも不安もない。
ただじっと目つきの悪い瞳で、目の前の堕天使を見ているだけだ。
そこで、堕天使でも真一のものでもない声が、真一の後方から聞こえてくる。
「貴方ね？　私を呼んだのは……ってあら？　真一じゃない……部活をサボった話はまた聞かせてもらうわよ？」
「一誠の奴、助言通りリアスを呼んだか……まぁ、一誠の場合、リアスのおっぱいに釣られただけのような気もするけどな。そして俺には

薮蛇だった、と」
「話が全く読めないんだけど……貴方の前にいる堕天使がこの子を殺したって事でいいのかしら？」
「まぁ、そうだな。そいつ、助けてやってくれ。まだ死にたくないらしい」
「そうね、私が呼ばれるくらいだものね、いいわ。どうせそのつもりだったし、貴方の頼み、引き受けてあげる。真一はどうするの？」
「俺はこのねーちゃんに仕置する。一誠にそう言ったからな」
　リアスの姿を認識してから、ギリッと奥歯を鳴らしそうなほど歯を噛み締め、睨みつける堕天使。
　そんな彼女を相変わらず何の感情も浮かべていない表情で、ただ淡々と事実と行動を宣言する真一に、リアスは肩を竦めるだけで手を貸そうとはしない。
「まぁ、貴方は私の眷属でもなければ、悪魔ですらないからどうこう言わないけど……怪我するのだけはやめてね？　朱乃も私もそれ位の心配はするわ」
「するのか？　俺が？」
「……んー、ま、それはないわね」
「……言ってくれるじゃない。たかが人間風情と悪魔風情が」
「私もそうだけど、貴女もこの機会だから知っておくといいわよ」
　世界には例外ってものがあるって……そう言い残し、リアスは一誠と共に姿を消した。
　その際一誠の視線が自らを見ていた気がした真一は、最後に振り返って一誠に対し、いつもの様にニッと笑みを浮かべてみせる。
　どこか安心したかの様な一誠の表情を最後に、彼らの姿は消えて、その後には光る槍を持った堕天使と目付きの悪い人間だけがその場に残る。
　そして、真一の前に立つ堕天使は、心底驚いた様な表情で真一を見ていた。
「驚いたわ……まさか、本当に見捨てるなんて」
「見捨てる？　誰が、誰をだ？」

「あの悪魔が、貴方を、よ。何だかんだで手を貸すと思ってたのよ？
別にそれでも構わないと思っていたし。それに、悪魔と人間は嘘をつく生き物でしょう？」
「ははははっ、おかしな事を言うな？　それはお前等もだろ？　その黒い翼が何よりの証拠じゃねぇのか？　つまりそれは嘘の翼って事だな」
「あまり大きな口を叩かないほうが身の為よ？　寿命を縮めるわ」
口調こそ冷静だが、視線で人が殺せるならば、真一はもう百回以上死んでいるだろう。
それほどの形相で、堕天使は真一を睨みつけており、それに伴うプレッシャーは普通の人間では耐えられず腰を抜かし命乞いすらしているだろう。
だが、真一の雰囲気や纏う空気は変わる事がなく、ピクニックにでも足を伸ばしているような軽い雰囲気だ。
だらりと力を抜いて緊張もしていない雰囲気や態度が、益々堕天使の神経を逆撫でする。
まるで、堕天使である彼女よりも自分の方が上位の存在であると、そう雰囲気自体で語っているような気がしてならない。
そしてその印象はまさにその通りであり、真一は睨みつけてくる堕天使の言葉の一つ一つに、心底おかしいと言う様に笑い声を上げるのだ。
真一の上げる笑い声は、嘲っているわけでもなく見下したように嗤う訳でもなく、ただただ純粋に堕天使の彼女が面白い事を言っていると言う様に笑うのだ。
それはつまり、堕天使である彼女を目の前にして尚、取るに足らない存在だと言われているに等しい。
「は、あっはっはっは！　誰の寿命を縮めるって？　いいなぁおい、本当に面白い冗談だ。純粋に笑ったのは久しぶりだった」
「……本当に目障りで人の神経を撫でるのが好きな男ね」
「うん？　まぁ、何言ってのかよくわからんが……お前面白いからな、殺すのはやめといてやるし、リアスに殺されそうになっても助けてや

るよ。条件付きでな」
純粋に善意と言うか、言葉通りの感情でもって堕天使に言葉を投げる真一に対しての返答は、空気を切り裂く音が聞こえる程の速度で飛翔する光の槍だった。
砂埃を巻き上げ、穂先一点で空気を切り裂き水平に飛翔する槍は、あっさりと真一の元へと届く。
そして一秒にも満たぬ時間で真一の胸部を貫く……筈だった光の槍は、いつの間にか真一の手の中にあった。
足元に大きく爪先で描かれたような円があったが、堕天使の女性にはそれがいつ描かれ、それが意味する所がなんなのかも理解出来ていない。
特徴的な形状をしているが、用途と長さからすれば槍としか言えない武器をしげしげと観察する真一に、堕天使の女は何が起こったのか頭が追いつかない。
確かに真一に届いた筈の槍は、いつの間にかその飛翔を停止し、真一の手の中。
驚愕する暇もない程にあっさり、それこそそれが自然な事であるかの様に、高速で飛来する槍を掴み取った。
「槍を投げるなよ、槍ってのはこうして使うもんだぜ?」
手に持った槍を、くるりと一回転させる。
くるくると両手の中で縦横無尽に回転する光の槍は、その軌跡を残しながらも、ぴたりと停止する。
軽く腰を落とし、右手で穂先側を握り、左手で槍の後方を掴む。
地に着くスレスレの位置で穂先をピタリと停止させ、穂先はしっかりと堕天使の方向へ向いている。
堕天使の女がそれを認識した瞬間、真一は一歩踏み出し、過程を見ていた筈の意識が切り取られた様に、堕天使の目の前には真一の姿。
視線を下げた眼下には、顎を狙うようにして下から掬い上げられた槍の穂先が迫る。
それでも、辛うじて迫る穂先の瞬間を捉える事が出来た堕天使は、すぐさま体を右へと回転させる。

正しく地を転がる事になった堕天使だが、その瞳の戦意は衰える所か、さらに燃え盛っている。
羽ばたき空を舞う隙も与えられず、無様に地を転がるしか回避の方法はなかった事が、彼女のプライドをいたく傷つけたらしい。
お？　と軽く、少しだけ興味を持ったような声を上げる真一は、掬い上げてピタリと止めた穂先を見詰める。
そして地に膝を着けている堕天使へと視線を移動させ、構えを解いて槍を肩で担ぐ様に軽く二回、自らの肩を叩く。
肩を叩く回数が三回目を数えようかという瞬間、真一が手に持っていたはずの光の槍は、ともなく姿を消した。
「貴方に武器を与えるのは危険みたいね……」
「消えちまった……まぁ、いいか」
おそらく堕天使が自ら消したのであろうと予想する真一は、特に気負った様子もなく、当然と言う様に拳を握り込む。
それを見た堕天使は、如何にも可笑しそうにせせら笑うが、真一はそれにとりあう事はなく拳を握るだけ。
「武器もなしに素手？　貴方の武器の扱いには少し驚いたけれど、素手で何が出来るって言うの？　貴方達人間とは根本的に能力が違うのよ？」
「何だ、武器持って相手して欲しかったのか？　早く言えよな……何かいいもん、あれでいいか」
堕天使の女が発する嘲りを含んだ言葉を華麗に曲解し、独自の認識で会話する真一に、堕天使は困惑の表情を初めて見せる。
明らかに戦闘になっているにも拘わらず、真一には戦っているという真剣味のようなものを感じない。
命のやり取りをしているというのに、極限状態での緊張感も感じず、命の危機も感じていない様な……ただ遊んでいるだけの様な緩い雰囲気。
戦闘が始まる前から今まで、それは徹頭徹尾変化を見せていない。
そんな真一がフラフラと歩み寄ったのは、立て看板として地面に打ち付けられている金属の棒。

明らかに地面に固定されているそれを、片手で握り込み、それを無理矢理持ち上げる。
加えられた力に耐えかね、一気に弾けたような甲高い金属音と共に、地面へと打ち付けられていたボルトが弾け飛ぶ。
そして、立て看板として役目を果たしていた金属の棒は、立て看板としての役割をあっけなく捨てさせられた。
ご丁寧に看板の板まで手で無理やり剥ぎ取り、真一の手の中に収まったのは、長い金属の棒だ。
「……貴方、本当に人間なの？」
「よく言われるが、人間だな、生まれてこのかたその枠内を外れた事はねーよ」
あまりの光景に呆気にとられていた堕天使の女は、驚愕の表情と共に真一の存在自体を疑ってかかる。
言われた本人は苦笑を浮かべてはいるが、手はきっちりと動かしており、手の中に収まった棒はそれだけで生きているかの様にくるくると動き回る。
そしてまたピタリと動きを止めた瞬間、飛来する光の槍。
視界に飛来する槍を捉えた瞬間には、真一が手の中に収めた金属棒は回転をやめていない。
回転する金属棒の先が、飛来した光の槍の穂先と衝突し、無理矢理力を加えられて軌道を変えられた槍は明後日の方向へ。
間を置かず二本目の槍がまっすぐ飛来するが、右、左と回転の方向を変える金属棒はまだ止まっていない。
左側で回転する金属棒の先に、またしても穂先を合わせられ、地に突き刺さっているのは槍の方だ
一秒が生死を分けるやり取りの中で、たった一本の金属棒の回転で二本の槍を弾き飛ばす技量は、もはや偶然では片付けられない。
回転の勢いそのままに、腰の周りを舐める様に回転を続ける金属棒を、右腕と脇で挟み込み腰を落とす。
お返しとばかりに真一が一歩踏み込んだ瞬間には、既に手の中の金属棒は突き出されており、その先端はしっかりと堕天使の腹をまっす

ぐ捉えている。
柔らかい肉に金属の棒が突き刺さる感触に、真一はにやりと笑みを浮かべ、堕天使は鮮やかな紅を口から撒き散らす。
金属棒を伝って堕天使の肉体を駆け巡る衝撃は、表面の損傷だけに留まる事はない。
突き抜けた衝撃は、逃げ場のない体内を暴れまわり、内蔵を傷つけて回る。
「げ、えっ！　ぁ……」
「何だ？　柔らかいな」
ただの感想だ。
真一の口をついた言葉は謝罪でも嘲りでもなく、ただ金属の棒を腹に突き刺した時の感触を、感想として発しただけの無機質なものだった。
突き出された棒の衝撃に、堕天使の体は後ろへと吹き飛ぼうとするが、それを許さないとばかりに真一は極自然に一歩踏み込む。
それにより、無理矢理金属の硬い感触を押し付けられ、杭を打ち込まれた様に堕天使の体は金属棒の先に縫い付けられる。
ふわりとした一瞬の浮遊感を、堕天使が朦朧とする意識の中自覚した時には、体は天へと向けられた金属棒の先に支えられている。
その次の瞬間に襲ってきたのは、全身を振動させるような衝撃。
背中側からバキバキと嫌な音が公園内に響き渡り、同時に堕天使の艶やかな唇から、絹を裂く様な悲鳴が上がる。
げっほ！　と鮮血と共に咳をする堕天使を見る暇もなく、真一は手に持っていた棒を真ん中から半分に折る。
折った二つの棒を両手で持ち、堕天使の腹に飛び乗った彼が浮かべたのは、冷淡なまでの小さな笑み。
そのまま振り上げた棒を、地に広がる黒い翼へと無慈悲に……打ち込む。
柔らかい何かを貫く感触と共に、堕天使の羽は、文字通り地へと縫い付けられた。
「あ、ぎゃっ！　ぎぃっ……な、で、私の羽、羽がァ……」

「ぎゃーぎゃー喚くな、このぐらいどうって事ないだろ？」
堕天使の象徴である翼を無骨な金属の棒で縫い止められ、そこから伝わる激痛で思考が混ざり合い、見上げた真一の心底不思議そうな顔に恐怖を抱く。
纏まらない思考の中で、あっさりと堕天使の心に刻まれたのは圧倒的な恐怖だった。
あまりにも短い戦闘……いや、戦闘と呼ぶ事すらおこがましい、真一の中ではただの遊びか少し撫でただけのつもりだったのだ。
戦闘だ命のやり取りだと認識していたのは自分だけで、霧咲真一と言う男はそうとは思っていない。
その事を確信させる程に、あっさりと『遊び』は終了し堕天使は鬼に捕まり、身も心もねじ切れてしまいそうな程の恐怖に支配される。
ただ一つ、純粋なまでの恐怖に支配された堕天使の口から出てくるのは、惨めな命乞いだけ。
「こ、ろさ、な……で」
「はぁ？　話聞いてたかお前、殺さないって言ってんだろ。現に生きてるじゃねぇか」
心底不思議そうにそう言い切る真一に、これ以上はないと思っていた恐怖心が更に肥大化する。
もう堕ちる事など無いと思っていた心が、真っ黒の暗闇に塗りつぶされていくような感覚を覚え、その事にもまた恐怖を感じる。
何だ、この男は何なんだ？　人間などではない。
こんなものが人間であってたまるものか、堕天使の思考は恐怖とその考えのみに支配され、真一を見る目は既に人間ではないものを見る目に変わってしまっている。
こんな存在が、こんなものが人間だというのなら……。
（私は、人間が……怖い）
重ねてきた経験と知識を覆す程の圧倒的な力と技巧を兼ね備えながらも、その心は大事な何かが壊れてしまっているかの様に、純粋で残酷でそれ故にどす黒い。
本気でこの男は堕天使を殺すつもりがない。

しかしそれは、相手を傷つけないと言う思考ではなく、死んでいなければ何をしてもどんな状態であってもいいと言う思考に行き着いている。
生命活動をしており、喋る事が出来、物を食べる事が出来る。
それらさえ出来ていれは生きているのだと、この男は本気でそう思っている。
明らかに瀕死の状態である堕天使を見下ろしながら、不思議そうに首を傾げている事から、その事実は明らかだ。
そしてどういう訳か、真一から受けた傷は、圧倒的に治りが遅い。
それはつまり、霧咲真一は眼下に存在する堕天使を、それこそいつでも殺す事が出来ると言う事実に他ならない。
相対した者には冷酷なまでに純粋に、純粋なまでに冷酷に、そうなる事が出来る存在こそ霧咲真一なのだ。
死の恐怖に怯え、目の前の存在に怯えている堕天使の様子を見下ろし、満足そうに一つ頷いた真一は堕天使の上から体を避ける。
それこそ今まで堕天使が感じていた恐怖ごと避ける様に、あっさりとその身を引いた。
ついでとばかりに、翼を縫い止めていた棒を引き抜き、手を取って立たせると言うおまけ付きだ。
「ど、し……て？」
「だから、殺さねぇっつってんだろ、人の話を聞かねぇ奴だな。お前の顔を見りゃあ仕置きは十分だと判断しただけだ」
涙と鼻水、唾液と血に塗れた無様な表情を晒す堕天使を見つつも、肩を竦めて有言実行しただけだと言う様に振舞う真一。
それ以上は手を出そうとしないし、そう言う雰囲気もない。
その空気を察したのか、呆然とした表情で、堕天使は真一の前に力なくへたり込む。
恐怖で膝が笑い、安堵で腰が砕けるその様は、まるで真一に跪いているようにも見えた。
堕天使を見下ろす真一の表情は気が抜けており、油断しきっている。

正しく隙の塊であり、今ならば堕天使でなくとも簡単に殺せそうにも感じる。
しかし無理だ。
既に首輪ははめられてしまったのだ。
恐怖と言う名の鎖付きの首輪を、心にはめられてしまった堕天使は、既に真一と言う存在に屈服してしまっている。
自分の身では傷つける事など出来はしない、膝を折らせるなど以ての外、殺すなど論外。
プライドを押しのけてまでネガティブな思考が頭の中を支配し、真一と言う存在を、恐怖の体現者たる絶対者として心が認識してしまっている。
殺す事に躊躇がない、痛めつける事に躊躇がない、そして何よりそれを普段と平常通りの精神下で実行する。
殺す気がなくても必要があれば殺すし、害する気がなくとも生きていればいいと判断すれば、手足をもぐ事も鼻歌交じりにやってみせる。
そんな突拍子もない、行動を予測出来ない存在である真一が、堕天使の女はただただ怖かった。
震える体を押さえつける事も出来ず、ただ涙が流れる呆然とした瞳で、絶対者を見上げるだけ。
それだけが今彼女に許された、ただ一つの行動だった。
「まー、どうせここで見逃しても？　お前等がここにちょっかい掛けるつもりなら、遅かれ早かれどうせ死ぬだろ。その時相対してるのがリアスだったら助けてやる。さっき言った通り、条件付きでな」
リアスじゃなけりゃその時は知らん。勝手に死ね。
そう言ってけらけらと笑ってみせる真一は、確かに人間と言う枠から精神的に大きく逸脱しているようにも見える。
真一をただ呆然と見上げる堕天使には目的があり、それを諦めるわけにはいかなかった。
しかし、この堕天使は膝を折ってしまった。
再起不能と言い変えてもいい。

「わた、しは、ど……すれば？」
「知らん。俺はこれ以上てめぇと遊ぶ気もない。どうすればいいかはてめぇで決めて、好きにしろ。ただ、遊ぶならリアスの前でだけにしな。俺もちょうど黒歌以外に手足が欲しかった所だ。しかも堕天使ときた……悪魔側以外にも情報が得られそうな可能性を俺は捨て置かねぇぜ」
この言い分からして、この霧咲真一と言う男は、隙あらば自らを隷属させて便利屋のように使う気だろう。
そうなれば、自らが忠誠を誓ったあの方達への背信行為になる。
しかし、これ以上計画を進める気ならば、この男から逃れられる可能性は殆どない。
成功して、リアス・グレモリーの目が届く地域から脱出出来れば、逃げられる可能性もあるが……この男の言う事を信じるならばその可能性も極僅かだと言える。
唯一この男から完全に逃れる事が出来る選択肢は、今進めている計画をここで放棄し、何処かこの男の目の届かない遠くへと逃げる事だ。
それも無理な話だという事は、堕天使にもわかっている。
既に計画は戻れない所まで来ている。
目星をつけた神器を所持するシスターも呼び寄せ、戦力であるエクソシストや堕天使も集結している。
今計画を放棄するなど、土台無理な話であり、そうなれば呼び寄せた戦力に自分自身が始末されるだけ……。
纏まらない思考の中で、堕天使は必死に自らが生き残る方法を考え、模索する。
そこで一つの天啓とも言える程の光が、堕天使の頭の中に浮かび上がる。
「貴方が、わたし、を……助けてくれる、って本当、なの？」
「そうだな……俺は嘘は平然と付くが、やるっつった事は出来る限りやる事にしてるんでな」
「……貴方は、私に、何をさせたいの？」

段々と言葉に力が戻ってくる。
傷もようやく本腰を入れて塞がり始め、お腹の中で破砕した臓器も再生を始めている。
しかして、依然として真一に反抗するだけの気概は、一向に再生する兆しを見せない。
今はとにかく、この男が自らを助けてくれると言う保証を、この男の口から聞かせて欲しかった。
それが、自らにとって何よりの救いになると確信して……。
「別に大した事じゃねぇ……ただ、堕天使の内情を知りたいだけだ。悪くない話だろ？」
「堕天使に、喧嘩を売るつもり？」
「いーや？　ただ知りたいだけだ。今の所はな……」
この男が自らに求めるのは、間者の役割。
しかし、この男は堕天使の陣営に喧嘩を売るつもりはないと言う。
ただの口から出た出任せかもしれない、そう言っておいて、自らが敬愛するあの方達を害する気かもしれない。
そう思ってはいても、小さく笑みを浮かべて堕天使を見下ろすこの男の前で取れる選択肢は、当然多くはなかった。
へたり込んでいた腰が動き、今出来る最善の行動を、堕天使は知らぬ内に取っていた。
背信行為と知りながらも、これこそが自らが生き残る唯一の道だと確信していたから……だから膝を折り、霧咲真一に頭を垂れる。
「堕天使レイナーレは、貴方に……従います」
「契約完了だな……」
楽しくなってきやがった……。
そう言って可笑しそうに笑う真一は、ギラついた鋭い瞳で、闇夜にポッカリと浮かぶ月を見上げていた。
彼が今回の件に関して、どんな顛末を描いているのか……それは他ならぬ真一本人以外には、知る由もない事だった。

悪魔と堕天使と人間＝普通とドーナツシートと無慈悲

ＩＮ　一誠

今日はおかしな事だらけだ。

朝から、今まで特に接点もなかった筈のリアス先輩から声が掛かるし……まぁ、話題は大体霧咲先輩の話なんだけどさ。

本人のいない間にその人の事を話すってのは、どうにも性に合わないんだけど……まぁ、陰口じゃないしいいか。

って、それだけなら別におかしな事はないよな、接点が霧咲先輩しかなかった筈のリアス先輩が急にってのはおかしな話ではあるけど……。

一応許容範囲だよな……だけど、おかしいのはここからだ。

元浜と松田に紹介したはずの俺の彼女、天野夕麻ちゃんを知らないって言うんだよな……他の人に聞こうにも、元浜と松田にしか紹介してねぇから確かめようがないし……。

交わしたはずのメールや、撮ったはずの写真すら俺の携帯から消えてる。

こんな事あり得るのか？　夢？　いや、それにしては余りにもリアルすぎた。

それに、経過した日数にも整合性がないし、もし夢なら俺の記憶は数日抜け落ちてるって事になる。

結局その日は、リアス先輩に声を掛けられた事に、少し浮ついた気分で一日を終えて……。

耳が聞こえ過ぎたり、明らかに運動能力が向上してたり、俺自身の中にある違和感っていうか……変化みてぇなもんが浮き彫りになって……。

その変化は、元浜と松田の秘蔵だと言うＤＶＤを見ている時、見逃せない物となって現れてきた。

暗闇の筈なのに、はっきりと視界が開けてる。

元浜や松田の顔も、暗くて見えないはずなのに、くっきり昼と変わらない様に……いや寧ろ昼間よりよく見える。
そこに来て、俺はようやく自分の変化に怖さを覚えた。
自分の知らない間の変化が、余りにも俺にとっては大きすぎた。
そう考えた瞬間気分が悪くなって、テンションの上がるエロい映像を見てる筈なのに、そんな事はどうでもいい事にすら思えてくる。
そんで、帰り道に夕麻ちゃんと来た公園に立ち寄って……。
「あ？　一誠じゃねぇか」
「先輩……」
公園の噴水の縁にあぐらをかいて、缶コーヒーを傾ける霧咲先輩と会った。
多分、この時の俺の気持ちは、誰にもわからないと思う。
自分の知らない変化が、内にも外にもあって、漠然とした原因のわからない不安が渦巻いてて……。
それでも、この先輩の目は、いつもと変わらなくて。
夢か何かよく分からず夕麻ちゃんに殺されかけた時に、見上げた先輩の目が、今この瞬間の目と変わりなく……スゲェほっとした。
先輩だけは変わらないでいてくれるって、妙な安心が俺の心の中に生まれたんだ。
俺、今ひどい顔をしてるんだろうな、先輩が少し驚いたように目を見開いて俺を見てる。
その後呆れた様に肩を竦めて溜息を吐いた先輩は、公園の中にある自販機まで歩いて行って、自分のと同じ缶コーヒーのボタンを押す。
ガタリと音が鳴ると同時に取り出した缶コーヒーを、軽く俺の方に放り投げてきた。
あっつい！　とか思いながらも、普通に受け止めた俺に対して、先輩はいつもの様に小さく笑みを浮かべて再び噴水の縁に座り込む。
「どうした？　まぁ、座れ」
「……はい」
先輩の言葉に促されるままに、俺は先輩の隣に腰掛けて、先輩と同じ様に缶コーヒーを傾ける。

あ、これブラックだ、にっが！
俺は砂糖もミルクも必要派です……先輩。
……あ、ダメだこれ、わかっててやった顔だ。
間違いねぇ、だって横目で俺の様子見てニヤニヤしてんだもんよ、楽しんでやってるに違いねぇわこの人。
「にげぇ話すんならにげぇ飲みもんだろ」
くっくっくっと笑う先輩は、丸きり悪人面だが、それでも俺はこの人がかっこいいと思った。
だからかもしれないな、元浜や松田に話して、笑われた話を先輩にしちまったのは……。
先輩はそもそも俺に彼女がいた事実すら知らないし、そもそも夢かもしれない俺が死にかけた話をされても、先輩は困るだけだ。
それでも、この人なら、あらゆる意味で常識が通じないこの人なら……。
そう思っちまったのかもしれねぇなぁ……。
だから、話すのか？
あぁ話すさ、信じてくれるとか先輩はバカにしないとか、そう言う根拠があったわけじゃねぇ……。
でもこの人なら、普通の人とは違う価値観の中で生きてるこの人なら、的外れでもいいから答えをくれると思った。
あの時、死にかけの俺が見た先輩の瞳は、普通の人の価値観や理念を持った目じゃなかった事くらい俺にもわかる。
そして、今俺の前にいる先輩も、あの時と同じ目だ。
普通の人じゃたどり着けない狂気とも言える程に強い意志を宿した、そんな目をした先輩がいるだけで、話す価値があると思う……
きっとこの人は世界全てを敵に回しても、何時も通りの小さな笑みを浮かべて、自分のやりたい事をやり通す強さを持った人なんだよな。
そんな強い人なら、俺の中に渦巻く不安ごとぶっ飛ばしてくれるかもしれねぇ、そんな打算的な思考があったのは否定しねぇ。
だけど、純粋に先輩はそうするだけの価値がある人物なんだって、

俺の中の何かがそう囁くのも事実なんだよ。
そして俺は、少しずつだけど、俺の身に起こった……のかもしれない出来事を一つ一つ話した。
天野夕麻って言う可愛い女の子と出会って、告白された事。
最近デートに行った事。
そしてその終わりに……俺が殺された事。
思い出したくもないあの感覚が、俺の体に走って思わず眉が寄って目が細まるのを抑えきれないが、何とか話しきった。
痛みはないのに血が流れ出るあの感覚……身体中から大事何かが、ずるずると抜け出ていくあの感覚は、出来ればもう二度と味わいたくない。
そして、俺が腹に穴を開けて倒れた後、先輩やリアス先輩が来て……何故か俺は生きてた事。
起きて学校へ行ったら、紹介したはずの夕麻ちゃんの事を、元浜と松田が覚えてなかった事。
俺は覚えてるのに、夕麻ちゃんの存在の痕跡が、何一つ見当たらなかった事。
話が終わるまで、先輩は何一つ言葉を漏らさなかった。
ただ黙って、ここではない何処かを見ているような瞳をしたまま、静かに缶コーヒーを傾けてただけ。
この人ちゃんと聞いてんのかな？　とも思ったけど、その心配は無用だったみたいだな。
小さく、でも長く溜息の様な吐息を吐き出した先輩。
飲みきったんだろうな、缶コーヒーの空き缶を、今じゃ珍しい大口の缶捨てのゴミ箱へと軽く放った。
綺麗な弧を描いて飛んでった空き缶は……甲高い音共に、ゴミ箱の中へ吸い込まれた。
スゲェ何この人、絶対アレまぐれじゃない。
ろくに視線も寄越さないで投げたよね……この人ホントなんなの、超能力者なの……。
「そーだな……結論からズバッと言っちまうが……」

「……ゴクッ」
あぶねぇ……ふざけてる場合じゃなかった……。
割と身内に甘いとこのある先輩だけど、流石に俺から作り出しちゃったこの真剣な空気をぶち壊したら、ほぼ確実にボコにされるぜ……。
「お前が死にかけて、それでも次の日何の支障もなかったってのは、事実だ。だがまぁ、これについては近い内説明があるだろうからな、俺は何も言わねぇ。つーか、正確に言うとよく知らねぇんだよ。とりあえず、そういうもんだと納得しとけ」
先輩の言う事をまとめるなら……。
俺が死にかけて、でも生きてて傷一つないのはマジなんだけど、怪我一つなかった事とか死にかけた理由なんかはよくわからんから生きてて良かった万歳で納得しろって事か。
ＯＫ！　理解は出来んが納得はした。
よくわかんねぇって先輩が言うなら、そこで納得するしかねぇ、何故なら先輩がわからんものが俺に分かるはずないからだ！
この人勉強が出来るわけじゃないけど、妙に不真面目な授業態度な癖に、どうしてか毎回平均点位はきっちり抑えてくるらしい。
正直、勉強が嫌いで苦手と言ってもいい俺にとっちゃ、そんな上手い点数の取り方を教えて欲しいくらいだ。
だから多分、この人って機転が利くとか、頭がいいって言われる人なんだと思う。
そんな先輩がわかんねぇんだから、俺がいくら頑張っても無理無理……いや、勉強したくないとか頭がよくなる為の努力なんてめんどくせーとか思ってないよ？
ほんとほんと。
先輩の言葉に、うっす！　と元気よく答えた俺は、何も悪くない。
しかし、そんな事とは関係がなく、先輩の言葉には続きがあった。
それを聞いた俺の頭の中は、文字通り真っ白になった……。
「お前、その天野夕麻って奴にもう一度会いたいか？」
「……先輩？　な、何言ってるんです？」

「そのままの意味だ。また殺されるかもしれん、いや、今度は本当に死ぬかもな。それでも会ってみたいか？」
「いや、俺は……」
多分、心の何処かで、先輩が知るわけない。
だから的外れな回答が出てきて、それで笑って流されて……俺も気が楽になって、それで俺もいつも通りに戻れる。
そんな未来を期待してたのかもしれない。
だって、こうして問いかけてくれてる先輩に、俺は返す言葉がない。
こんな問いを寄越すって事は、先輩は夕麻ちゃんを知ってるって事で……会いたいかって問うって事は……。
先輩は、夕麻ちゃんのいる場所を……知っている？
「っ！」
「落ち着け、別に俺はあいつの味方ってわけじゃねぇ、かと言ってそうだな……。完全にお前の味方ってわけでもねぇ」
「どう、いう事ですか？」
「俺はいつだって俺自身の味方だ。必要なら誰にだって嘘も吐くし、誰だって殺してみせる」
そう言った先輩の瞳は、鋭い以前に冷たく、金属の様な温度の感じない瞳で……。
気がつけば俺の身体は震えが止まらず、ガタガタと鳴る膝を、力一杯両手で抑えるのが精一杯だった。
でも、そこでふっと空気が和らぐ。
「だがまぁ、ここは嘘を吐く場面でも、誰かを殺す場面でもねぇ。だから嘘は吐かねぇ。その上で、どうだ？　会ってみたいか？」
「そりゃ、もちろ……」
言葉を言い切る前に、あの時の感覚が完全に蘇った。
体中の血液が、腹に開いた穴から大量に流れ出ていく、不可避の死の感覚。
言おうとした言葉に逆らう様に、蘇った感覚に対して身体はそれに従った。
気がつけば俺は、意思とは関係なく首を横に振っていた。

そんな俺に対して、先輩は呆れるでもなく、叱責するでもない。
ただ、懸命だな、と肩を竦めるだけだった。
物語の主人公が俺で、ヒロインが夕麻ちゃんなら、ここはそれを乗り越えてでも会いに行って話し合って……。
そして最後は分かり合って、ハッピーエンドって流れのやつだろ？
けどあの死の感覚を味わって、その感覚が実際に俺自身が味わった感覚なんだと、先輩の言葉から現実のものだったとわかる。
その上でそれを乗り越えて会いに行くだなんて、正直どうかしてる。
少なくとも、俺には無理だ。
行ってはいけない。
今度こそ本当に、死は避けられない。
俺の中の何かが、そう叫んでいる。
そうなっても先輩は絶対に助けてはくれない、最初に死にかけた時は話が別だ。
何故なら俺に殺される意思はなかったし、先輩は偶然その場に居合わせただけ、だから結果的に助けてくれる事になった。
でも、俺から会いにいくと言えば、話は別。
先輩は他人が決めた事に対して、絶対に手を貸してくれない。
勿論目的の為に先輩の力が必要だったら、よほど嫌われてない限り、頼めば力を貸してくれると思う。
だけど、一度言った事を覆す事は認めてはくれないし、それをしたら絶対に先輩はこの先そいつの事を頼らない。
頼めば力を貸してくれるし、今まで通りに接してくれるだろうな……。
けど、先輩が誰かの助けを必要としてる時、絶対に退けない場面の時。
そう言う時に頼られる存在になる事は、多分もう二度と無くなってしまう。
今まで通りに接して、今まで通りに助けてくれて、でも絶対に大事な事は話す事はない。

そんな存在に成り下がってしまう。
だったら俺は、そんな存在に成り下がってまで、結果的に先輩の信用を失うやつになりたくない。
いつか、そんな時が来るのかどうかすらわかんねぇけど、先輩に頼られる存在になる可能性をこんな所で潰したくねぇ。
「まー、何か、アイツも色々考えてるみてぇだが……。そんときゃ適当にぶん殴っとけ」
「簡単に言いますよね……。俺夕麻ちゃんに殺されかけたんですよ？
そう簡単に対峙してぶっ飛ばせないですって」
苦笑と共に、先輩の言葉を否定し、ようやく俺も苦いコーヒーを飲み終わった。
ほんと、苦い話だった。
でも、俺じゃあ夕麻ちゃんに会いに行けないって事を、比較的冷静に見詰められたと思う。
こう言う理性的な判断って、多分俺一人じゃ下せないんだよなぁ……止めるにしても、先輩みたいに身体中から何か変な怖さが出てるような人じゃないと俺も多分止まんないだろうし。
別に人の言う事を聞きたくないとか、そう言う反社会的な思想なんて持っちゃいねぇ、けどこの人の言う事だけは聞かなきゃいけない。
そんな感じがあるんだよな先輩って、っーかそんな人じゃないと、俺も止まれないし止まりたくない。
多分先輩は、最後の最後で俺の暴走を止めてくれるリミッターみたいな、そんな人なんだな。
ホラ、よくあるじゃん？
いつもはのほほんとしてて、大抵の事には動じない、何してもいいよって言って結局許してくれる人。
でもさ、そんな人が、真剣にやめとけって停止を強制してきたらどう思うよ？
あ、この人がここまで言うんだから、それ相当やばいな……やめとこ……みたいな感じにならねぇ？　俺はなる。
ギャップって言うのかな、とにかく先輩は大体そんな感じの人なん

だよな。
……従わなきゃ、後がマジで怖いってのもあるけど。
具体的にどうなるかがわかんないとこが、先輩の一番怖い所だよな……。
さーって、とりあえずの結論も出たし、先輩に話も聞いてもらったし！
モヤモヤはするけど、問題を置いておく事は出来た気がするぜ。
「先輩、ありが……っ!? 何だ!?」
「はぁん？ 黒い羽？」
話に付き合ってくれた礼を言って、帰ろうとしたその矢先に、突然俺達の頭上に広がる……何だあれ？ 魔法陣……でいいのか？
浮かんだ魔法陣は一瞬で消えたけど……代わりに出てきたのは、紫の膜の様な何か、それが公園全体を覆う様に薄く広げられた。
同時にいくつも舞い落ちてくる、先輩の言った通りの……黒い羽。
そして俺はその光景を、知っている。
一瞬で記憶がフラッシュバックした俺が、口から発したのは、呆然とした声だ。
「また、羽……」
でも、今回落ちてきたのは羽だけじゃない……って言うか、落ちてきたじゃなく『降りてきた』が正しいのかもしれない。
長いロングコートに黒い手袋、黒い帽子。
あの時見た夕麻ちゃんよりも更に、黒の印象が強い黒の羽を持った男だ。
その男から出てきたのは、妙に仰々しくも明らかに俺達を見下している色が強い声で、上品な服と合った様な口調かもしんねぇ。
だけど、その調子には下品な品性が滲んでいる様にも感じた。
「ほう？ 珍しいな、こんな所に悪魔……と人間？ 悪魔と契約している者か？ 不浄な存在め」
やばい。
アイツはやばい。
夕麻ちゃんの時はわからなかったけど、今回は何故だかその事が

はっきりとわかる。
感情よりも先に、体の方があいつに対する恐怖を抑えきれない様に、ガタガタと意思とは無関係に震える。
クッソ！　どうしたってんだ！　俺の体は！
俺が自分の体の変化に焦っている間にも、この場に現れた黒い男は、羽を一度大きく羽ばたかせて地に舞い降りた。
俺の焦りはどんどんと大きくなり、恐怖も右肩上がり、くそくそっ！　動けよっ！　俺の体！
強くそう念じた瞬間、俺の体は意識がついて行く前に後方へと『吹き飛び』地面へと着地。
なんだこりゃ……おかしいとは思ってたけど、もう明らかに変だ。
一度地面を蹴っただけなのに、明らかに走り幅跳びの世界記録超えてねぇか!?
俺が後方に跳躍した瞬間、黒い男の鋭い眼差しが俺の体を刺し貫き、同時に男の手にはいつの間にか輝く光の槍。
あれは……夕麻ちゃんと同じ……。
「随分弱腰な悪魔の様だな。そちらの人間の方がよっぽど肝が座っていると見える」
俺を小馬鹿にしたようにせせら笑う男の言葉に、俺は思わず自分の前にいる先輩へと視線を送る。
えー……この状況で欠伸カマしてらっしゃる……あ、いや待て、何する気だ先輩。
おもむろに大股で歩いて、向かった先は……自販機!?　間違いねぇ！　この人この状況でコーヒー買う気だ！
先輩!?　せんぱーい!?　と、止まらねぇ!?
そしてちゃりんりゃりん、金入れて買ったのは……さっきと同じコーヒーじゃないですか！　先輩コーヒー好きすぎ！
マイペースにコーヒーを買い、プルタブに指を掛けて、カシュッ！
マイペースに中身を飲む先輩の姿に俺は驚愕するしかない。
同時に、超尊敬もした。
先輩、あんた、ほんとスゲェ人だよ……。

流石の黒い男も、ここまでされれば、肝が座っているとかではない事がわかったみたいだな……。
完全に超然としたような仰々しい雰囲気はなくなって、物凄い形相で先輩を睨んでる……先輩、あんたって人は……。
明らかに相手にしてない雰囲気の先輩に、黒い男が鼻息荒く声を荒げるのも仕方ない事だと思う。
「貴様っ！　舐めているのかぁ！」
「あ？　何だ？　自己満足の寸劇は終わったのか？」
「せんぱーい!?」
歯に着せぬ物言いってレベルじゃねぇ！　この人！
明らかに人間じゃない感じの黒男に向かって、この態度、憧れる！
そしてこの黒男もスゴい……何がスゴいってあれだ、先輩を目の前にしてのこの、物凄い小物感がスゲェ。
「たかだか人間風情がふざけおって……」
「その人間にすら舐められる堕天使風情が、何をえらそーに」
意趣返しスゲェ！
何時も通り小さく不敵な笑みを浮かべての先輩の挑発に、黒い男の顔はもう凄い事になってて、見てる分には超面白い。
皮肉には皮肉、悪意には悪意、挑発には挑発で返す先輩の姿は味方って視点からすれば心強い事この上ない。
この人なら大丈夫って、態度で教えてくれている。
「馬鹿にするのも大概にしろよっ！」
「この程度の挑発で激昂とは……器が知れる。呆れてものも言えねぇ、ってやつだな」
「ほざけ！　人間風情が！」
明らかに馬鹿にしたような先輩の溜息と共に、肩を竦めるその姿が勘に触ったのか、持っていた光の槍を全力で投擲。
はえぇっ!?　目で追いきれねぇ!?
「先輩!?」
その一筋の光の軌跡は、俺の一言よりも速く、先輩の下へと到達する……。

俺が見たのは、その光の槍に体を貫かれる先輩の姿……じゃなくて、不思議そうに手に持った光の槍をしげしげと観察している先輩の姿だった。
「これ、前にも見たが、どう言う原理なんだろうな……」
「な……に？」
黒の男が驚愕した様に声を上げてるけど、正直驚愕したいのは俺の方だぜ……今のは明らかに人が肉眼で捉えきれない程の速度だった。
それを止めて、尚且手に持っている事に驚愕もするけど……それ以上に驚いたのは、先輩が何をしたのか『全くわからなかった』事だ。
俺自身、変わった事を受け止めてからは、以前よりもモノがよく見えるようになった。
そんな視力をもってしても、今の一撃は完全には捉えきれてねぇ……にも拘わらず、先輩の動きはそれ以上に捉えられない動きだった。
それこそ、気がつけばと言う程あっさりと、先輩の手の中には槍があったんだ。
「ま、どうでもいいか、俺には使えねぇ代物だしな」
軽く言い捨てて、先輩は手に持った槍を、ぽいっと投げ捨てる。
その事に黒の男は驚愕以上の怒りを覚えたみたいだな、今ので既に先輩が普通じゃないってわかったのに、名乗り上げてまで先輩へと肉薄してる。
「我が名はドーナシーク！　貴様らを滅するものだ！」
「ドーナツシート？　油でも吸うのか？」
「ぶふぅっ！　せ、先輩、それ、ドーナツシートって名前じゃないですから……」
「あ？　そうか、ま、それぐらいてめぇはどうでもいい存在ってこった」
「っ!?」
もはや怒りで言葉も出ない状態みてぇだな、バカ正直にまっすぐ先輩に突っ込む黒男――ドーナツ……違ったドーナシーク。
怒りとプレッシャーを纏って、高速で接近するその姿にも、先輩は

動揺一つ見せる事はない。
再度生み出した槍を携えて、先輩へと肉薄したドーナシークは、槍を振り上げ――地面へと叩きつけられていた。
うっすらと笑みを浮かべてドーナシークを見下ろす先輩と、呆気にとられながらも怒りの視線で先輩を見上げるドーナシーク。
……い、今、何をやったんだ？
何て思っている間も、先輩の動きは止まらない、容赦しない。
起き上がろうと上体を起こしかけたドーナシークの腹に飛び乗り、振り上げた拳を打ち下ろす。
ただひたすらに浮かべた笑みのままドーナシークを見下ろし、打撃（パウンディング）打撃（パウンディング）打撃（パウンディング）打撃（パウンディング）打撃（パウンディング）……。
……え、えげつねぇ。
こ、この人ホント、容赦ってもんを知らねぇ……。
恐ろしい人だぜ……。
左右の両手に握り込まれた硬い拳を何度も打ち下ろされ、ドーナシークの顔の形は益々見る影もなくなっていく。
腹に乗った時に、両手を脛で地面に縫い付けられる様にされてるから、抵抗らしい抵抗も出来ずに呻き声を上げながらただ殴られてるだけのモノに成り下がってる……。
「グッ！　ごっ！　ぶっ！　がっ！」
「ほら、どうした？　そんなもんか？　堕天使ってのは、男だから本気（マジ）で容赦しねぇぞ？　抵抗しねぇと死ぬぞ？」
「先輩、抵抗しないんじゃなく、出来ないんだと思います……」
「あ？　そう？　じゃあ死んでろ」
その光景をただ呆然と見てるしかない俺の言葉に、適当に相槌を打つも、打ち下ろされる拳が緩む事はない。
俺の意識は、その光景に遠のきそうになるが、殴られてるドーナシークよりも気になる事があった。
それは、先輩の拳だ。
陽炎の様な……空気が歪んで見える靄の様なものが、先輩の拳にまとわりついてて、それを見る度に俺の背筋には冷水をぶっかけられた

様な悪寒が走る。
あれで殴られたら、今の俺じゃあ死は確実。
そう思わせるだけの何かが、先輩の拳にはあった。
ただひたすらに殴られ続ける堕天使らしい存在と、笑みを浮かべながら堕天使らしいそれを殴り続ける先輩と言う光景に、どうしようもないほどオロオロとしている俺。
だ、誰か、誰か先輩を止められるような人はいないのか!?
そう強く思った瞬間、俺を助けるような、天からの声が舞い降りた……いや、天からじゃないけど。
浮かんだのは赤い魔法陣？　そこから飛び出てきたのは、凛とした声だった。
「そこまでよ、それ以上その子……を……って、またなの？　真一」
「お？　リアスか。待ってろ、すぐ終わらせる」
突然現れたリアス先輩に、少しばかり驚いた様な表情を浮かべるも、直ぐにサンドバック（堕天使）を殴る作業に戻る先輩。
拳に大量に付着し、殴る衝撃で跳ね返って頬についた返り血がとってもキュート☆
……とか言ってる場合じゃねぇぇっ！
俺は恥も世間の評価すらかなぐり捨てて、思わず縋りついた……リアス先輩に。
「お、おおおお願いですリアスせんぱぁい！　霧咲先輩を止めてくださいっ！」
「そう言われても……どう言う状況かわからないし……」
「状況なんて後でいくらでも説明しますから！　俺もう怖くて仕方ないんです……霧咲先輩が！」
「まぁ、確かに怖いけれど……」
「姫島先輩でも構いません！　止めてください！」
何故か渋って動こうとしないリアス先輩じゃダメだ！　ここは駒王学園で、霧咲先輩と一番仲がいいと噂される姫島先輩しかいねぇ！
頼む！　俺の希望の星よ！　光れぇぇぇぇっ！
「無理ですわ」

神は死んだ！
微笑みを浮かべたまま安らかに逝かれたぁぁぁっ！
だがまだだ！　まだ誰かっ……。
そして視線をさまよわせた結果……小柄な影を捉える。
白いショートの髪に、小柄な体躯に細い手足、美少女には間違いない顔の作りをしてるけど無表情なのがちょっと……。
ではなく！
神は死んだ！
「もう、止められないのか……」
物悲しく俺が呟いた所で、物凄い衝撃が俺の体を貫くっ!?　主に脛からぁぁぁっ!?
「うぐぉぉぉっ!?　い、いてぇぇぇ！　泣きそうなくらい、もう泣いてるくらいいてぇ！」
「失礼な思考を感じました。だから蹴りました。反省はしていません」
「ちょっとぉっ!?　今脛蹴ったよね!?　脛はダメだよ！　脛は！」
今しがた俺の脛を蹴りつけたであろう小柄な美少女に、思わずガンくれるけど、怯んだ様子一つ見せない。
俺ってやっぱり、そんなに怖くないんだな……人相的にも、迫力的にも。
霧咲先輩ほどはいらないけど、やっぱりちょっとは威厳が欲しいな……男として。
ってそうじゃねぇよ！
「あ、霧咲先輩は止められません。あの堕天使が死ぬまで我慢してください」
「うぉぉぉいっ!?　君エスパー!?」
「いえ、戦車（ルーク）です」
「何の話!?」
ダメだ！この人たちダメだ！
いや、こんなスゴい人達をダメにさせる霧咲先輩の方がヤバイのかもしんねぇけど、それでも敢えて言う。

ダメだこの人たち！
「はぁ……飽きたわ」
「あら、真一。まだその堕天使、死んでないわよ？」
「弱いものイジメは趣味じゃねーんだ。やってみたけど何も面白くねぇ、ちょっと小突いたら倒れやがるし、反撃もしてこねぇし」
はー、やれやれ……なんて言いつつ、霧咲先輩は体を起こして立ち上がる。
ドーナシークとか言う堕天使らしいやつの顔は、もう見る影もなく膨れ上がり、いたる所から血が流れ出ている。
こりゃ、ちょっとしたホラーだよな……あれで死んでないのがまたスゲェ……。
やっぱ人より丈夫なんかね……。
そんな事を思ってる間に、先輩はマイペースに噴水に近寄って、手を突っ込んでザブザブと血を洗い流してる。
赤い色ではなく、僅かに浅黒い先輩の肌の色が見えた手を、ぷらぷらと水を切る様に振りながらリアス先輩達の下……つまり俺達の傍で立ち止まる。
先輩の視線の先には、リアス先輩たちがいて、先程までの光景なんか気にしない様な雰囲気で先輩の視線を受けて笑みを浮かべてる。
あー、何か、この人たちも普通じゃねーんだな……。
衝撃的な事実を知っちまったよ……あ、堕天使は……。
「赤い髪……ま、まさか、この地、が、グレモリー家の、管轄、だったとはな……グッ！」
「む、無理すんなよ……」
自分を殺そうとした奴に、思わず声をかけちまう俺だけど……。
仕方ないと思うんだよな……だって、明らかに死に体にも拘わらず、無理して仰々しくも見下した物言いとスタンスを保とうとしてるんだぜ？
かわいそうだろ!?
「わ、我が名は、ドーナシーク。再びまみえない事を、いの、ろう」
あ、駄目だこいつ話聞いてねぇ、よっぽど先輩から遠ざかりたいの

か？
それも仕方ないとは思うけどさ、人の話くらいは聞こうぜ、せっかく心配してやってんのにさ……。
再びまみえない事を祈ったドーナシークは、それこそ欠片も存在を残す事なく、その場から消え去った。
ほんと、なんだったんだ……あいつが消えた途端、この辺りの雰囲気も元に戻ったみてーだし……。
死の危険も雰囲気も全ては彼方の向こうに消えた今、俺の胸に飛来するのは、少しの物悲しさと同情の感情だけだったぜ……。
「おい、一誠」
「あ、はい！　先輩！」
「何だ？　妙に元気じゃねぇか」
元気なわけじゃないっすよ！
下手な事できねぇって再確認しただけっすよ！　等とは、口が裂けても言えない。
いやまぁ、言った所でこの人は怒んないだろうけどさぁ……なんつーの？　気持ちの問題ってやつだろ、ちゃんとしてれば殴られないよね？　みたいな。
態度だけでも保険かけとかないとな！
今の先輩に声を掛けられただけで背筋が伸びる俺の様子に、先輩自身はよくわかってないように首を傾げてみせるが、すぐにどうでもいいと思ったみたいだ。
その証拠に、先輩の口から出てきたのは、リアス先輩達についていけって言葉だった。
「お前がどうなって、どんな状況にいるのか、今からこいつらが説明してくれるからよ。こいつらについていけ」
「せ、先輩は？」
「俺か？　俺は帰って飯の用意だ。黒歌に飯作ってやんねぇと……たまには当番交代させるか？」
溜息と共にぼやきつつ、後頭部を軽く掻きながら、先輩はすぐに踵を返して公園の出口へと向かった。

その姿を止める人は、この場には存在しない。
そして、先輩の姿が消えた後には、少しばかり面白くなさそうな様子の姫島先輩とリアス先輩。
なんとも思ってなさそうな小柄な美少女に、引き攣ったように頑張って精一杯の笑顔を浮かべる俺だけが、その場に残ってしまった……。

神の器とは

普通に生きていれば知らないまま終わる事実や、知らなくていい事実など、この世界にはごまんと存在する。
そんな普通なら知らない事実や知らなくていい事実を、駒王学園オカルト研究部の部室で、兵藤一誠と言う一般の男子学生と言ってもいい少年が知らされてから数日。
またしても一誠が女性と出歩いている姿を目撃しつつ、今度は金髪か……などと面白そうに笑みを浮かべるような事があった真一だが、それと今の状況は何ら関係がない。
今度機会があったらいじり倒してやろうと心に決めつつ、今日も今日とてチャリンコを漕いで契約を取りに行く一誠を見送り、帰宅。
そして霧咲真一が住居としている二階建て一軒家――中古物件ではあるが……の中で、家主である霧咲真一は、ぼんやりと台所で食材と向き合う静かな時間を過ごしていた。
毎日の晩御飯の担当が何故か真一になっている事に、真一自身若干の不満はあるものの、仕方がないと割り切っている。
黒歌は料理が出来ないわけではないが、その後の洗い物を異常に面倒くさがるので、台所は主に真一が担当する事になっている。
同居人である黒歌には、その代わりに掃除や洗濯、必要なものがあれば買い出しなどを担当してもらっている。
昼の時間が縛られる真一には、どうしても時間の制約が存在する。
いわば適材適所、と言うやつだ。
たんたん、と軽快に食材を刻んでまな板を叩く音や、鍋の中で煮えたぎる何かが立てる音が飛び交う。
時折思い出しかの様に、炒め物が発する独特の音が混じり、辺りにはふわりと食欲を刺激する香りが漂い始める。
料理とはパズルの様なものだとは、誰が言ったのか……中々に面白い言葉だ、等ととりとめもない思考が真一の頭を過ぎる。
ただ静かに食材を刻み、如何に味と彩りと食感を組み合わせれば、美味いと言えるものが出来上がるのか……。

それだけを想像しながら料理を仕上げて、そして食べる事を同時に想像。
まさに、平和な一時の時間と言うやつだろう。
「殺った！」
「殺ってねぇよ」
上手いもん食ってりゃ世界は平和だろ、そう言ったのは自分自身だと自覚していた真一の料理を、まず怒声が邪魔をする。
そして真一の背後から襲いかかってきたのは、人と同じ大きさではあるが、体格だけ見れば男性ではなく女性。
しかしてその存在は人間ではなく、背中に存在する大きな黒い翼が、それを証明していた。
背後から真一に襲いかかった人物に向かって、真一は台所から目を離さないまま、女性が持っていた光る槍の柄尻を正確に踵で蹴り上げる。
その衝撃で思わず槍から手を離した女性の手首を、器用に片足の足首で絡め取るように捕縛。
地面へと引き倒すように足を動かし、女性はふんばろうとするも、足の力に腕では対抗できずに、台所の下にある収納スペースの扉を視界いっぱいに収めた状態で倒れこむ。
全身に力を入れて必死に起き上がろうとする女性の動き……しかし、真一の動きはそれよりも速く、まず手首を絡め取っていた足で地面に着いた手首を踏みつけて縫い止める。
手首の固定が終われば、もう片方の足で地面に頭を伏せている女性の首を、足首で刈り取る直前のように動かしてやはり固定。
野菜を洗う手を止めず、視線も野菜に固定したままで行われた攻防に対して、真一はなんの感慨も抱いてはいない。
恐らく、邪魔をされたとすら思ってもいない。
料理をする手は止まる事なく、ただ淡々と動き続けているが、その下では二本の足に動きを封じられてもがく女性が一人。
物凄い形相で真一を睨み上げており、当然真一はそれに気がついてはいるが、気に止める素振りもなければ視線を向けるつもりもないら

しい。
「今日もたかりに来たのか、出来るまでもうちょっと掛かるから大人しく待ってろ」
「そんなわけ無いでしょ!? アンタを殺しに来たのよ!」
「あー、はいはい。後で遊んでやるから静かにしてろ」
「ご主人さま～ん、私も遊んで欲しい、にゃ～?」
真一の足元でわめき散らす黒い羽を持った女性――レイナーレの言葉に、勿論真一は真面目に取り合ってなどいない。
そして、ちゃっかりいつの間にか猫モードの黒歌が、真一の肩の上にちょこりと居座っている。
バランスを崩す事なく料理を続ける真一も凄いが、落ちる事なく絶妙なバランスで揺れをコントロールし、体勢を保持している黒歌もまた凄い。
結局黒歌と真一にとって、このような体勢は日常茶飯事と言う事なのだろう。
個人の能力が日常に現れている事もそうだが、何年も続けている習慣のような、慣れた雰囲気がふとした瞬間に出てくるのだ。
その中で唯一日常の振る舞いではない枠に収まっているのは、当然と言うか、真一の足元で這い蹲っているレイナーレ。
美しく長い黒髪だが、何度も力いっぱい藻掻いた事が原因で、台所の床にはらはらと漆黒の扇の様に広がっている。
その様子を然るべき場所で見るならば艶やかで、扇情的な光景に映っただろうが、如何せんここは台所以外の何処でもない。
加えてレイナーレの表情自体も色気のあるものではなく、丸く大きくなったり切れ長へなったりと変化の忙しい瞳は、一般人が見れば逃げ出すほどに釣り上がっている。
言葉にならない程の威圧感を纏う視線も、やはり真一に届く事はないが、レイナーレに諦める様子はない。
髪が乱れようと服が乱れようと、真一へとぶつける殺気は本物だ。
最後のあがきなのか、固定されていない方の手に光の槍を生み出す。

しかしその瞬間、首を固定していた足が音もなく動いて、こつんと軽く槍を蹴飛ばされる。
無理な体勢で、しかもあまり力の入らない体勢で持っていた槍は宙を飛び、音もなく台所の床へと着地し消失。
レイナーレの必死の抵抗を歯牙にもかけない真一と、それでもと必死に足掻くレイナーレを冷静に見ていた黒歌は、いい加減呆れた様に溜息を吐く。
「いい加減諦めるといいにゃ」
「諦め、ないわよ！　私は人間、なんかに使われ、る……様な、存在じゃないのよ！」
「ご立派なプライドにゃけど、無駄無駄むーだにゃ。これは経験談にゃ、先輩の言う事は聞いとくもんにゃ」
みんにゃ最初は威勢がいいんにゃけどにゃ～……等と、レイナーレの様子を見ていた黒歌が、遠い目をし始める。
しかし、それを素直に聞けるなら、そもそももっと素直に真一の下についていると言う話だ。
そもそも、この状況はレイナーレが下につくように仕向けながらも、いつでも殺しに来い等と言った真一に原因がある。
悪魔のような契約もなければ、堕天使の様に上と下での絶対的な階位が存在するわけでもない。
裏切ろうと思えばいつでも裏切れる口約束であり、レイナーレの行動を縛り付けているのは、ただ純粋な真一への恐怖だけだ。
それを振り切れば裏切る事も可能だが、何故レイナーレが奸計を巡らせて密かに真一を葬ろうとしないのか？　それは簡単な事実だ。
要するにレイナーレは、心の何処か、思考の何処かで諦めてしまっているのだ。
この男の下から逃げるのは無駄な事だと、だからこそ、殺してしまえばお前は自由だと言う真一の言葉に従った。
つまり、レイナーレは真一に抵抗する素振りを見せながらも、既に屈してしまっている。
殺しに来いと言う言葉通りに殺しに掛かっており、私はまだ屈した

わけではないと、行動でもって自らに言い聞かせているに過ぎない。
その事を黒歌は正確に見抜いていた。
何故なら、それは黒歌自身も通った道だからだ。
最も、黒歌が恐怖を持っていたのは、真一の師に当たる人物だったが……。
それでも、最終的には真一は自らの師であり、黒歌の恐怖の対象だった人物を自らの手で葬り去った。
そうなれば、黒歌の中にあった恐怖による忠誠が、真一へと切り替わるのも不思議な話ではない。
唯一違うのは、直接的に黒歌へ手を下した人物ではないと言う点であり、逆に言えばそれがあるからこそ黒歌は真一と良好な関係を築けていると言える。
ならば、レイナーレはどうなのか？
真一の言葉を免罪符に、自らのプライドを守ろうとしているレイナーレは、既に心は折れて屈している。
それはすなわち、面従腹背の道を取らず、主から与えられる言葉を素直に実行する道を選び取ってしまったと言う事だ。
その結果レイナーレがどうなるのか……道としては二つしかない。
主の言葉通り行動では逆らいつつ、結局従ってしまっている差異に悩み、最後には壊れてしまう。
そしてもう一つは、プライドを捨てて素直に真一を主として認め、従うか。
結末が二つしか残されていない中で、レイナーレはどちらを選ぶのか……。
プライドを餌にして、真一の言葉に従ってしまった時点で、本当の自由など彼女にはなくなってしまったのだ。
既に逃れる方法など何処にもない事実に気がついたその時、彼女は一体どうするのか……。
（ま、予想はついてるにゃん）
内心でそう予想する黒歌だが、レイナーレが堕天使である事と、事実上既にどんな形であれ捕まってしまった彼女は遅かれ早かれ黒歌

の予想通りになる。
つまり予想とは言いつつも、黒歌の中ではほぼ確定事項として処理されている、と言った方が正しい。
天使であろうが堕天使であろうがその存在は、神と言う絶対的な支配者に対する隷属、依存、憎悪……。
呼び方は何でもいいが、天使や堕天使とは元来そう言った感情を向ける対象を求める存在であり、基本的には支配される側の存在なのだ。
そしてその性質は、感情の起伏が現れやすい女性に多い事を考えれば、レイナーレの未来などほぼ確定したようなものである。
黒歌の最初は威勢がいい、と言う言葉はこれらの状況も加味した言葉であるのだが、それが今のレイナーレに分かるはずがない。
「うーっし、出来た。食うぞー」
「待ってましたにゃん！」
暴れるレイナーレを軽くないしつつ、何品か料理を作り上げた真一の言葉に、一番最初に反応したのは黒歌。
すぐさま真一の肩から飛び降り、同時に人化し、音もなく席に着いている。
彼女の名誉の為に言うならば、決して食い意地がはってる訳ではなく、主の作る食べ物が好きなだけだ。
料理を運ぶ為に皿を手に取った真一は、足で固定していたレイナーレの体を、軽く蹴り飛ばす。
「あぅ……」
蹴り飛ばされたとは言っても、軽く転がされた程度故に、悲鳴を上げる程度ではない。
声が出るのは反射的に、と言うやつだ。
真一の拘束から解放されたレイナーレは、むくりと体を起こしながらも、真一を睨みつけて威嚇している。
当然と言うかそんな彼女の様子に反応する真一ではなく、マイペースに料理をリビングのテーブルの上に並べ、それが終わった所でようやくレイナーレを視界内に収めた。

「で？　食ってくのか？　食ってかねぇのか？」
「……もう用意してるじゃない」
「別に？　食わなきゃ俺が食うだけだ」
「私もにゃ」
せめてもの意趣返しと言ったような、弱いレイナーレの台詞に対しても、真一はあっけらかんと答えてみせる。
黒歌の言葉は、純粋に自分の食い扶持が増える所から来ている言葉で、悪意など欠片もない。
レイナーレのささやかな反抗すらも、霧咲真一は認めてはくれない。
どんな時でもどんな事でも、叩きのめされる時は徹底的に叩きのめされる。
どう足掻いても勝てない、勝たせてくれない真一の姿に歯噛みするレイナーレの視界に、テーブルに並べられて湯気を立てる料理が入ってくる。
同時に降ってくる真一の声。
「食わねぇのか」
「……食べるわよ」
追い打ち……と言えば大げさかもしれないが、それでも最終確認を取ってくる真一の言葉に、気がつけばレイナーレは言葉を返していた。
そして、溜息と共に真一と黒歌が席に着いているテーブルに、自らも着く。
こうやってなんだかんだと言いつつも、レイナーレが霧咲邸で食事をしていくのは、これが初めての事ではない。
非常に不本意な事ではあるのだが、今レイナーレの目の前にある料理は、美味しい。
装飾され、味にも気品があるようなものではない。
しかし、生きるのに必要な事だと教えてくれるような、どこかホッとする……そんな料理だ。
つまりどういう事かと言えば、単純にレイナーレは真一の作る料理

が好きだと言うだけの話。
　そんな料理に釣られて、テーブルに着いてしまえば最後であり、そこから交わした口約束の履行が始まる。
「さて？　んじゃ、聞かせてもらうかな。アーシア＝アルジェントとかいうシスターから神器（セイクリッド・ギア）を抜き取ろうとしてんのは理解した。そいつはどんな奴だ？」
「……別に、普通のシスターよ」
「はぁん？　じゃあ聞き方を変えるぜ？　その神器（セイクリッド・ギア）を手に入れた所で、お前、俺に勝てると思うか？」
「……」
　既にレイナーレの思惑と計画の概要を把握している真一は、純粋な疑問と共に言葉を投げるが、帰ってくるのは沈黙。
　それはつまり、アーシア＝アルジェントなるシスターが持つ神器（セイクリッド・ギア）を抜き取った所で、真一には勝てないと認めているに他ならない。
　彼女の目的は、抜き取った神器の力をある人物達に認めてもらい、そしてその寵愛を受ける事にあると言う。
　しかし、その為には真一の実質的な支配から逃れる事が大前提だ。
　そしてそれはその神器を抜き取った所で、叶わない目的であるとレイナーレ自身の様子がハッキリと語っている。
　レイナーレの様子に、結果どうなるのかを察した真一は、これみよがしに溜息を吐いて肩を竦めて見せる。
「だったら無駄な事はやめるんだな、やらない方が身の為だ。どうせこの地で問題を起こせば、リアスの逆鱗に触れる。そうなりゃてめぇに生き残る道はねぇ、一番いいのはこの件から手を引くこったな」
「無理よ。そうなれば集めた戦力は私を生かしてはおかないわ、死にたくないから私は不本意だけど、あなたの下についたのよ？　結果を見せてくれない？」
「馬鹿かてめぇ、てめぇで自身で死地に首突っ込む奴を助ける義理がどこにあんだ？　俺が助けてやるっつったのは、生きる為の行動をする奴に向けてだ。死にたがりの世話するつもりはねぇな」

いかにも詰まらなさそうにレイナーレへ返答しつつも、食う事を忘れてはいない。
よほどどうでもいい案件らしい。
黒歌としてもどうでもいいのか、レイナーレの話には耳も傾けず、主の言葉に反応して「死にたがりとかよく言うにゃ……」などと小さく不満の言葉を漏らしている。
勿論、真一はそんな黒歌の言葉を聞かなかった事にした。
だが実際真一の言葉通りであり、真一がレイナーレを下に置いているのは、彼女に生きる意志があり、その場で生き残るのに正しい道を彼女自身が選択したからと言うのも大きい。
堕天使側の事情を知る為の間者の役割が欲しかったのもあるが、完全にそれをさせるためには今回の件をどうにかするのが前提だ。
しかし、レイナーレは計画の中止は出来ないと言う。
今しがたどうなるかを真一が言ったにも拘わらず、だ。
そんなわざわざ死にに行く様な行動を取る人物の尻を拭う事など、口約束の内にも入っていない。
そして、レイナーレが集めた戦力は、遅かれ早かれリアスの保有する戦力に潰されると真一は確信している。
何故ならリアスは悪魔界では有名な名家の息女らしい事実があり、彼女は家の事を大事に思っている。
その事を鑑みれば、レイナーレ達はグレモリーと呼ばれる名家の敷地内で土足で踏み込み、あまつさえ好き勝手に草木を荒らす暴挙を行っているのと変わらない。
家の名に泥を被せて踏みにじるような行為を、リアス＝グレモリーが見逃すわけがない。
そうなれば……。
「全滅だな」
「冗談でしょ、たかが悪魔数人規模がまともに戦えるわけないわ」
「そう思うのは勝手だがな、ドーナツシート？　ドーナ……何とかがてめぇらの保有する戦力アベーレージだとすりゃあ、間違いなく全滅だな」

あれぐらいなら鼻歌歌いながらでも殺せる。
そう軽く言えるのは真一や黒歌の様な者達だけだが、それでもリアス達の戦力をレイナーレ達が止められるとは思わない。
鼻歌交じりとはいかないだろうが、確実にお前らは負ける。
真一はほぼ確信の領域で、そう言っているのだ。
中級堕天使として数えられているレイナーレが、全く見える事のない強さの頂に君臨している真一がそう言うのだから、その予測と分析はほぼ間違いない。
その上で真一は言っているのだろう、生き残りたければ道を選べと。
「どう、すればいいの？」
「敵を欺くにはまず味方から、基本だな」
「ご主人様、今超絶悪い顔になってるにゃ……」
「やかましい。まぁ、そうだな、今更引っ込みつかねぇならやっちまえばいい」
レイナーレは唐突にそんな事を言い始める真一の頭を、今この瞬間に限って言えば誰よりも心配していた。
当然だろう、自分の命がかかっている上に、その生命線は目の前の料理を頬張る男が握っているのだ。
そして何より、その男が計画の中止を促してきたというのに、今度は最後までやれという。
「あなた、頭大丈夫かしら？」
「失敬なやつだな、黒歌と揃って。まぁなんだ、神器（セイクリッド・ギア）ってのは、宿主から抜き取ると宿主は死ぬんだろ？」
「そうね」
「じゃあ、殺しちまえばいい」
「はぁ？」
そうすりゃあ、身内にも一応の示しはつくだろ、小さく笑みを浮かべながらそう言い切った真一。
そんな彼の頭を、やはりレイナーレは心配していた。
しかし、それで終わるわけがないのも、やはりまた霧咲真一と言う

人物だ。
「まぁ、それは見せ札ってやつだな。本命はこっからだ。嘘や裏切りってのは、お前らの得意技だろ？」
そう言ってニヤリと冷たく笑みを浮かべる真一に、レイナーレは背筋に冷たい悪寒が走り、黒歌は呆れた様に形の整った眉を歪めて溜息を吐く。
結局その日の話し合いは、飯時を過ぎても続行されて、日付が変わった頃にようやく解散と相成った。

昼下がりの駒王学園の廊下で、グラウンドを校舎の三階にある空き教室の窓から、ぼーっと見下ろす二人の男の影があった。
「せんぱーい、聞いてくださいよー」
「あんだー？　いっせー」
誰かと問われれば、兵藤一誠と霧咲真一だ。
ぼんやりと気の抜けた空気の漂う昼休み、早々に食事を終えた二人は、三階の空き教室に集まって外でたむろする数多の女子生徒を眺めていた。
そして、緩い雰囲気と共に出てくる一誠の言葉にも、締りは全くない。
一誠からの呼びかけに対する真一の返答も、昼休みの緩い雰囲気に身を任せたような、ぐだぐだな声音。
しかして、何処の学校にでも存在する雰囲気が充満する空気の中で、一誠の口から出てきたのは話題の種類として一般的とは思えない内容だ。
「この前また堕天使に襲われたんスよー」
「お前堕天使好きだなー」
「すげーいいおっぱいでした。美人だったし」
「マジかー、でもお前、金髪のシスターと歩いてたろ、あっちはどうすんだよ？　何かいい雰囲気だったけどよ」
「……えっ？　何で先輩が知ってるんすか」
「偶然見かけた」

どんな偶然っすか……等と力なく項垂れる一誠だが、最早真一の『偶然』と言う言葉を、身をもって体験しているからこそ慣れてしまったのかもしれない。
驚きつつも、強い衝撃を受けたような様子はない。
むしろ、存在を知っているならば話が早いとばかりな態度だ。
「シスターの子、アーシアって言うんですけど」
一誠の口から出てきた名前に、真一の眉尻が一瞬ピクリと動きを見せるが、その様子を一誠が察した様子はない。
そんな微細な動きで悟れと言うのにも、中々に無理な話ではあるが……。
結局出てきた名前に、表面上は何も反応する事はなく、静かに一誠の話を聞くスタンスをとり続けている。
一誠の方も、真一の様子を気にするよりも話を聞いてもらいたい気持ちの方が強かったのか、グラウンドをぼーっと見下ろす視線をそのままに言葉を紡ぐ。
「そのアーシアと、関わっちゃダメって言われたんすよ……部長に。教会関係者だから危ないって」
「あー、まぁ、あいつの言いそうな事だな……で？　それを俺に言ってどうしようってんだ？」
真一からのストレートな問いに、うーん……と腕を組み眉根を寄せて考え込む一誠。
昼休みの時間に響き渡る女子生徒の高く、遠い声が教室内に響き渡るが、結局考え込んでいた一誠が返した言葉は真一に何かを求める言葉ではなかった。
「思ったんスけど、多分俺は先輩に何かして欲しいわけじゃないと思うんですよ。リアス先輩の言う事はもっともだから、いいつけは守りたい。でも、アーシアの事も放っては置けない。多分これは俺がどうするか決める事だと思うんスよ」
そう言って顔を上げて真一を真っ直ぐに見据える一誠の顔は、正しく男の顔で、その表情を見た真一は面白そうに笑みを浮かべる。
ついこの間までエロい事や、誰かを羨む事しかしなかった普通の一

般男子生徒の兵藤一誠が、ここまでの意志を覗かせるまでになった。
それは偶然や異常なまでに濃い経験だけがそうさせるのではなく、その中の要因の一部に、神器（セイクリッド・ギア）の保持者であると言う側面がある事を真一は思い浮かべる。
すなわち兵藤一誠のこの成長は一誠自身が持つ器の発露であり、元々持っていた素質が異常な経験を切っ掛けに、花開き始めているだけに過ぎない。
後天的に身についたものではなく、元々一誠自身が持っていたものだという事だ。
その事実から考えれば、神器（セイクリッド・ギア）と言う物は、神の器と言われるものだけあって人を見る目だけは確からしい。
興味深い存在である一誠を見ながら、真一はそうぼんやりと考える。
「わかってんならそれでいい。てめぇの事はてめぇで面倒見ろって事だ。そうだな……お前は元々、人に使われる人間じゃないのかもしれねぇな」
「い、いやぁ、偉そうな事言ってますけど、まだ弱いっスから」
そう言って、ははは、と笑う一誠を真一は鋭い瞳を細めて見据える。
脳天気に笑う一誠を見る真一だが、自分自身が言った言葉に嘘はなく、純粋にそう思ったから言っただけの事である。
弱くとも上を見る事を忘れてはおらず、自分では動けない現状を理解しつつも、それでも誰かの為に何かをしてあげたい。
そう思う気持ちは、正しく真一の気質とは真逆の性質を持っている。
自分の為にと邁進する真一と、誰かの為にと輪を尊ぶ一誠。
真逆の二人だからこそ、似ている部分というものは存在し、故に一誠と真一は相性がいいのかもしれない。
誰かの為とは究極的には自分の為になり、自分の為とは究極的にはその逆である。
どちらの意思がいいか悪いかではなく、どちらかの意志を強く持っているかと言う事こそ、強くなる為には絶対に必要な資質なのだ。

こうはなれないと互いに思うからこそ、お互いを認め合いつつ、簡単には手を借りないと言う構図が完成している。
垣間見た一誠の器に、いつもの小さい笑みとは違う、不敵な笑みを浮かべた真一。
その真一から出てきたのは、確信とも言うべき自信を込めた言葉で、どこか楽しみにしているような色も存在した。
「間違いなく、おめぇは強くなるさ。俺が保証してやる、だからさっさとここまで上がって来い」
その真一の言葉に、一誠の背筋がぶるりと一度大きく震える。
恐怖からではなく、歓喜や高揚と言ってもいいそれが、心地よく全身を駆け巡った事による震えだ。
武者震いと言った方がいいのかもしれないそれを感じ、一誠の顔にも鋭さを感じる笑みが浮かび、真一を見返す。
そして、一誠が紡いだ言葉は、比較的静かな言葉。
一誠を真正面に捉えて、不敵な笑みを浮かべる真一を真っ向から受け止めて見返す一誠の言葉は、静かながらもしっかりとした強い意志を感じさせる。
「わかりました。その為には、まずやらない事があると、そう思ったっス」
「そうか、なら好きにしろ」
「はい！」
大きく返事をした一誠の顔には、既に昼休みの気怠い雰囲気など何処にもなく、力強い意志が漲った雰囲気で溢れていた。
ありがとうございました！　と大きな声で礼を言うと共に、真一に深く頭を下げた一誠は、テンションに身を任せた様に教室を意気揚々と出て行った。
そして残されたのは、真一のみであるが、彼の表情もまた満足そうな笑みを浮かべている。
一人になった教室の中で、またしても窓際に腕を置きつつ、グラウンドを見下ろす。
グラウンドできゃいきゃいと楽しそうにする女子生徒を見下ろし

つつ、ポツリと真一の口をついたのもまた、楽しそうな色を帯びた言葉だった。
「さぁて……リアスに話を通さねぇとな、どうなるかねぇ」
女子生徒の遠い声が響く教室の中、低くも小さく楽しそうな密かな笑い声が、誰もいない教室内の空気に溶けては消えた。